林 垣 内 遺 跡 発 掘 調 査 報 告

－三重県津市野田－

２０１２（平成２４）年１１月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県津市野田に所在する林垣内遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査の原因は、平成22年度広域河川改修事業（岩田川工区）である。当該調査にかかる費用は、三重県県土整備部が負担した。

3　当該調査及び整理体制は下記のとおりである。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
	調査研究Ⅰ課　　課長　森川常厚　　主査　奥田勝久
発掘作業受託	有限会社西武緑化
現地調査期間	平成22年9月22日～平成22年12月24日
調査面積	６５１㎡

4　調査にあたっては、地元自治会、三重県県土整備部河川・砂防室、津建設事務所、津市教育委員会のご協力を得た。

5　本書の作成は調査担当者が行い、文責は目次に示した。

6　本書の第２図は津市都市計画図を、第３図は津建設事務所の提供による事業計画図面を基に作成した。

7　本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8　本書で報告した遺跡の位置は世界測地系による座標で表記し、図面における方位はすべて座標北で示している。なお、津市野田付近の磁北は真北に対して６°50′西偏している。（平成19年国土地理院）

9　土層・遺物の色調は、「新版　標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修1999年版）を用いた。

10　本書に用いた遺構表示略記号は下記による。

ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝　　ＳＺ：遺物集積地

11　本書で使用した「弥生時代終末期」とは、上村安生が『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社2002年6月25日において設定した第Ⅵ様式とそれをやや降る範囲、赤塚次郎の編年する廻間Ⅱ式までを含む。

目　　次

Ⅰ．　前言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（奥田勝久）・・1
1　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2　文化財保護法等に関する諸手続・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
3　調査経過・・・1

Ⅱ．　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（奥田勝久）・・2
1　地理的環境・・2
2　歴史的環境・・2

Ⅲ．　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（奥田勝久・森川常厚）・・7

Ⅳ．　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（森川常厚）・・11
1　ＳＤ12下層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
2　ＳＤ12出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
3　ＳＤ13出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
4　ＳＤ10出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
5　ＳＺ11出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
6　ＳＫ９出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
7　包含層他出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

Ⅴ．　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（パリノ・サーヴェイ株式会社）・・63
1　試料・・63
2　分析方法・・63
3　結果・・67
4　考察・・70

Ⅵ．　結語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（森川常厚）・・73
1　ＳD10・12・13の時期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
2　ＳD10・12・13の性格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
3　変遷・・74

挿図目次

第1図　遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第2図　遺跡地形図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第3図　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第4図　遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・5～6
第5図　調査区土層断面図 ・・・・・・・・・・・・5～6
第6図　SD10・12・13、SK9遺物出土位置図 ・・・8
第7図　SD10土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・9
第8図　SD12遺物出土状況図 ・・・・・・・・・・・・9
第9図　SD12下層出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・12
第10図　SD12出土遺物実測図① ・・・・・・・・・・13
第11図　SD12出土遺物実測図② ・・・・・・・・・・15
第12図　SD12出土遺物実測図③ ・・・・・・・・・・16
第13図　SD12出土遺物実測図④ ・・・・・・・・・・17
第14図　SD12出土遺物実測図⑤ ・・・・・・・・・・18
第15図　SD12出土遺物実測図⑥ ・・・・・・・・・・20
第16図　SD12出土遺物実測図⑦ ・・・・・・・・・・21
第17図　SD12出土遺物実測図⑧ ・・・・・・・・・・22
第18図　SD12出土遺物実測図⑨ ・・・・・・・・・・23
第19図　SD12出土遺物実測図⑩ ・・・・・・・・・・25
第20図　SD12出土遺物実測図⑪ ・・・・・・・・・・26
第21図　SD12出土遺物実測図⑫ ・・・・・・・・・・27
第22図　SD12出土遺物実測図⑬ ・・・・・・・・・・28
第23図　SD12出土遺物実測図⑭ ・・・・・・・・・・29
第24図　SD12出土遺物実測図⑮ ・・・・・・・・・・30
第25図　SD12出土遺物実測図⑯ ・・・・・・・・・・31
第26図　SD13出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・33
第27図　SD10出土遺物実測図① ・・・・・・・・・・35
第28図　SD10出土遺物実測図② ・・・・・・・・・・36
第29図　SZ11出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・37
第30図　SK9出土遺物実測図① ・・・・・・・・・・38
第31図　SK9出土遺物実測図② ・・・・・・・・・・40
第32図　SK9出土遺物実測図③ ・・・・・・・・・・41
第33図　SK9出土遺物実測図④ ・・・・・・・・・・42
第34図　SK9出土遺物実測図⑤ ・・・・・・・・・・43
第35図　包含層他出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・44
第36図　珪藻化石群集 ・・・・・・・・・・・・・・・66
第37図　花粉化石群集 ・・・・・・・・・・・・・・・69
第38図　植物珪酸体含量 ・・・・・・・・・・・・・・71

表目次

第1表　遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・46～62
第2表　珪藻分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・64～65
第3表　花粉分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第4表　植物珪酸体含量・・・・・・・・・・・・・・・・70

写真目次

写真図版1　・・・・・・・・・・・・・・・・・・調査前風景
・・・・・・・・・・・・・・・・・・調査区全景
写真図版2　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・SD12
・・・・・・・・・・・・・SD12遺物出土状況
写真図版3　・・・・・・・・・・・・・SD12遺物出土状況
・・・・SD12（207・380・118）遺物出土状況
写真図版4　・・ SD10・12・13の分岐点からSD12を望む
・・ SD12からSD10・12・13の分岐点を望む
写真図版5　・・・・・・・・・・・・・・・・SD12・SK17
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・SD13
写真図版6～25 ・・・・・・・・・・・・・・・・・出土遺物
写真図版26　・・・・・・・・・・・・・・・・・・珪藻化石
写真図版27　・・・・・・・・・・・・・・・・・・花粉化石
写真図版28　・・・・・・・・・・・・・・・・・植物珪酸体

Ⅰ．前　　言

1　調査に至る経過

県管理河川の治水安全度向上を目指す河川改修事業は、岩田川においても実施中である。この事業の照会を受けた三重県埋蔵文化財センターでは、当該地域は国道23号中勢バイパス建設事業に伴う発掘調査が継続されている等、多くの埋蔵文化財が包蔵されているとし、岩田川工区内9,000㎡を対象に埋蔵文化財の保存協議を開始した。協議の結果、埋蔵文化財の状況を把握するための確認調査を津建設事務所の労務提供を得て実施することになった。調査は、平成12年10月13日・12月１日、平成13年1月23日・25日・２月２日の５日間に８㎡程度の調査坑を32ヵ所設定して行った。その結果、梁瀬遺跡では一部で遺物包含層が検出され、林垣内遺跡でも右岸側で遺跡の縁辺部と推測されるものの遺構等を検出した。なお、岩田川左岸側では過去の護岸改修工事等による地形改変が激しく遺構・遺物は確認できなかった。これにより梁瀬遺跡600㎡、林垣内遺跡700㎡については保護措置が必要と判断し、平成13年３月30日付教埋第448号で公共事業総合推進本部事務局長公共事業推進審議監へ通知した。

梁瀬遺跡については平成18年5月25日、平成19年11月10日の2回に分けて工事立会を実施したが、顕著な遺構・遺物は確認されず、河川改修工事は完了している。一方の林垣内遺跡は、平成22年３月４日の協議において平成23年度に本調査を実施することになり、調査現場への進入路や廃土置場等諸問題を解決した後の9月頃から調査を開始する計画となった。年度が明けた平成22年4月１日、公共事業総合推進本部事務局長から教育委員会社会教育・文化財保護室長へ発掘調査の依頼があり、同日付で三重県埋蔵文化財センター所長から実施の回答を行った。

2　文化財保護法等に関する諸手続

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。

○　三重県埋蔵文化財保護条例第48条第１項

・平成23年４月22日付　津建第49号

三重県知事から三重県教育委員会教育長あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

○　三重県埋蔵文化財保護条例第48条第２項

・平成23年５月12日付　教委第12－4009号

三重県教育委員会教育長から三重県知事あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」

○　文化財保護法99条第１項

・平成22年11月８日付　教埋第260号

三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて

「埋蔵文化財発掘調査の報告について」

○　文化財保護法第100条第２項

・平成23年２月22日付　教委第12－4416号

三重県教育委員会教育長から津警察署長あて

「埋蔵文化財の発見について（通知）」

3　調査経過

現地での作業は諸準備を整えつつ、調査予定地の草刈から開始した。廃土置場が調査区の東側のみであるため、東西72ｍの調査区を２分割し、西側半分の調査を先行し、その後に東側半分の掘削を行う工程で実施した。10月12日午後から西側半分の表土掘削を重機で行い、14日に終了、地区設定等を行った後、10月18日から人力による包含層・遺構掘削を開始した。多くの撹乱や深い遺構掘削に時間を費やしたが、11月4日に遺構掘削をほぼ終えたため、同日午後から東側半分の表土掘削を開始した。表土掘削は８日に終了し、10日から26日で東側半分の包含層・遺構掘削を終了、週の明けた29日から写真撮影の準備に入り30日と12月１日の２日間で調査区全体の写真撮影を行った。その後、実測の準備を進めつつ12月5日には現地説明会を実施し、75名の参加を得た。実測や土壌サンプルの採取を終えたのは12月９日で、以降、撤収作業となった。

Ⅱ．位置と環境

1　地理的環境

林垣内遺跡（1）は津市野田に所在し、野田集落の北西側に広がる。標高は６ｍ程度である。

津市は三重県のほぼ中央に位置し、東側は伊勢湾を臨む。西側には、旧伊勢国と旧伊賀国の境となる布引山脈が南北に連なり、それを源とする幾筋もの河川が東流し伊勢湾へ注ぎ込む。林垣内遺跡近辺では、全長11.7kmほどの比較的小規模な岩田川や、この地域では大河の安濃川が流れ、北側の見当山丘陵から南側の半田丘陵にかけての幅3kmの間に肥沃な沖積平野を形成し、伊勢平野の一部を構成している。

丘陵に挟まれつつ流れ下る岩田川が伊勢平野に出たあたりの右岸に林垣内遺跡が位置する。南側には標高 40 m足らずの低い半田丘陵が東西に延びるが、北に開く開析谷により幾つかに分断される。林垣内遺跡の東西にも開析谷が入り込み、結果的に北に延びる舌状丘陵の先端部に占地することになる。南から北へ緩やかに傾斜し、北端部は沖積平野に埋没し不明瞭である。岩田川は遺跡の北端部でこの丘陵を開析して横切り、水面までの落差は３ｍ以上を測る。

遺跡には畑地が広がるが、以前は水田として利用されていた[1]ようである。周辺は住宅団地等の開発が進み、本来の地形が判別でき難くなりつつある。

2　歴史的環境

林垣内遺跡の周辺には弥生時代から中世にかけての様々な遺跡がみられるが、その中には発掘調査された遺跡も多い。当遺跡の北東2.5km、安濃川左岸の沖積平野に広がる納所遺跡（２）は昭和48年に発掘調査され、弥生時代前期から後期に至る伊勢平野で最大規模の集落跡である[2]ことが判明した。やや遡った同じく左岸の亀井遺跡（３）では、土坑から弥生中期の土器がまとまって出土し、異形の双脚壺が注目されている[3]。さらに2km 上流の標高30～40 mの見当山丘陵上に立地した大城遺跡（４）では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居や方形台状墓などが検出され、線刻土器も出土している[4]。

一方、南側の半田丘陵では２ヶ所で墳丘墓が調査されている。大ヶ瀬弥生墳墓[5]（５）と高松弥生墳墓[6]（６）で、両者とも弥生後期前半の墳丘墓である。前述した大城遺跡の方形台状墓を含め、この地域での古墳時代への胎動[7]が注目される。

津市街の西郊を南北に縦断する中勢バイパスの建設工事に伴い昭和63年から平成16年にかけて見当山丘陵から半田丘陵にかけて縦断的に多くの遺跡が発掘調査された。長遺跡（７）は安濃川左岸の見当山丘陵斜面に弥生時代中期の竪穴住居が160棟密集して検出され[8]、山籠遺跡[9]（８）でも中期、宮ノ前遺跡[10]（９）では後期の竪穴住居が検出されている。沖積平野では森山東遺跡（10）で水田跡が上下２層で検出され、下層のものは弥生中期以前と考えられている[11]。また、隣接する太田遺跡（11）からは銅鐸形土製品が出土し[12]、蔵田遺跡（12）からは弥生後期の「合掌形」と呼ばれる井堰が検出されている[13]。この他にも松ノ木遺跡[14]（13）・位田遺跡[15]（14）・替田遺跡[16]（15）・弐ノ坪遺跡[17]（16）から弥生時代中期また後期の竪穴住居・方形周溝墓等が検出されている。

このように安濃川左岸の見当山丘陵から岩田川右岸の半田丘陵に至る広範囲に濃淡はあるものの弥生中期から後期の遺跡が広がっていることが確認された。弥生時代前期に納所遺跡で居住が始まり、中期以降では多くの人口を保有していた地域とすることができる。

最後に半田丘陵で発見された銅鐸について触れておくことにする。津藩の学者である石川之褻の『銅鐸考』には「往年宝暦ノ頃カトヨ安濃郡野田村ノ農次右衛門トイヘル者其屋後ノ竹林中ニテ掘得タル」と記され、江戸時代に野田集落ちかくの竹林から出土したことが分かる。この銅鐸は谷川士清を経由して高田派本山専修寺に収められた[18]。新段階の三遠式銅鐸で、三重県指定有形文化財である。神戸集落の南方の丘陵裾でも大正時代に開発に伴って銅鐸が発見されている。こちらは銅鐸としては古い段階のもの[19]で、現在東京国立博物館に保管され、出土地点（17）は三重県指定史跡である。

【註】

① 地元古老からの聞き取りによる。

②・三重県教育委員会『納所遺跡範囲確認調査報告』1976
・三重県教育委員会『納所遺跡発掘調査報告』1980.9

③ 三重県教育委員会『昭和47年県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1973.3

④ 安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会『大城遺跡発掘調査報告書』1998.3

⑤ 三重県教育委員会・日本道路公団名古屋支社『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ』1973

⑥ 津市文化財保護協会『高松弥生墳墓発掘調査報告』1970

⑦ 田中秀和「方形台状墓」『三重県史 資料編 考古1』三重県 平成17年9月30日

⑧・津市教育委員会『長遺跡発掘調査報告』1989
・三重県埋蔵文化財センター『長遺跡発掘調査報告』2000

⑨ 三重県埋蔵文化財センター『大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』1995.3

⑩ 前掲⑨に同じ

⑪ 三重県埋蔵文化財センター『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』1993

⑫ 前掲⑪に同じ

⑬・三重県埋蔵文化財センター『蔵田遺跡発掘調査報告』1999.10
・津市教育委員会『三重県産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報』1993.3

⑭ 前掲⑪に同じ

⑮ 三重県埋蔵文化財センター『位田遺跡発掘調査報告』1999.3

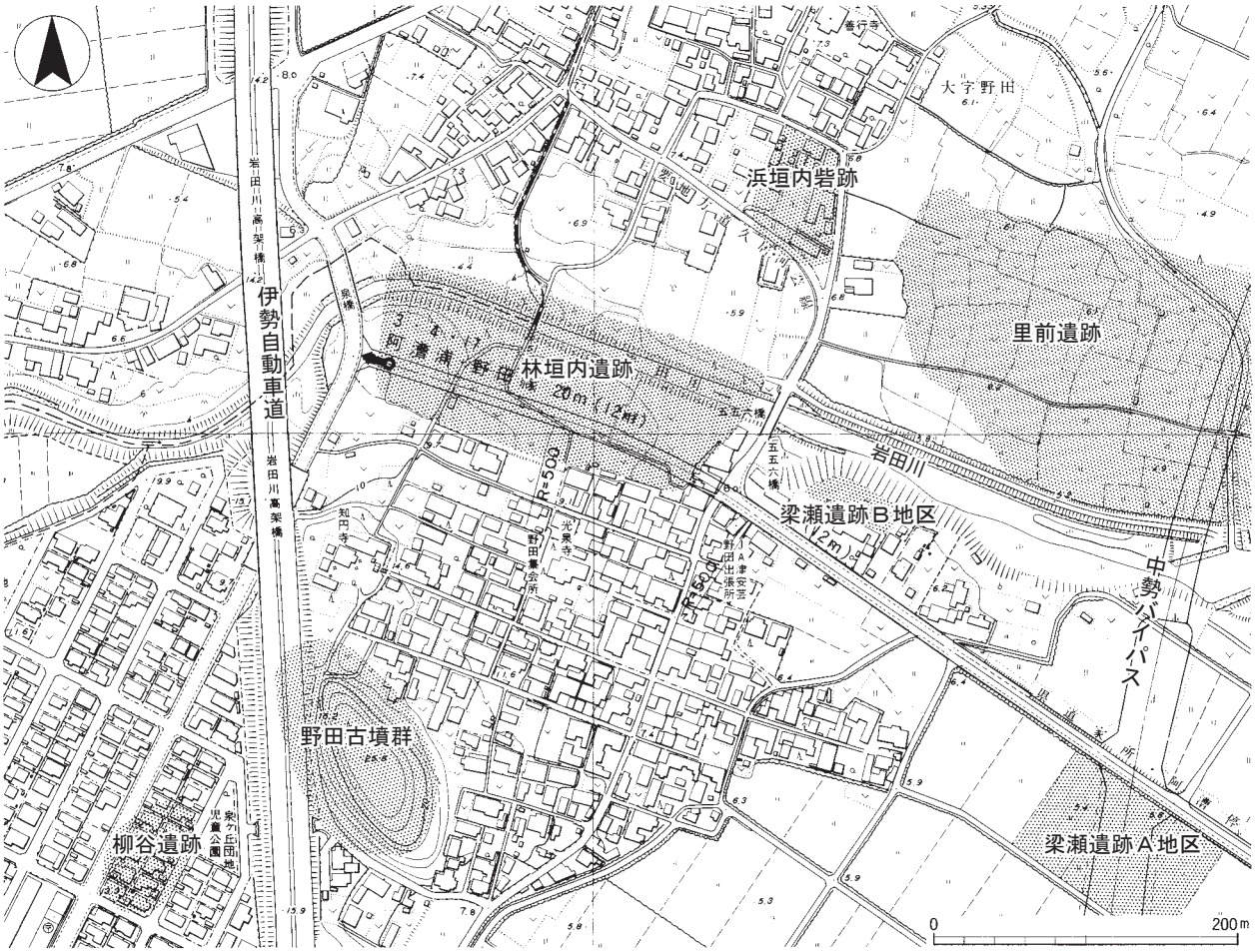
⑯ 三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡（第1・2次）発掘調査報告』2005.3

⑰ 三重県埋蔵文化財センター『弐ノ坪遺跡発掘調査報告』2005.3

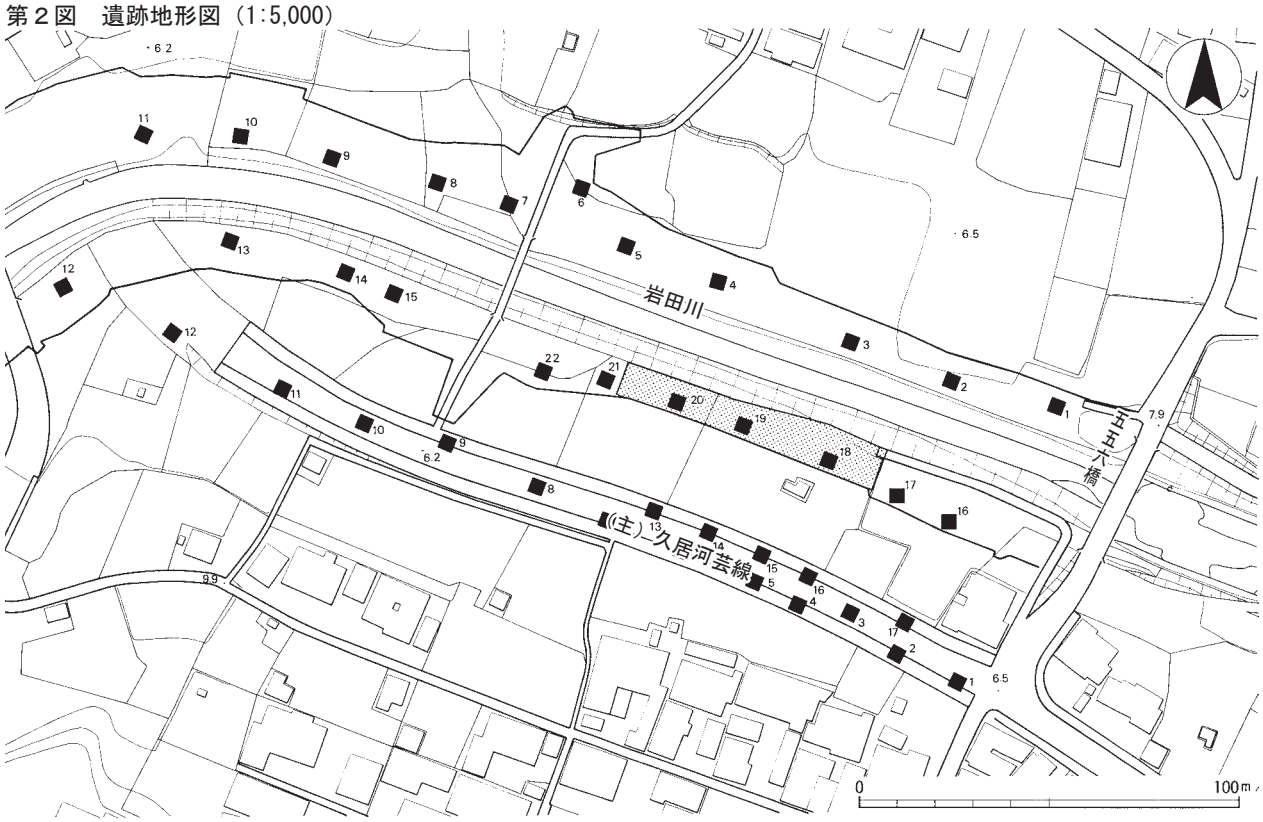
⑱ 小玉道明「三重の考古史」『三重県史 資料編 考古2』三重県 平成20年3月31日

⑲ 新田剛「銅鐸」『三重県史 資料編 考古1』三重県 平成17年9月30日

第1図 遺跡位置図（1:50,000）〔国土地理院「椋本」「白子」「津市西部」「津市東部」1:25,000より作成〕

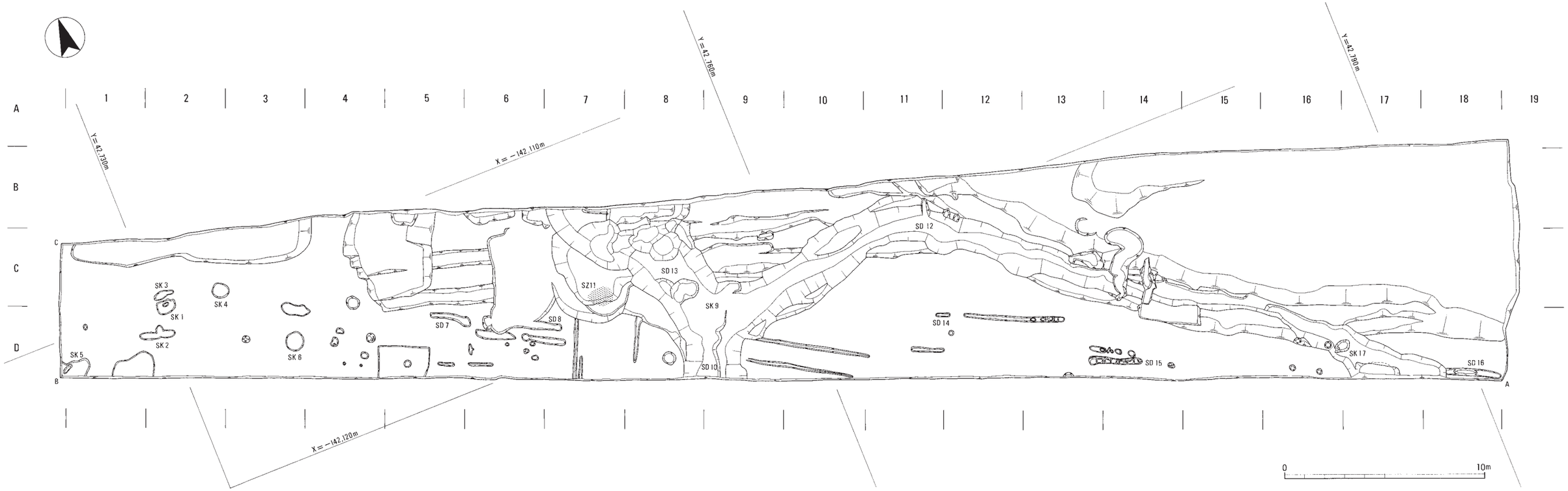


第２図　遺跡地形図（1:5,000）

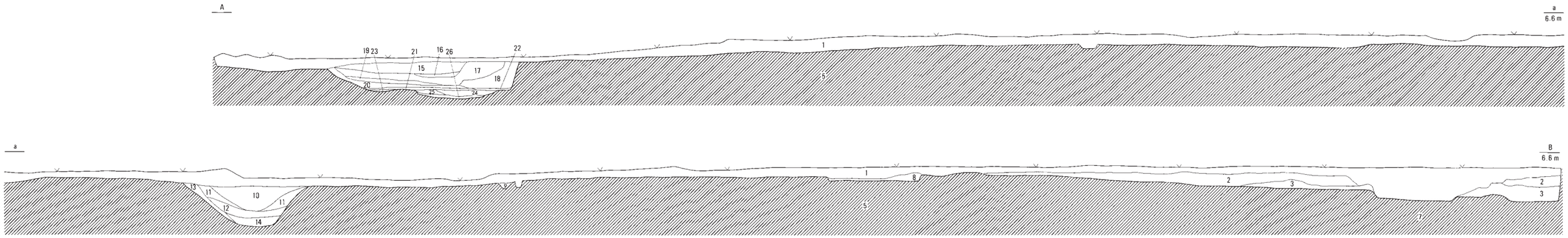


■ = 確認調査坑

第３図　調査区位置図（1:2,000）



第４図　遺構平面図（1：200）



1．褐灰色土 <10YR5/1>（耕作土）
2．にぶい黄褐色砂質土 <10YR4/3>（近年の造成土）
3．黒褐色砂質土 <10YR3/1>（近年の造成土）
4．褐色砂質土 <10YR4/4>（近年の造成土）
5．明黄褐色粘質土 <10YR6/8> に黄灰色 <2.5Y6/1> が混じる（検出面）
6．にぶい褐色砂質土 <7.5YR5/4> に灰白色礫層 <5Y8/2> が混じる（近年の造成土）
7．にぶい褐色砂質土 <10YR5/4>（検出面）
8．黒褐色土 <10YR3/2>（確認調査坑埋土）
9．淡黄色粘土 <2.5Y8/3>（撹乱）
10．黒褐色粘土 <10YR3/2>（SK9 埋土、炭化物沈殿・土器多含）
11．暗褐色粘土 <10YR3/3>（SD10 埋土）
12．黒褐色粘土 <7.5YR3/2>（SD10 埋土、炭化物沈殿・土器多含）
13．浅黄橙色粘土 <10YR8/4>（SD10 埋土）
14．褐灰色粘土 <10YR6/1> に白色砂を含む（SD10 下層埋土）
15．褐灰色粘土 <5YR4/1>（SD12 埋土、炭化物沈殿・土器多含）
16．褐灰色粘土 <5YR5/1>（SD12 埋土、土器多含）
17．にぶい黄橙色粘土 <10YR6/3>（SD12 埋土）
18．にぶい黄橙色粘土 <10YR7/3>（SD12 埋土）
19．褐灰色粘土 <10YR5/1>（SD12 埋土、土器多含）
20．黄灰色粘土 <2.5Y6/1>（SD12 埋土）
21．明赤褐色粘土 <2.5YR5/6>（SD12 埋土、18 に鉄分沈殿）
22．明赤褐色粘土 <2.5YR5/6>（SD12 埋土、20 に鉄分沈殿）
23．灰白色粘土 <10YR7/1>（SD12 埋土）
24．褐灰色粘土 <7.5YR5/1>（SD12 下層埋土）
25．褐灰色粘土 <10YR6/1>（SD12 下層埋土、炭化物含）
26．明青灰色砂質土 <5PB7/1>（SD12 下層埋土）

第５図　調査区土層断面図（1：100）

Ⅲ．遺　　構

調査区内は地形改変が激しく、近代以降、造成が行われた様子が伺える。既述したが、地元古老からの聞き取りによれば、調査区近辺は水田であり、南側の丘陵に設けられた溜池を水源としていた。しかし溜池の事情により水田から畑地に土地利用を変化せざるを得なかったようで、川に沿う棚田状の水田に盛土されている。しかし、この造成は近年の工事に比べれば簡易なもので、調査区北東部では造成後も窪地であった。このため、多様なゴミが捨てられる状況である。

遺構検出は黄灰色が混じる明黄褐色粘質土上面で行った。前述した状況のため、調査区南部では厚さ20～30cmの耕作土直下が検出面となり、耕作土の薄い地点では地表から僅か10cmで検出面に至る。調査区北部では、検出面までの深さは60cm以上を測るが、この間の地層は既述したように近年の造成土である。また、調査区南西部では検出面とした黄灰色が混じる明黄褐色粘質土さえも削り取られ、その下層のにぶい褐色砂質土上面で遺構検出を行っている。

調査の結果、弥生時代終末期の二股に分かれる溝や、それらと重複する土坑等が検出された。この他には、検出面が浅いために随所で現在の畑作に伴う作用が検出面に及んでいる。ＳＫ１・３・４・６の円形の土坑は肥溜等の貯蔵施設、ＳＫ２、ＳＤ７・８・14・15・16等の溝は耕作溝や排水溝、その他の柱穴状の遺構は野小屋等の痕跡である。また、ＳＫ５は造成時の痕跡、調査区北東部の一段低い平坦部は畑地以前の水田の形態を表すものと考えられる。

なお、非常に固く締まった暗褐色や赤褐色のブロック状の粘土が幅１ｍの溝状に２条、東西に延びる。粘土は厚さ10cm未満で、検出面をやや掘り下げて充填されている。２条が並行して直線に延び、両者の間隔は芯々で２ｍである。近代以降の瓦を含むため調査対象外としたが、既述した造成時に複線に設置された手押しトロッコの路盤かもしれない。

ＳＤ１０（第６・７図）　調査区中央部南端で検出した幅約３ｍ、検出面からの深さ約１ｍを測る溝である。２ｍほど北進した後、二股に分かれる。東側へはそのままＳＤ12となり、両者一体で円弧状に巡る溝を構成する。一方、北進する方は、そのままＳＤ13となる。緩やかに蛇行しつつ調査区外へ続き、岩田川へ落ち込む様相を示す。断面形はＵ字状を呈し、そのままＳＤ 12・13 につながる。

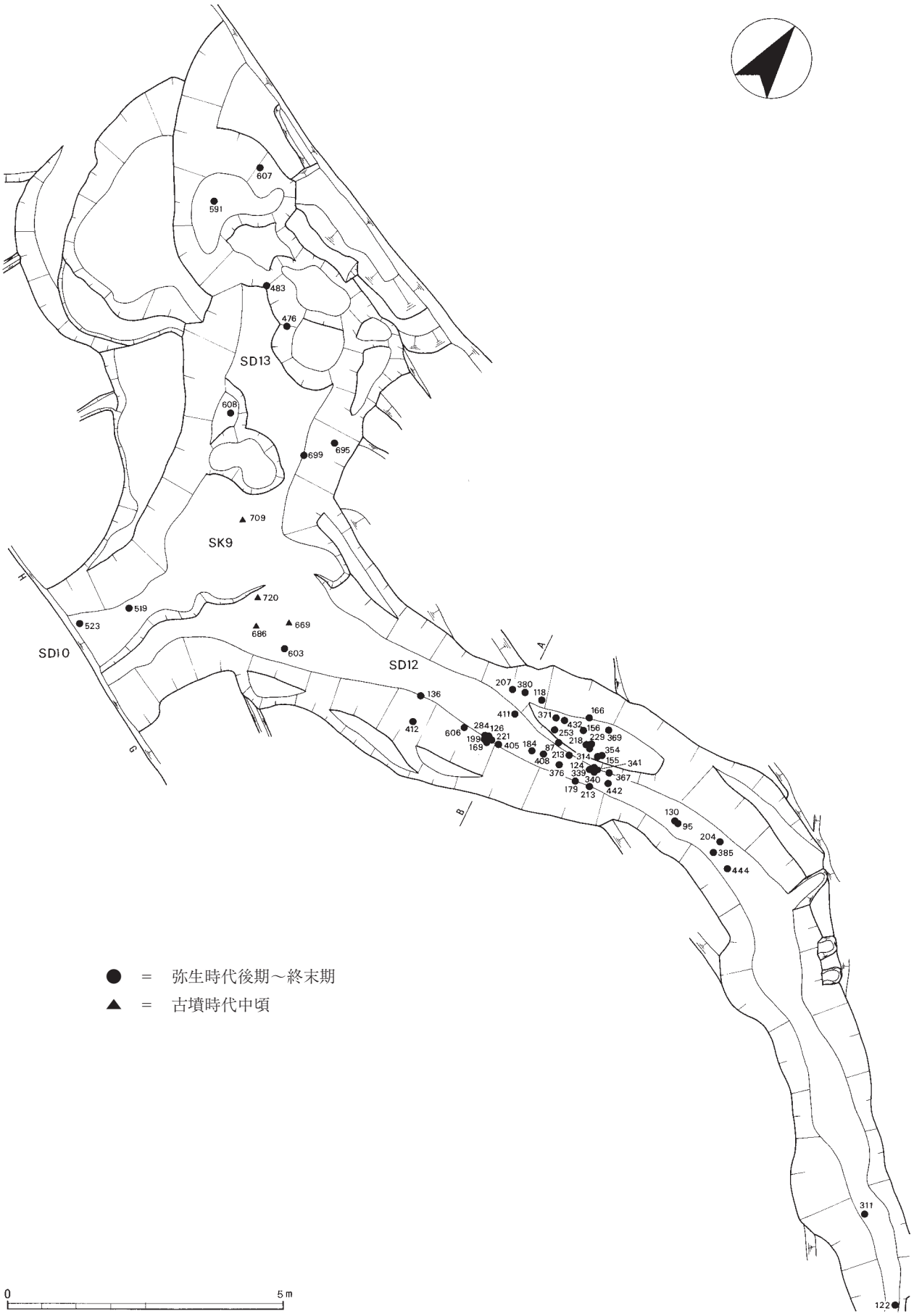
埋土はおおきく３層に分かれる。最下層には厚さ30cmの淡色系の褐灰色粘土が溜まる。この層の遺物の包含は他の層に比べ極端に少なく、底との間には微量の白色砂を挟んでいる。この砂のため、掘削時には溝底からの剥離が容易であった。おそらく若干の流水があったものと考えられ、現在でもこの深度で湧水点に達している。中・上層とは大きく色調が異なるため、この層から出土した遺物を「下層出土」として区別した。

中層部には厚さ20cm程度の黒褐色粘土が堆積し、弥生時代終末期を中心とする土器を多く包含しているが密集するほどでもない。土器は完形ちかくまで接合できるものもあるが埋納された様子はなく、投棄されたものと考えられる。層内には部分的に厚さ1cm未満の炭化物の堆積層があり、湿地状を呈する時期が２回程度あったことが分かり、湿地や乾燥を繰返していたようである。

上層は中層に酷似する黒褐色粘土で、平面での識別は困難である。したがって層位による発掘はできなかった。やはり弥生時代終末期の遺物を多く包含しているが、古墳時代中頃の土師器や須恵器も含む。厚さは60cmを測るが幅は2.4mに縮小し、一回り小さい溝として古墳時代後期まで存続した可能性も考えられる。中層と同様な炭化物の堆積層も認められ、湿地状を呈する時期があったようである。

なお、溝の東岸から最も早く埋没する浅黄橙粘土がある。この層はＳＤ 12へも 10 ｍほど続いており、円弧状の内側が最も早く埋没を始めたことになる。しかし人為的な埋め戻しと判断できるほどのものでもない。土質や色調は検出面と類似しており、埋土の浸透による変色の可能性も残る。

ＳＤ１２（第６・８図）　弧状に延びる溝で、東側は調査区外へ続き、西側はＳＤ10 につながる。

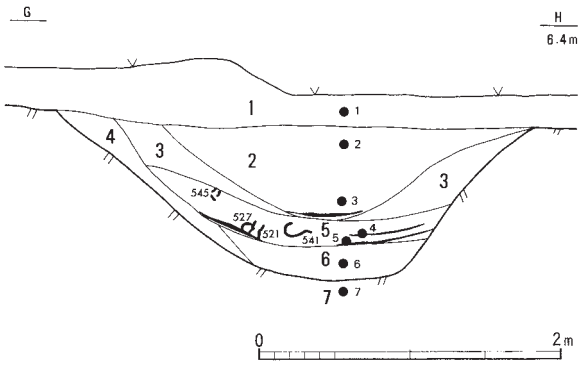


第６図　ＳＤ 10・12・13、ＳＫ９遺物出土位置図（1:100）

ＳＤ 10 との前後関係は不明であるが、底部等は一連で、遺物の出土状況にも違差がない。したがってＳＤ 10 と一体のものと考えられる。東側は後世の開発により大きく土取され、痕跡を検出したに止まる部分も多いが、本来はＳＤ 10 と同規模で続いていくものと考えられる。

埋土の状況もＳＤ 10 と同様である。東端では炭化物の沈殿層に加えて鉄分の沈殿層も認められ、ＳＤ 10 と同様に水が溜まった時期もあったようである。しかし、ＳＤ 12 からはＳＤ 10 側を除き古墳時代中頃以降の土師器や須恵器の出土はなく、ＳＤ 10 の上層に相当する層はないものと判断できる。したがって、完全埋没もＳＤ 10 より早く、弥生時代終末期の内と考えられる。弧状に囲む内側から浅黄橙粘土の堆積があり、内側から先に埋まった様子も一部にあるものの、人為的な埋め戻しと判断できるほどのものではない。

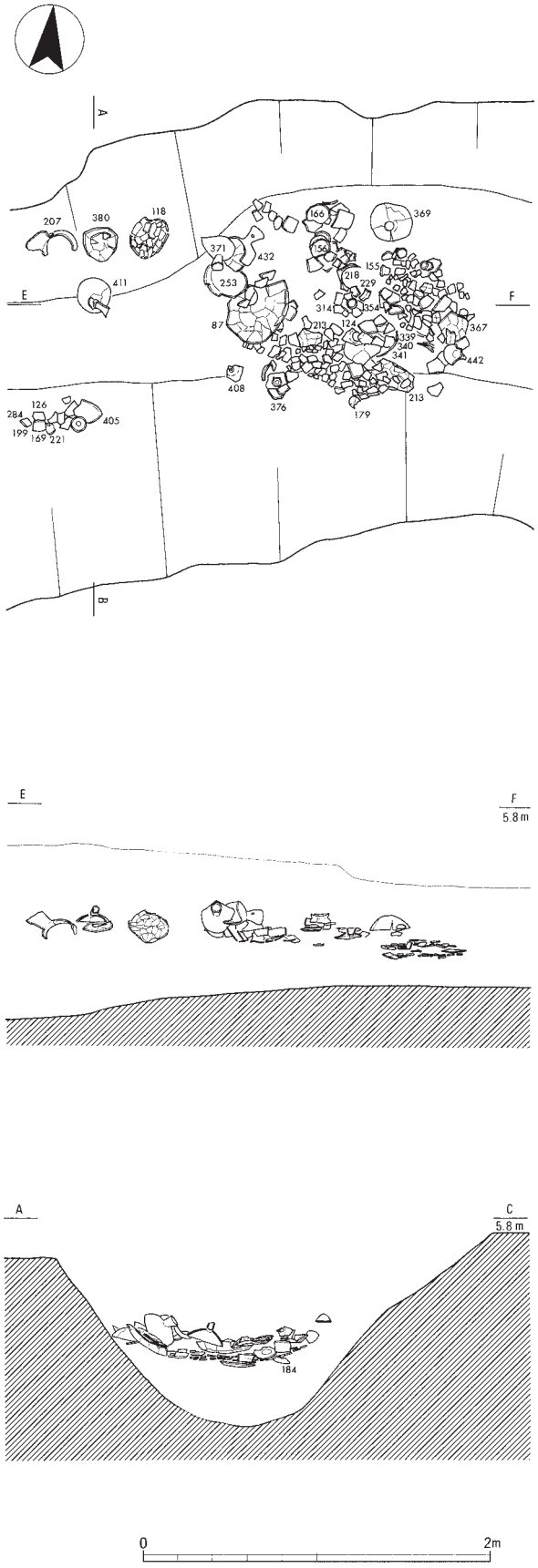
主な遺物の出土位置を第６図に示した。第８図を



1．褐灰色土 <10YR5/1>（耕作土）
2．黒褐色粘土 <10YR3/2>
（SK9 埋土、炭化物沈殿・土器多含）
3．暗褐色粘土 <10YR3/3>（SD10 埋土）
4．浅黄橙色粘土 <10YR8/4>（SD10 埋土）
5．黒褐色粘土 <7.5YR3/2>
（SD10 埋土、炭化物沈殿・土器多含）
6．褐灰色粘土 <10YR6/1> に白色砂を含む（SD10 下層埋土）
7．明黄褐色粘質土 <10YR6/8> に黄灰色 <2.5Y6/1> が混じる
（検出面）

●＝土壌サンプル採取地点

第７図　ＳＤ 10 土層断面図（1:50）



第８図　ＳＤ 12 遺物出土状況図（1:40）

作成した地点での遺物の集中が顕著だが、これは残存度の低いものも記録した結果である。確かに、この部分は他に比べ遺物の集中が顕著であるが、第６図の示すほどの偏差がないことを断っておく。遺物444の出土地点からSD10の調査区端にかけて多くの遺物を包含しているが、密集するほどではなく、小片に混じり残存度の高いものが散在する状況である。削平が大きい東側からの出土は少なく、削平の影響はあるものの、本来遺物の包含は少ないものと考えられる。大半が弥生時代終末期のもので、底から60cmほど浮いた位置から厚さ40cmの範囲に集中的に分布する。おそらくＳＤ10の中層に相当するものと思われ、器種に偏りはなく、完形のものもないが、前述したように比較的原形を留めるものも多い。溝の埋没がある程度進んだ段階で、比較的短い期間に投棄されたものと推測される。

なお、ＳＤ10最下層に連続する層も延びており、出土遺物は「下層出土」として区別している。弥生時代中期に遡るものが目立つが、終末期に降るものも一定量あり、この層の埋没時期も弥生時代終末期のうちとせざるを得ない。

ＳＤ１３（第６図） SD10からそのまま北進して調査区外へ続く溝で、SD10と一連のものと考えられる。ＳＤ12を分岐するが、溝の北岸や底部がＳＤ12からSD13へ向けて滑らかに繋がるために、ＳＤ10・SD12・SD13の三者は一連のものと考えられる。北側では撹乱や土坑の重複が激しく、本来の形態･規模は不明確である。若干の蛇行を示すが、幅は分岐点から北進するにつれて拡大する傾向も見せる。

遺物の出土は分岐点から遠ざかるにつれて顕著に減少する。弥生時代中期から後期の遺物が目立ち、終末期に降るものもある。前述したように撹乱や土坑の重複も多いため、遺物からの時期決定には限界がある。したがって、既述した遺構の状況からＳＤ10・12と同時期とする。

北側で多数重複する土坑との前後関係は不明である。土坑の形態は多様で、直径４ｍの不整円形を呈し、深さは緩やかに40cmほど下がるもの、直径２ｍの不整円形を呈し、井戸状に２ｍの深さをはかるものもある。出土遺物に時期差はないが、SD13と一体のものとも考えられない。ＳD13の出土遺物はＳＤ10・12と比べれば弥生時代中期の遺物が多い。これらが土坑群に伴うものとすれば、後述するＳＫ17と同様に、SD13掘削以前には弥生時代中期の土坑群が集中していた可能性がある。

ＳＺ１１　ＳＤ13と重複する土坑群のひとつで、直径４ｍの不整円形を呈し、深さは緩やかに40cmほど下がる土坑の南側壁沿いに遺物の集中があり、この部分をＳＺ11とした。遺物は細片に近い状態であったが、接合の結果、完形ちかくまで接合できたものもある。少なくとも高杯は４個体が完形にちかい状態で投棄されたものと推測され、他に瓢形壺や台付甕各１個体がその可能性がある。何らかの祭祀に使用されたものが投棄されたものかもしれない。他に甕、鉢があるが、いずれも小片である。

ＳＫ９　ＳD10・12・13に完全に重複する。仮にＳＫ９として掘削したが、結果的にＳＫ９とする平面形は確認できず、ＳＤ10･12･13の上層埋土となってしまった。しかし、層位に従った掘削ではないことを断っておく。弥生時代後期から終末期と古墳時代中頃の遺物が混在するが、前者はＳＤ10・12・13からの混入と思われる。これらの溝に重複して古墳時代中頃の溝か土坑状の落ち込みがあったようである。

ＳＫ１７　調査区東端ちかくのSD12底部で検出した土坑である。長径80cm、短径60cmの不整楕円形を呈し、深さはSD12底部から30cm以上下がる。西端のＳＤ12の壁に接する部分は直径20cmの円形にさらに10cmほど深くなる。この土坑の性格は不明であるが、出土した壺片(475)が30mほど離れたＳＤ13出土のものと接合している。475は類例の少ない短頸壺であり詳細な時期は不明であるが、弥生時代中期に遡る可能性も大きく、SD12掘削時に、先行するＳＫ17の上半が破壊され、下部のみがSD12底に残存したものと考えられる。水量は少ないものの湧水層に達しており、井戸として機能していた可能性もある。

Ⅳ. 遺　　物

既述したように、浅い部分では表土直下が検出面、深い部分でも近世以降の撹乱層が検出面に及んでいる。このため、遺物包含層は存在しないが、遺構検出時に出土した遺物を便宜上包含層出土としている。したがって、包含層等から出土した遺物は極端に少なく、前期を含む弥生時代、古墳時代、中世の山茶椀等が若干出土したに止まる。出土遺物の大部分は一連のＳＤ 10・12・13 から出土した弥生時代終末期のものである。大半の遺物は摩滅が激しく、器厚・調整等が不正確にならざるを得ないことを予め断っておく。

なお、弥生土器における様式と編年は上村安生により[①]、Ｓ字状口縁台付甕の分類においては赤塚次郎・原田幹による[②]。

１　ＳＤ１２下層出土遺物（第９図）

弥生時代中期～終末期の遺物が混在するが、いずれも小片である。

壺（１～20）　広口壺には１～３がある。１は口縁端部を垂下させ、口縁端部上内面に刺突による列点文を、２の頸部には横線文を施す。４・５は受口状を呈する細頸壺で、４には凹線ではなく二股状工具による沈線を施す。５は浮文と刻目で装飾し、円形浮文は4.5cm 間隔で２個を確認できることから、１個単位で８方に施されているものと推測できる。刻目は摩滅のため痕跡を残す程度で、識別が非常に困難である。刺突工具も不明とせざるを得ない。これらの壺は２がⅡ様式、４・５はⅢ様式と考えられ、中期に属するものと判断できる。６～９は概ね広口壺の体部と思われる。６は２段の刺突列点文、７は波状文、８は円形浮文、９は横線文２段以上と刺突列点文が施される。７の波状文は、工具の中央部が浮いた状態となり、結果的に上に３条、下に２条の２段の波状文となる。８の円形浮文は、不整形なものを３個１組に逆三角形状に配するが、小片のため壺全体の配列は不明である。10 ～ 20 は壺の底部片と思われるが、11は甕か鉢の可能性もある。19の内外面の調整は工具痕が明瞭であるが、ヘラケズリとするには浅く、工具ナデかハケメとする。

甕（21 ～ 30）　21～24はく字状の口縁部、25 ～ 30は受口状の口縁部を呈する。いずれも小片のため詳細は不明であるが、前者には口縁端部に刻目を施すものがあり、後者は刺突列点文で修飾される。これらの特徴から前者はⅠ様式の可能性も残しつつⅡ～Ⅳ様式に属し中期、後者はⅣ～Ⅵ様式に属し中期後半から終末期に属するものである。29 は口縁端部の立ち上りが短く、頸部に施される横方向のハケメや頸部の屈曲角度にS字状口縁台付甕と類似性がある。30は摩滅が激しく器厚も不正確であるが、緩慢なＳ字状の屈曲を呈し０類に相当するものであろうか。

鉢（31・32）　鉢としたが、両者とも橙色系の色調を呈する。32は小片のため、傾き、口径等が不正確でハケメ調整も認められない。これらから両者とも高杯の可能性もある。

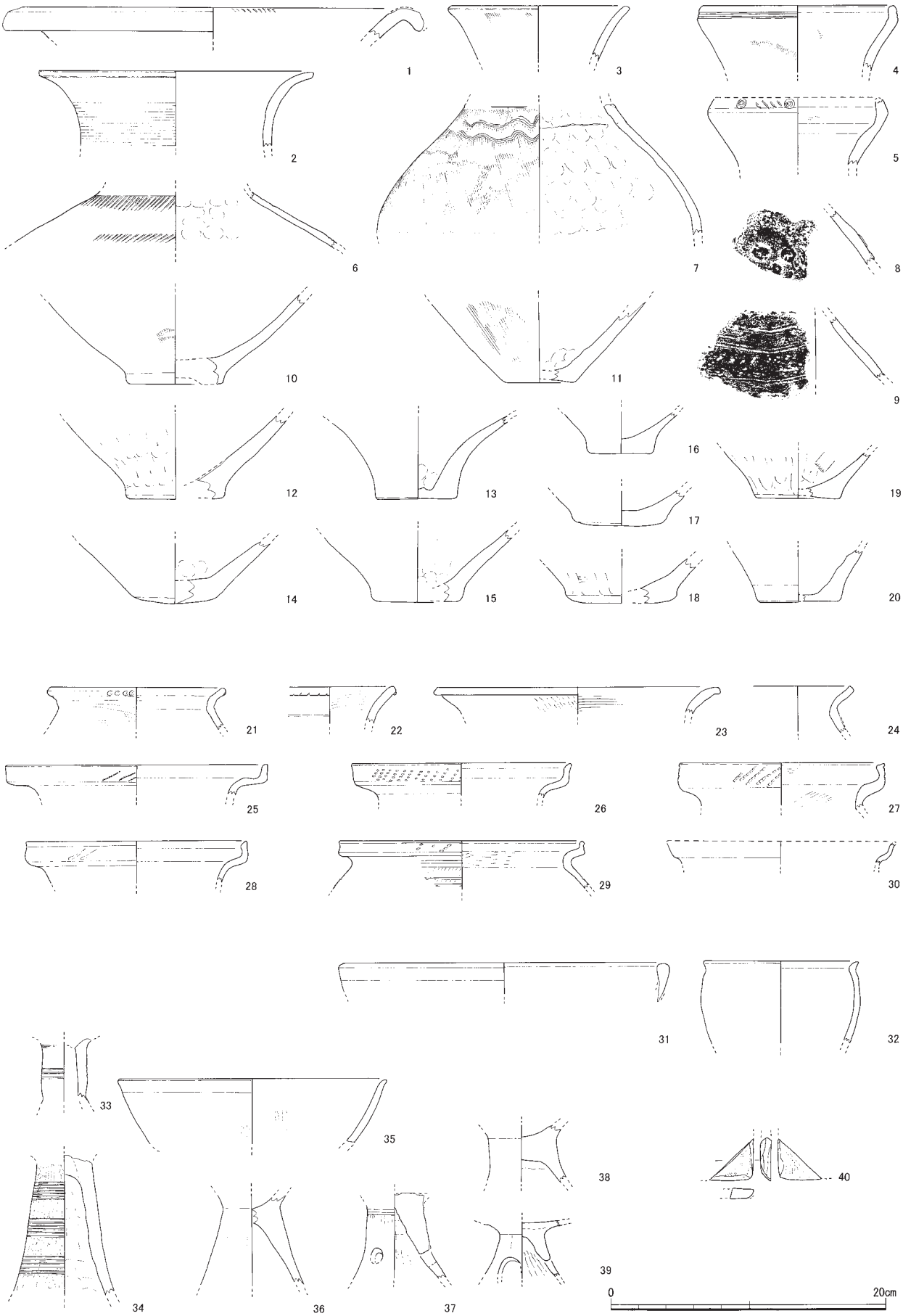
高杯（33 ～ 39）　35は下部で屈曲部を有する深い杯部の口縁部片でⅥ様式、36～39も同様な時期と思われる。一方、33・34は筒部の長い脚で、34はⅤ－３～５様式の特徴を示し、時期的に遡るものである。37の脚基部には横方向のヘラミガキが１周または２周施される。39 の透孔は脚基部に対し大径のものを３方に空けるが、その位置は不均衡である。

石器（40）　片刃の磨製石斧で扁平片刃と称されるものである。石材は明青灰色を呈するハイアロクラスタイトである。

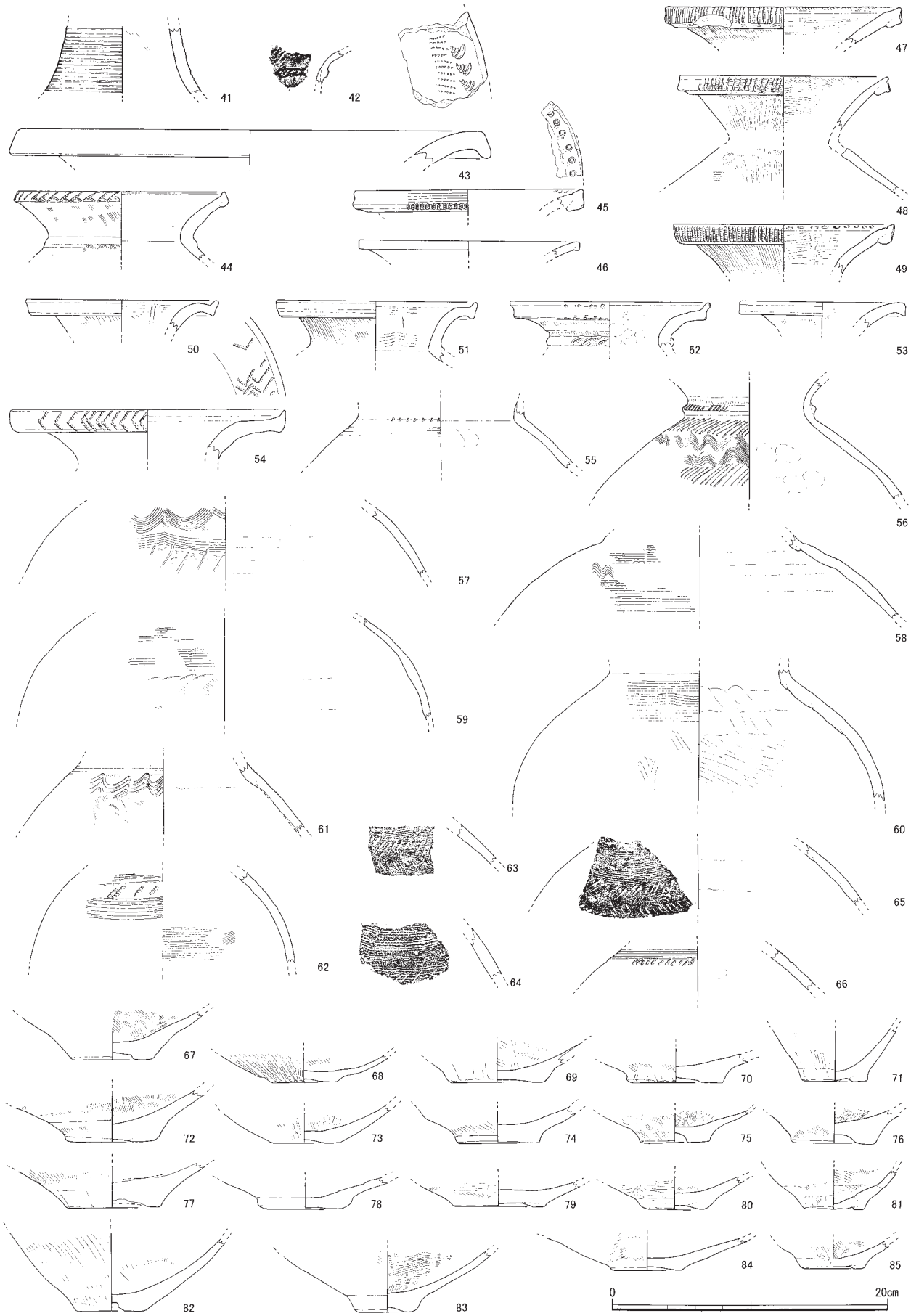
２　ＳＤ１２出土遺物（第 10 ～ 25 図）

多量の遺物が出土し、その大半が弥生時代終末期のもので、赤彩されるものを若干含む。

壺（41 ～ 181）　41･42は広口壺の頸部片で、41 は櫛状工具による横線文を頸部全面に施す。42 は小片のため不明な部分が多く、脚部の可能性もあるが、一応、壺としておく。頸基部を突帯状に張り出させ刻目を施す。刻目は櫛状工具により、外面には深いハケメが一部に施されるようで、両者は同一工具の可能性がある。同様な壺で雲出島貫遺跡 SD532 下層出土の602は、S字状口縁台付甕に調整や胎土が共通する[③]とされる。深いハケメはそれを想定させるが、



第９図　ＳＤ 12 下層出土遺物実測図（１：４）



第10図　ＳＤ12出土遺物実測図　①　（1：4）　　■ ＝ 赤彩

小片であり胎土もやや異なると思われることから断定を避けたい。

43～54は広口壺の口縁部で口縁端部に縁帯を設けるものである。43～49・53は端部を垂下あるいは下に折り返すことにより縁帯を形成するのに対し、50～52・54は端部を上方に摘み上げている。縁帯は加飾されるものが多く、47～49には板状工具を用いたと思われる刻目を施し、45は下端のみを刻む。52の刻目は櫛状工具によるが、工具の中央部が浮いた状態になり、結果的に縁帯の上下端に刺突文が施文された状態となっている。54は刻目を羽状に施し、44は山形を意識しているが、雑な施文である。51は棒状工具によりヨコナデしているが、凹線とするには至らない。43の縁帯は摩滅により施文の有無は不明である。口縁端部内面にも施文するものがあり、43には板状工具による刺突と扇形文、45・49には竹管文を加えている。頸基部に突帯を巡らすものもあり、52は刻目を加えた突帯を、44は低い雑なものを巡らしている。なお、44の外面には赤彩が施される。50・51の内面には鋭利な工具による縦方向の掻揚げ痕がある。調整とは思われないが、文様とも考えられず、その意図は不明である。

55～66は広口壺と思われる体上部片である。いずれも直線文と波状文や刺突文で加飾されるが、56の刺突は非常に鋭利なもので、二枚貝腹縁によるものかも知れない。59は横線文下に連弧文を巡らす。連弧文は二枚貝腹縁による。57には横線文を施文の後に鋭利な工具による沈線が施される。約1㎝間隔で斜め縦方向の浅い沈線であるが、刻む方向は上から下とその逆が混在する。文様とするには簡素過ぎると思われるが、意図は不明である。64の横線文下部は僅かに波動し、その上に細かい櫛状の工具により刺突を施す。また、55の頸部に施される刺突は棒状工具による。

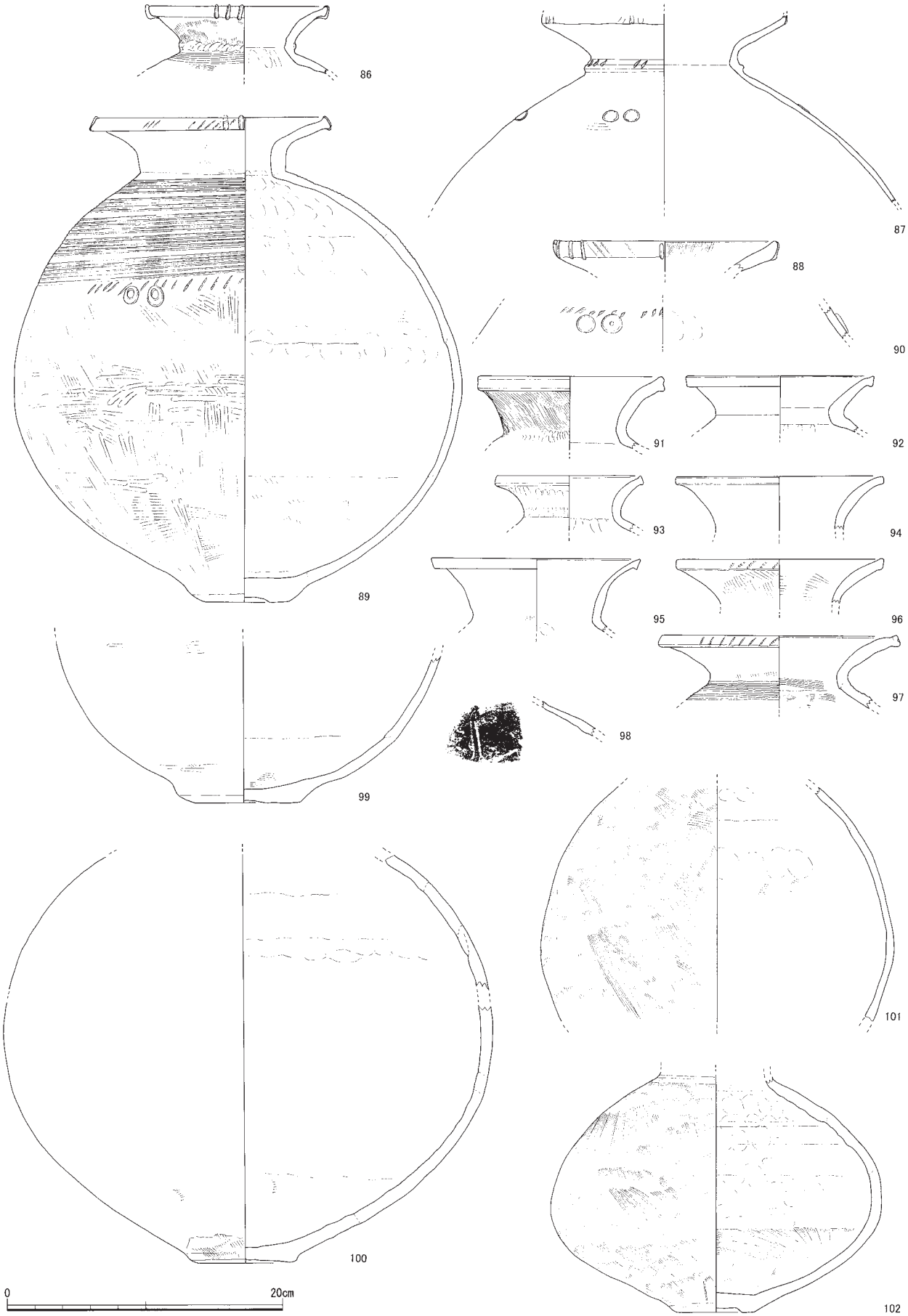
67～85は壺の底部のうち、底が輪台状を呈するものである。81は粘土紐接合痕を明瞭に残し、壺としては、雑な仕上げである。

86～89・91～97も広口壺で口縁端部外面に面をもつが、前述したもののように下に折り返したり摘み上げたりする行為は明瞭でなく、口縁部に加飾を伴わないものも多い。86～89は棒状浮文を施すが、86・88は3本1組で4方、87は3本1組で6方、89は2本1組で4方と多様である。89は本来赤色系の色調で、剥離・摩滅が激しいため明確ではないが、外面全面及び口縁部内上面に赤色顔料を塗布する。体部には突列点文に一部重なる位置に円形環状浮文を2個1組で4方に配する。口縁部の棒状浮文と体部の円形浮文は、施文位置を違えている。87・90にも円形浮文が施されるが環状ではなく、90は中心に竹管による刺突を施し、87は単純な円形である。

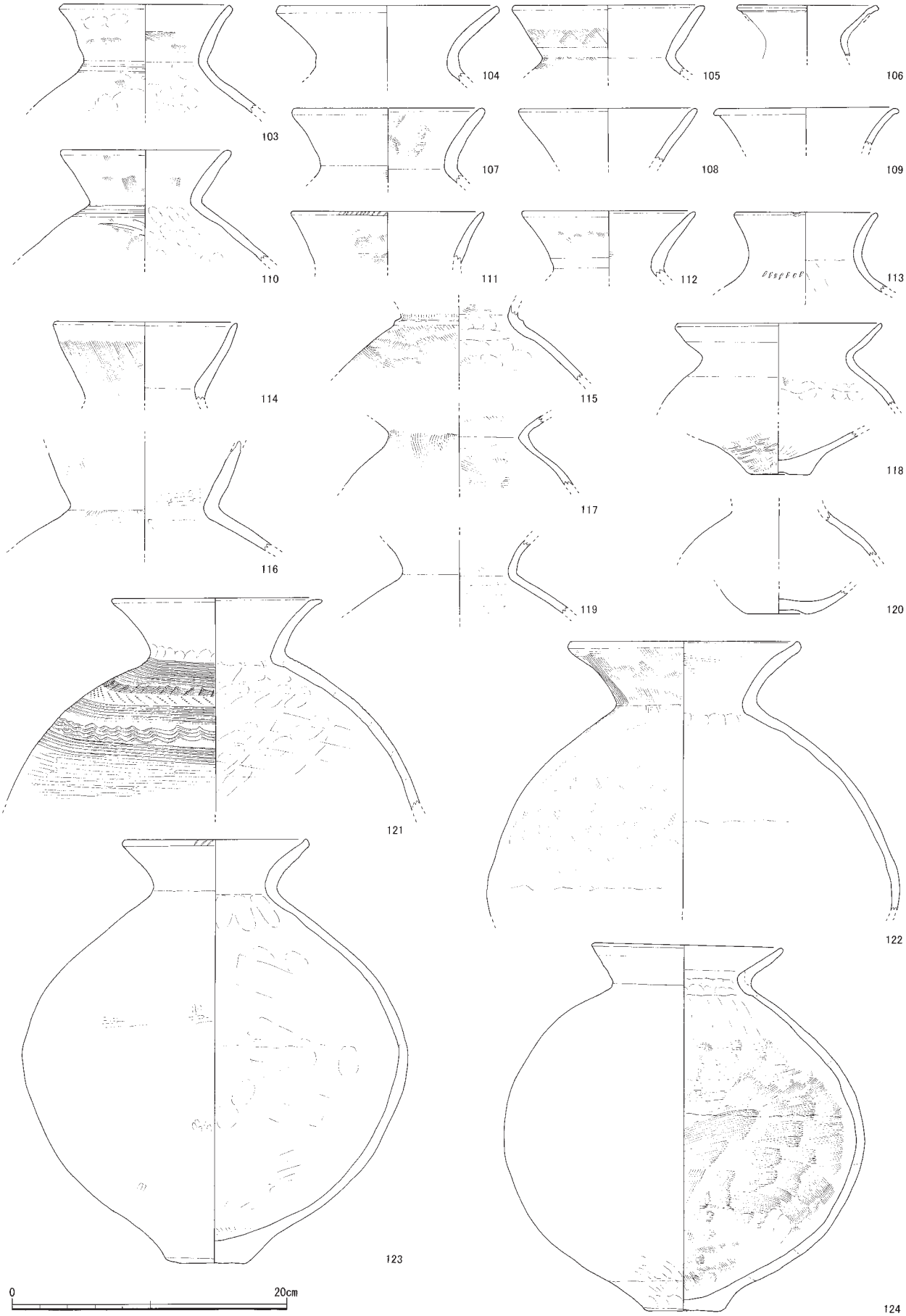
98～102も広口壺の体部と思われるが、99を除き加飾のないことが確認できる。98の2条の沈線は焼成前に施されているが、文様とは考えられず、記号または絵画の一部かもしれない。

103～114・118・121～124は前述したものと同様な壺であるが、口縁端部の面が弱いものや面をもたずに丸くおさめるものを含み、直口壺としてもよいものもある。115～117・119・120は口縁部を欠損するが、同様な口縁部と推測される。118の口縁部の形状は甕と酷似するが一応壺として扱う。底部は、口縁部と重なって出土した状況から同一個体とするが、接合できなかったこともあり、別個体の可能性がある。口縁部の加飾は111と123に刻目がみられるのみで、体部においても103・110に1段の横線、113に棒状工具による刺突、115に非常に雑な突帯が施される程度である。ただし、121は簡素な口縁部ではあるものの体部上半に上から順に横線文、刺突列点文、横線文、波状文、横線文を施す。刺突列点文は羽状に刻まれるが、上段のものは刺突が流れ、一見簾状文風となっている。106の口縁端部外面は、強いヨコナデのため凹面を呈し、110の体部外面にはハケメ後の棒状工具による掻き取り痕があるが、文様とは考えられず、調整の一環と思われる。113の口縁部には棒状の圧痕があり、乾燥時のものと思われる。なお、108は壺脚の可能性もあり、外面には赤彩が残る。

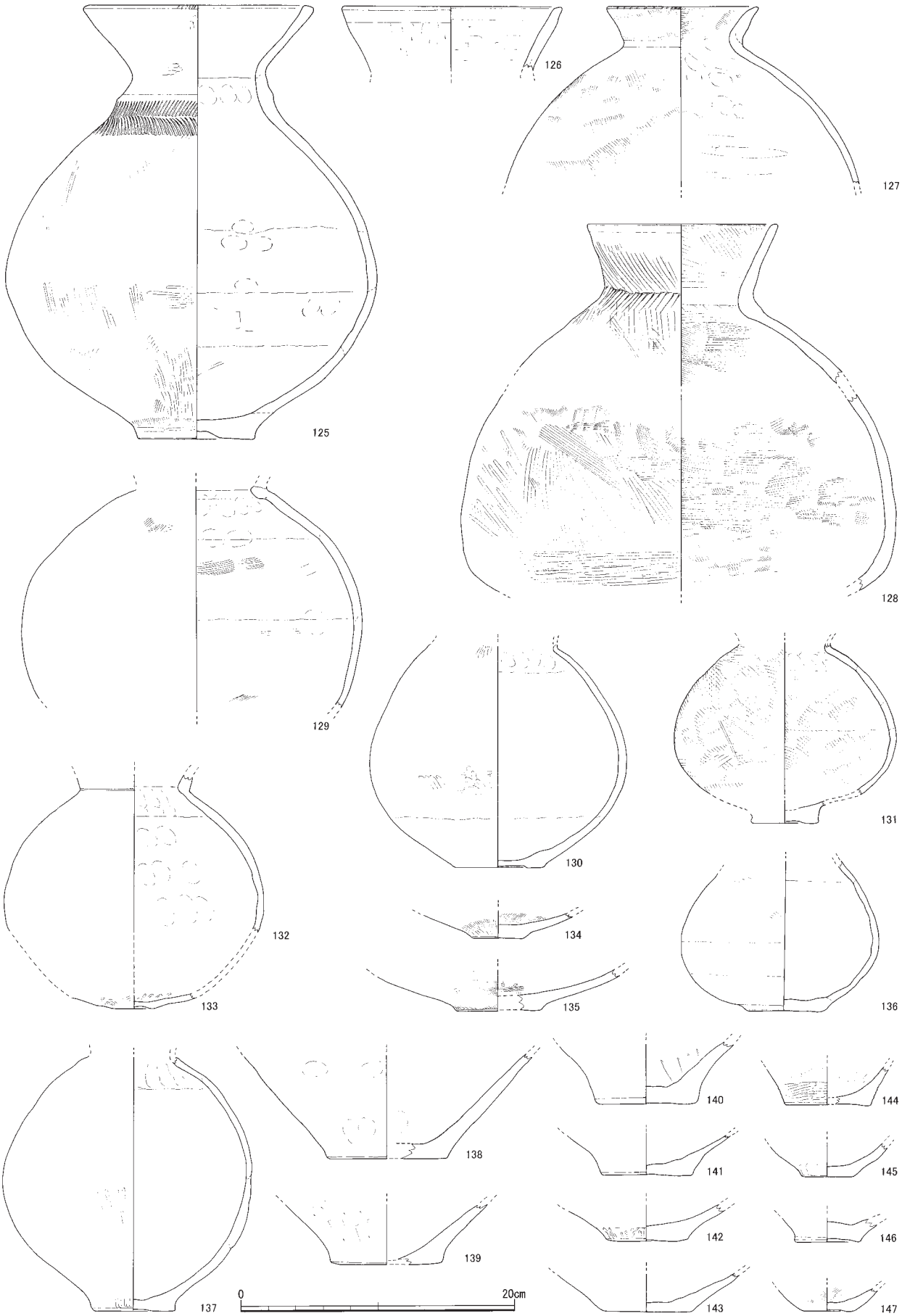
125～128も広口壺としたが、127は短頸壺、128は直口壺とすべきかもしれない。125・126も特異な口縁部形態である。125は口縁端部を肥厚させるもので、頸部にはヘラによる羽状刻目を下段から上段の順で、下段は左回、上段は右回りで施文する。施文によるためか施文範囲の器壁がやや窪み、相対的に上段上部が突帯状に隆起している。しかし、突帯として意



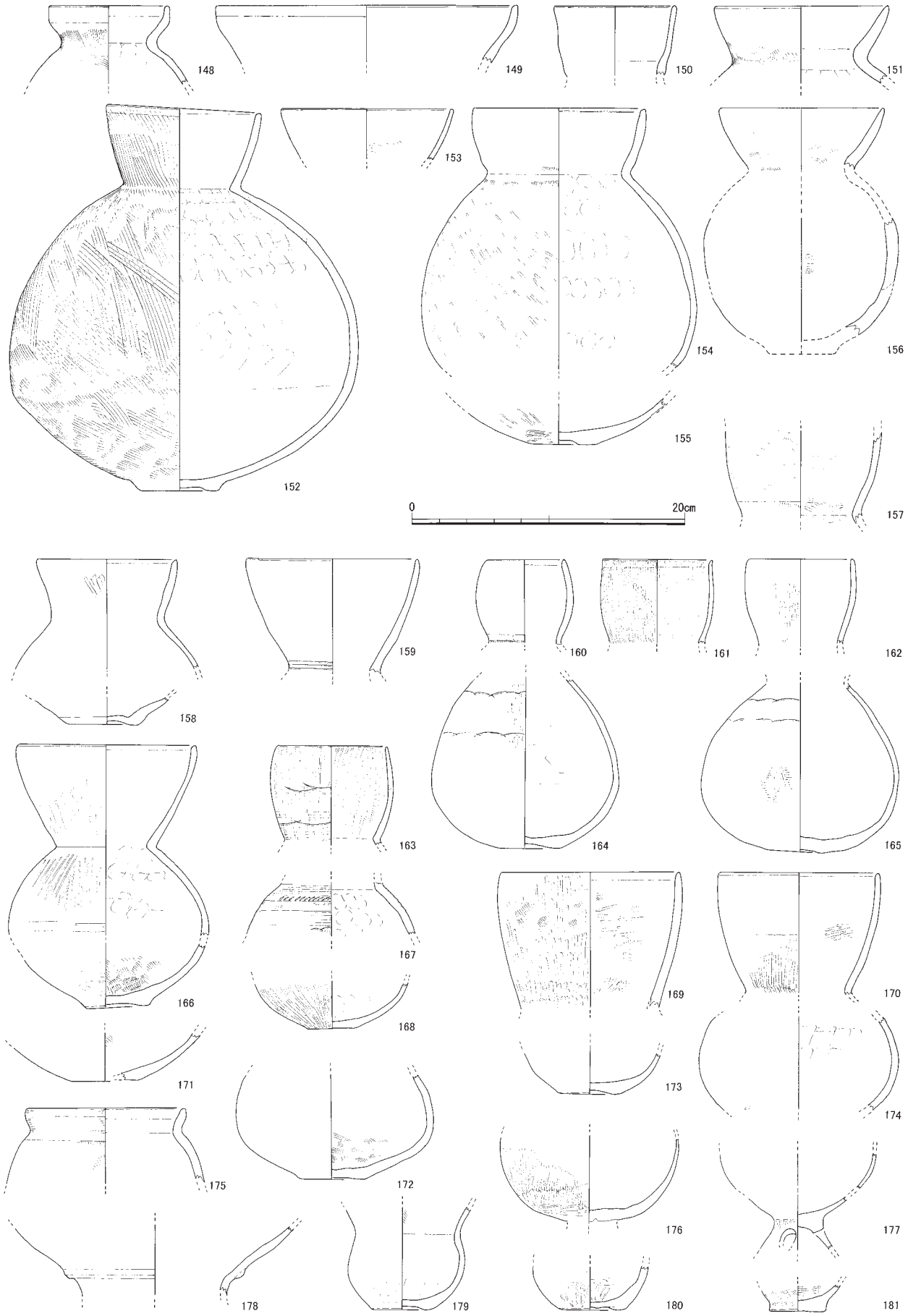
第 11 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　②　（1：4）　　■ ＝ 赤彩



第 12 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　③　（1：4）　　■ ＝ 赤彩



第 13 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　④　（1：4）



第 14 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　⑤　（1：4）

識されたものかは不明である。なお、頸部以上と体部は接合せず、図上での接合のため器形については推測を含む。126は口縁部上端に面をもち１条の沈線を巡らせる。口縁部外面にヘラケズリ、内面は工具ナデとするが、調整が粗いためか口縁端部のヨコナデは非常に強いものである。ただし、外面のヘラケズリも工具ナデとしても良く、結局、調整の意向としてはハケメであったものと考えられ、新品にちかい工具であったためにハケメとして表れなかったものと判断できる。

129～132・136・137は口縁部を欠損しているものの広口壺と推測されるものである。130の破断面はきれいな擬口縁を呈し、無頸壺と迷う。いずれも装飾はなく、ハケメを残すものもある。ただし、132では頸基部に弱い沈線を巡らすが、文様と断定し難い。133は接合できなかったが132の底部の可能性が大きい。

134・135・138～147は壺の底部であるが、平底で輪台状を呈しない。144は甕の底部と迷うものであるが、調整の一部にヘラミガキがあるため、一応壺とする。140の内面には、棒状工具による深い掻き取状の痕跡があるが、調整の一環と思われる。

148は口縁部が受口を呈する壺、150は直線状に立上る口縁部をもつ壺である。149・151～154・156・158は内弯気味の口縁部をもつ壺で、155は同様なものの底部、157は口縁端部を欠損しているが、同様な壺と思われる。157の口縁部外面調整を工具ナデとしたが、意向としてはハケメである。158の口縁部外面にヘラミガキ状の痕跡があるが、器壁の摩滅程度から考えて、ヘラミガキとは思えない。

159～174は内弯する口縁部をもつ壺で、瓢壺と称されるものである。159は頸基部に横線文、163・164・165には貝殻腹縁による連弧文が施される。ただし、163の連弧文は比較的大型の二枚貝を使用し、弧の向きが他のものと逆である。167は横線文と連弧文が施される加飾性の高いものである。しかし、横線文は非常に浅いもので、上段の連弧文は連弧というよりは斜行刺突文とすべきものである。

175は小片のため、傾き等が不正確の可能性もあるが、器壁が厚く若干受口状を呈する。口縁部外面には工具の痕跡が横方向のハケメ状に残る。

176・177は脚付壺であるが、口縁部や脚部を欠損しており全体の形状は不明である。

178は二重口縁壺、179～181は小型の壺である。180の内面のヘラミガキは外面のものと異なり、幅の広いものである。行為としてはナデであったものがヘラミガキ状を呈しているのかもしれない。

甕（182～314）　182～185は大きく水平ちかくまで外反する口縁部をもつ甕で、中期に遡るものである。いずれも口縁端部に刻目を施す。186・187も類似した形態であるが、外面のハケメは条痕としてもよい鋭く深いものである。三河方面の影響を受けたものであろうか。なお、187の口縁端部外面には弱い沈線が断続的に巡る。

189・190は受口状の口縁部をもつ甕で、口縁部外面に刺突列点文を施す。188も受口状を呈するが、調整等がＳ字状口縁台付甕に類似する。191も受口状を呈するが、口縁部が短く、刺突列点文も施されず、前述したものとは別系統のものである。192・193は甕の底部である。口縁部形態は不明であるが、既述した甕と同類の底部である可能性が高い。

194～202・204はく字状の口縁部をもつ甕で203も同様なものと思われる。201・203・204には脚台が付くが他のものの大半も同様と思われる。197は壺状の形態である。草山遺跡ＳＢ18上層出土のもの[4]に同様なものがあり、短い脚が付く。摩滅・剥離が激しく調整や器厚は不明であるが、一応、甕としておく。200は頸部の屈曲が緩慢で、口縁部内面にはヘラミガキが認められる。鉢または壺の可能性もあるが、中楽山遺跡Ｂ区ＳＸ１出土のもの[5]にみられるような台付甕としておく。頸部外面にヘラ状の工具痕が沈線状に残るが、調整の一環と考えられる。

205は平底の甕であるが、タタキにより調整される唯一のもので、関西方面の影響下にあるものである。

206～208は受口状に屈曲する口縁部をもつ甕であるが、既述したものと比べ器壁や調整等がＳ字口縁台付甕に共通する要素を多くもつ。ただし、208は口縁端部の立ち上りが短く、他のものと異なる。文様や調整は３者とも共通であるが、206の口縁部外面の刻目は櫛ではなくヘラによる。

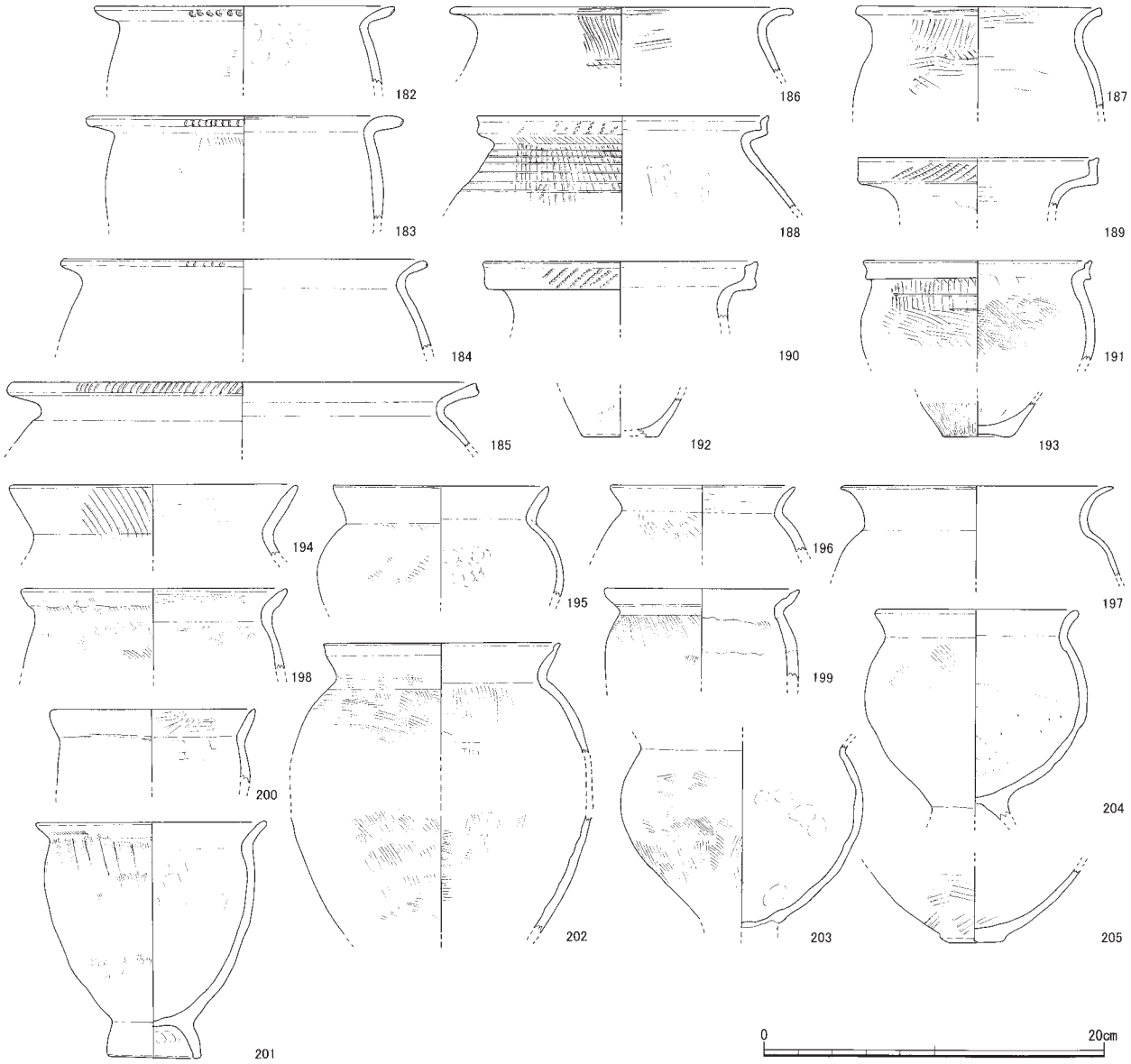
209～212は緩慢に屈曲する口縁部で端部に面をもち、Ｓ字状口縁台付甕０類に相当するものと思われる。209の口縁部外面の刺突は押し引き状に流れ、

210では刺突の一部が､刺突の後､そのままハケメとして調整に移行しているように見える｡213も同様なものと思われるが、剥離・摩滅が激しく詳細は不明である。214は器壁が厚く屈曲の状況も他のものと異なり口縁端部の面もなく異質である。刺突文は図示していないが、その有無は剥離・摩滅のため不明である。

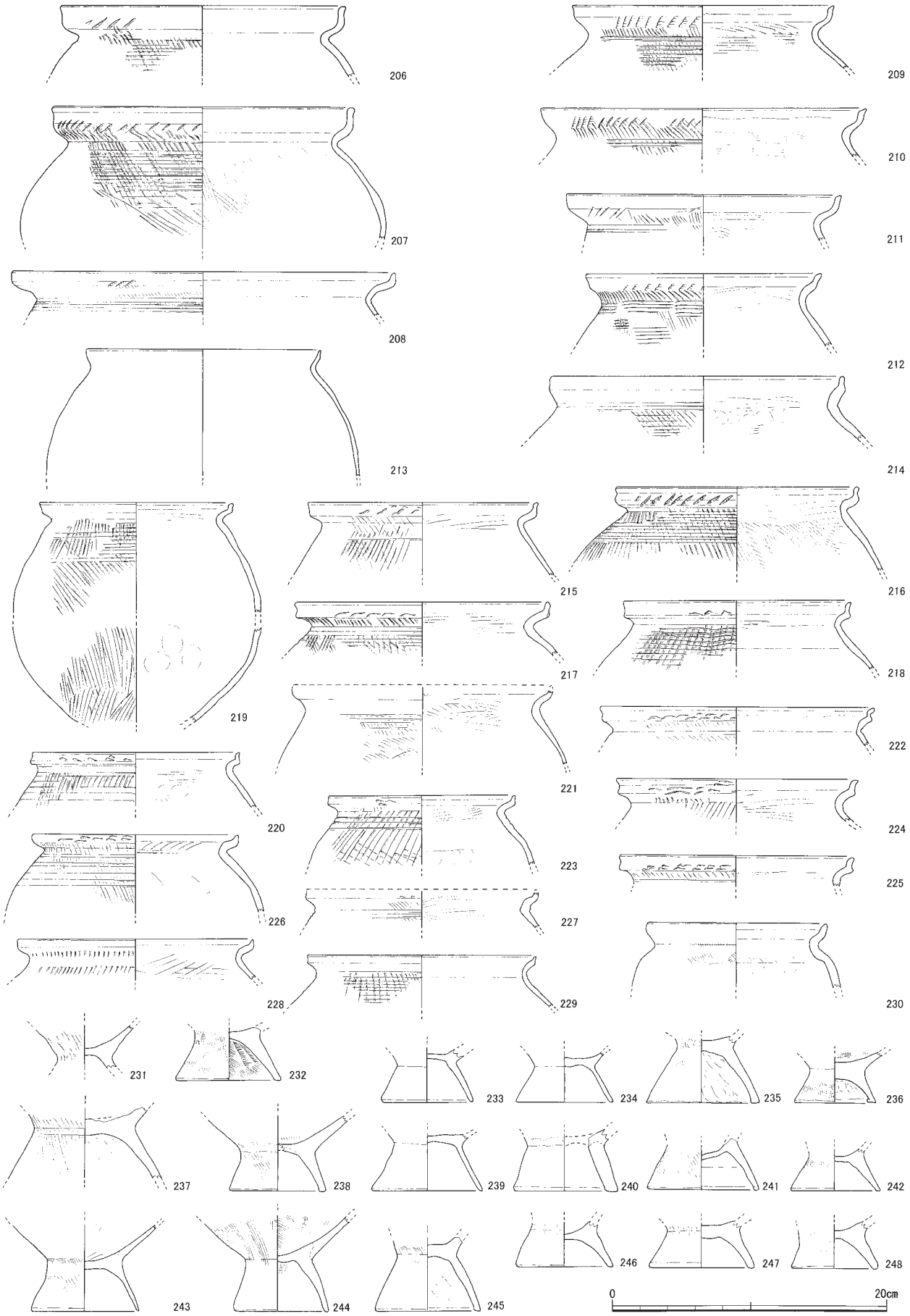
215～218・220・222～225・227はS字状口縁台付甕Ａ類に相当するものと思われる。口縁部外面の刺突文は櫛状工具によるが218のみはヘラ状工具による。215の頸部下のハケメは方向を違えて格子状に施す。219～221・226・228・229も調整手法はS字状口縁台付甕と共通するが、口縁端部の形状が異なるものである。219はB類とも考えられるが、受口指向が強いものである。221は口縁端部を欠損しておりS字状口縁台付甕Ｂ類との推測も可能ではあるが、外面のハケメは鋭利な深いものではなく、浅く細かいものである。230は内弯して受口状を呈する甕で、器壁も厚く異系統のものと思われる。鉢とすべきかもしれない。

231～248は台付甕の脚のうち、脚が外方に開き比較的短いものである。235の脚は、下端部が途中で切断されたような様相を呈する。

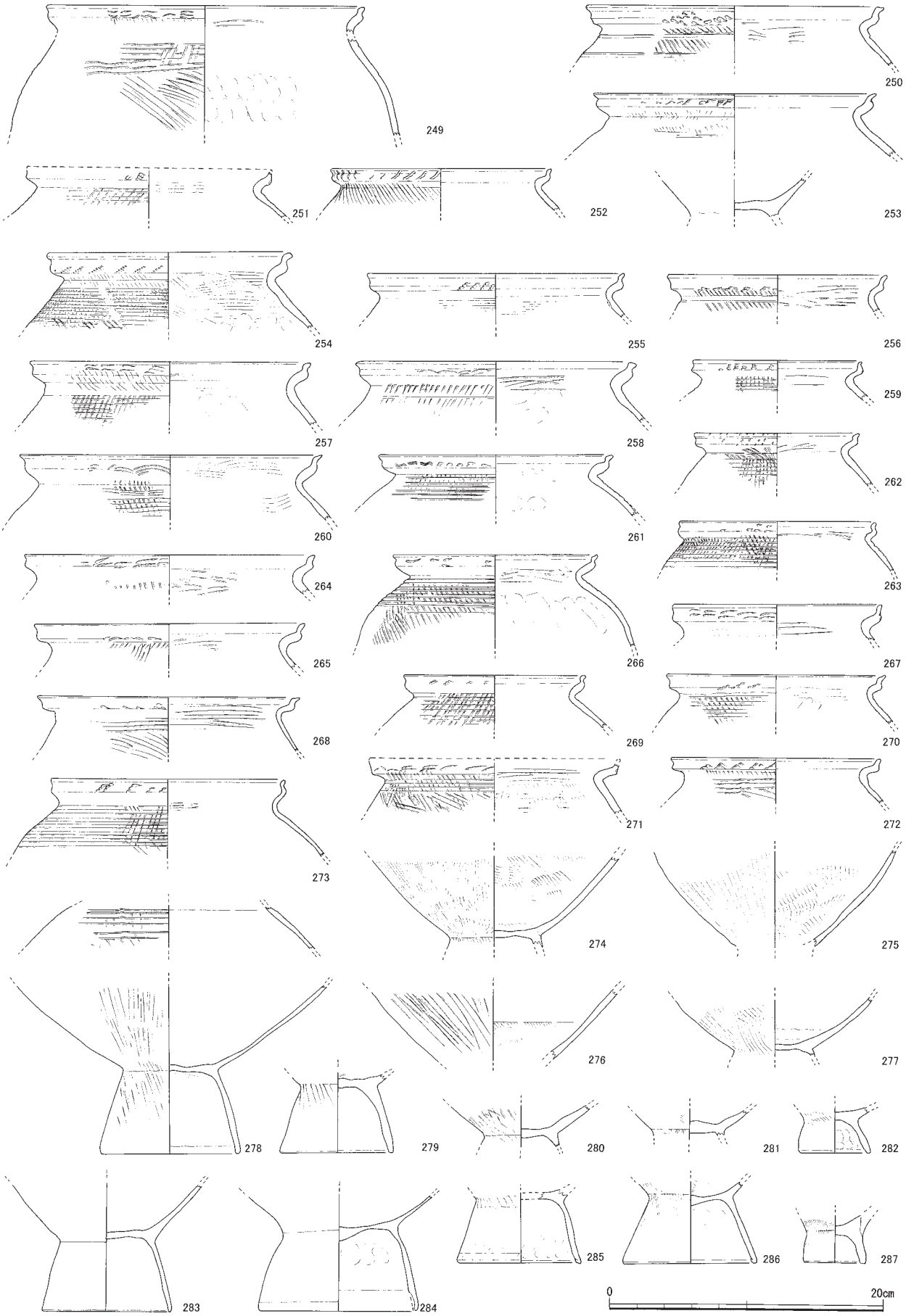
249～273はＳ字状口縁台付甕Ａ類と思われる。いずれも体部はハケメで調整し、頸部直下には横方向のハケメを加えるが、258は板状工具のため、板ナデ



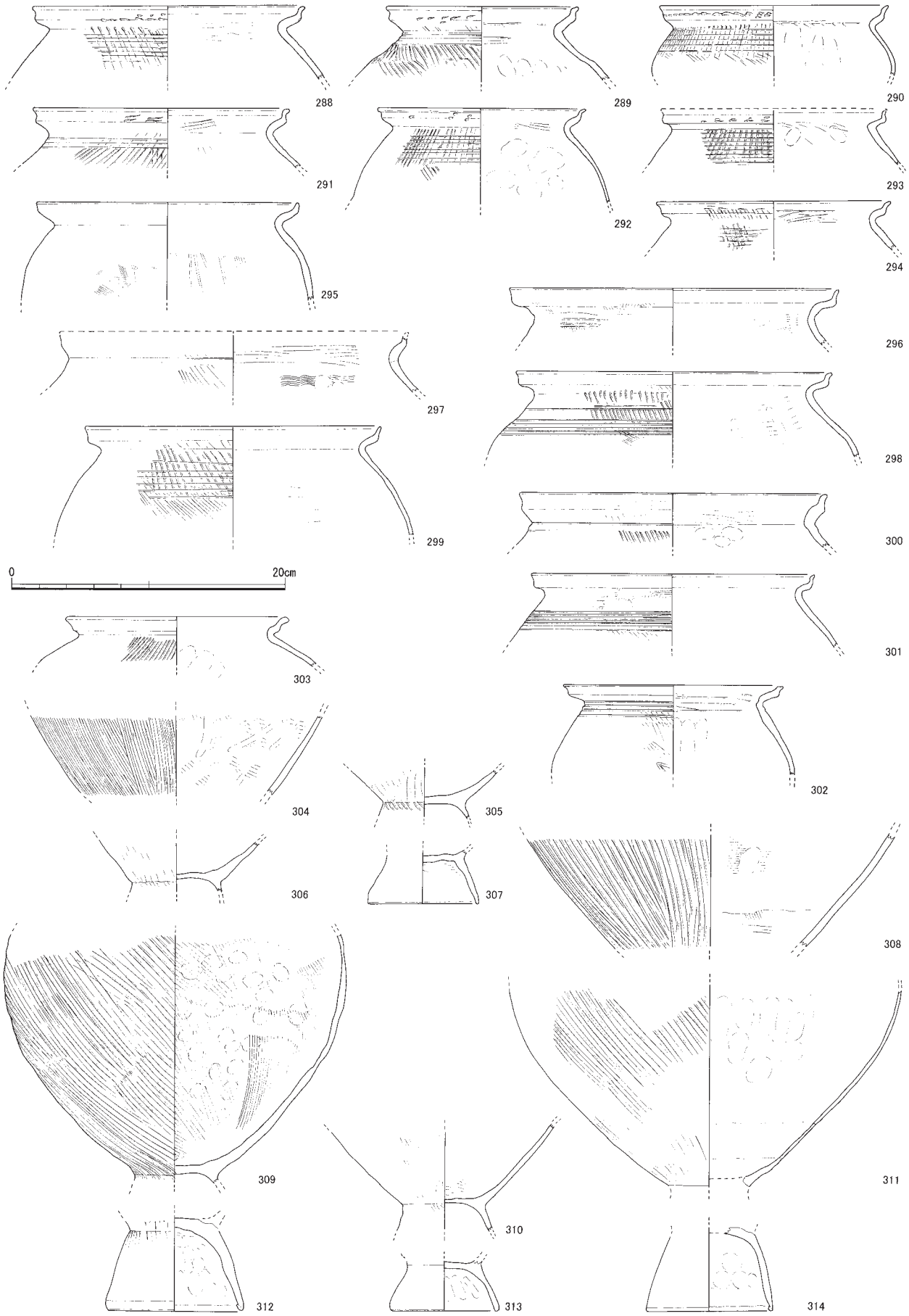
第15図　ＳＤ12出土遺物実測図　⑥　（1：４）



第16図　ＳＤ12出土遺物実測図　⑦　（1：4）



第 17 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　⑧　（1：4）



第 18 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　⑨　（1：4）

状を呈する。刺突列点文は押引き状のものが多く、258・260等は大きく流れる。265は下端を櫛状工具の端部またはヘラ状工具により刺突されており、列点を呈しない。263の体部上端のハケメは斜格子状に施され、右下がりが左下がりに先行する。

274～287は台付甕の体部から脚部である。脚は外方に開くが278・279等は垂直にちかい。282・287のような小型のものもある。284は剥離が激しく、器厚や細部の形態は不明確である。

288～294もＳ字状口縁台付甕A類と思われるが、口縁部全体が外傾するものも多い。口縁部の刺突文は列点状のものから押引くものまで多様である。

295～301は口縁部の刺突文が省略されており、Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類に相当するものと思われる。296の頸部直下の横方向のハケメは、非常に幅の広いもので棒状工具によるものにちかい。301では横方向のハケメとは別に頸部屈曲部に棒状工具により横方向に強いナデを施す。なお、297・299は剥離が激しくＡ類の可能性も残り、特に299は刺突文があるようにもみえる。

302・303も口縁部の刺突文は省略されており、口縁部の外傾もおおきい。302がＳ字状口縁台付甕Ｃ類、303はＤ類に相当するものと考えられる。SD12からは、これらが唯一の出土で、混入と考えられる。

304～314は台付甕の体部から脚部である。307の脚部は短く外方へ開き、313は内弯気味に踏ん張った形態である。312・314は直立にちかい脚部であるが脚端部内面の折返しが明瞭になっている。

鉢（315～326）　315～317・320は口縁部が内弯し、受口状を呈する鉢であるが、形状は微妙に異なる。316は屈曲気味に立上る口縁部、317・320は端部に面をもち刺突文を施すなどＳ字状口縁台付甕と共通部分がある。319も口縁部を欠損しているが、同様なものと思われる。ただし、317の外面はヘラミガキもしくは工具ナデ、320は体部に棒状工具による山形文を波状文風に施文する。

318は頸部の屈曲が弱く体部から一体気味な口縁部をもつもので脚台が付く。外面は二股状工具による簡単なナデ、内部は板状工具による強いナデで一部ヘラケズリ状となる。

321・322は口縁部と体部が一体となるものである。321の底部は輪台状、322には脚台と片口が付く。

323～325は有孔鉢である。323の孔は疑口縁状に剥離した可能性もあり。その場合は高杯となるが、確証を得ない。

326は318にちかい形態であるが、口縁部は若干の内弯をもって直立する。全体的に雑な仕上げで、残存が少なく、十分接合できなかった状況での図化のため体部形状に正確を欠く可能性がある。形態でみれば愛知県高橋遺跡出土の鉢[6]に似るが、その場合は壺状の平底となる。一方で、やや異形ではあるが、318と同系列に含めておくことも可能であろう。

手焙形土器（327～331）　覆が口縁部先端に接続するもの（330・331）と受口状の口縁基部に接続するもの（327・329）がある。328は覆を確認していないが手焙形土器と推測する。329には覆接合部の開口部に２本１組で一対の棒状浮文を施すが、左右で長さが異なる。330の覆外面の調整は1㎝に２本の粗いハケメとなり、二股状工具で掻き取るようなものである。

高杯（332～453）　332・333は盤状の杯部をもつものである。332は小片からの作図のため333にちかい形態の可能性もある。両者ともＶ－１様式で弥生後期初頭となり、ＳＤ12出土の高杯のでは最古である。334・335はそれに対応する脚部と思われるが、335の脚柱部上部は疑口縁となり、相当大きな円盤充填と考えられる。脚裾に横線文と小径の透孔を８方に施す。四日市市永井遺跡ＳＸ75出土の高杯[7]と同様のものとすれば、中期に遡ることになる。しかし、脚裾部に多数の小形透孔をもつ脚柱は後期初頭にかけても見られることから、ここでは後期初頭としておく。336の透孔は2段を確認でき、２方の下に３方を設ける。343にみられるような１個の下に３方の透孔を設けるものの異種としたが、尾張では廻間Ⅱ式には穿孔数が増加し、穿孔方法も多様化する[8]とされることから、そこまで降る可能性もある。

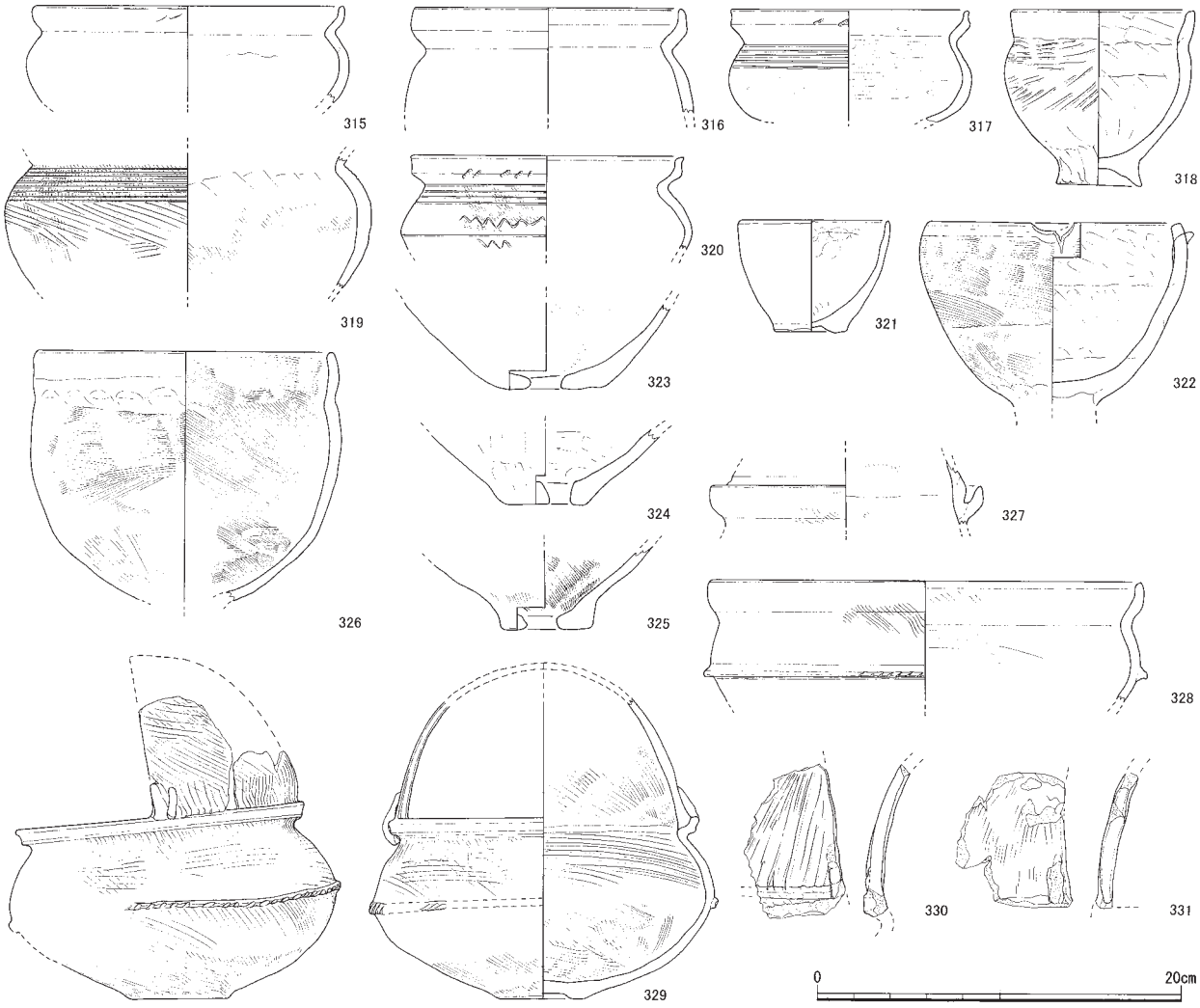
339・340・341は接合できなかったが一ヶ所から集中して出土したため同一個体の可能性が大きいものである。底部から屈曲して内弯気味に立上る口縁部で端部に内傾する面をもち、柱状部を残し内弯する脚が付くもので、Ⅵ－１様式に相当するものと考えられる。337・338と342・343も同一個体の可能性が

あり、344～347･349を含め、同様な様式に含まれるものと推測される。透孔を１個と３方の２段に施すもの(343・346)もある。349の透孔は残存部分では４方に推測できるが、確定できず、３方の可能性も残る。脚基部には横線文が施されるが、338・343は非常に浅く、痕跡程度である。また、340には横線の施文はない。346の脚部上端は杯部底とするには雑な仕上げのため、円盤充填の剥離による疑口縁と判断した。径６㎜の円孔が中央を貫通する。焼成前に棒状工具により空けられているが、制作時の必要性からのものと思われる。

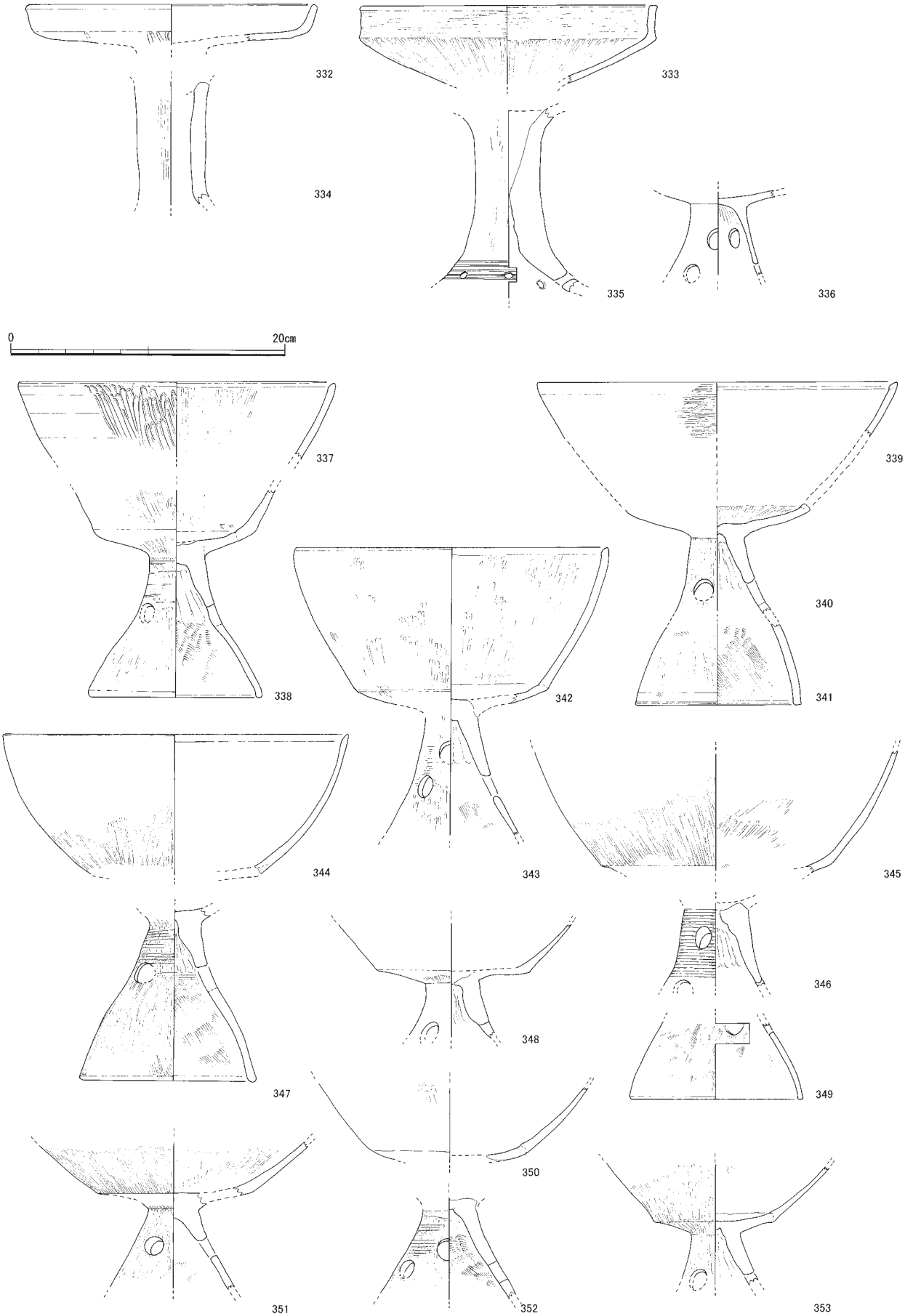
348・351～353は脚部の柱状部分はなく、脚基部から外方に開き始める。前述したものより時期が降りⅥ－２様式以降のものと考えられ、350についても杯部の屈曲が緩慢のため同様と思われる。横線の施文を確認できないものも多いが、352は横線文を施し、透孔も２段に施している。

358は前述したものと同様に脚が短縮し、脚基部から外方へ開き、内弯して接地する形状からⅥ－２様式と考えられる。354～357･359～373のうち、脚部の形状が明確なものは同様な時期と考えられるが、他のものについては時期幅をもたざるを得ない。ただし、371の杯部は浅く、屈曲も緩慢であることからやや降る可能性がある。360の脚部は比較的柱状部を残すが、脚は短縮している。横線文を施すものと無文のものがあり、透孔は３方で、２段に施すものはない。ただし、366は位置がずれており、４方の可能性もある。359は脚としたが、壺の可能性もある。口縁部とするには全体的に粗雑なため脚としておく。

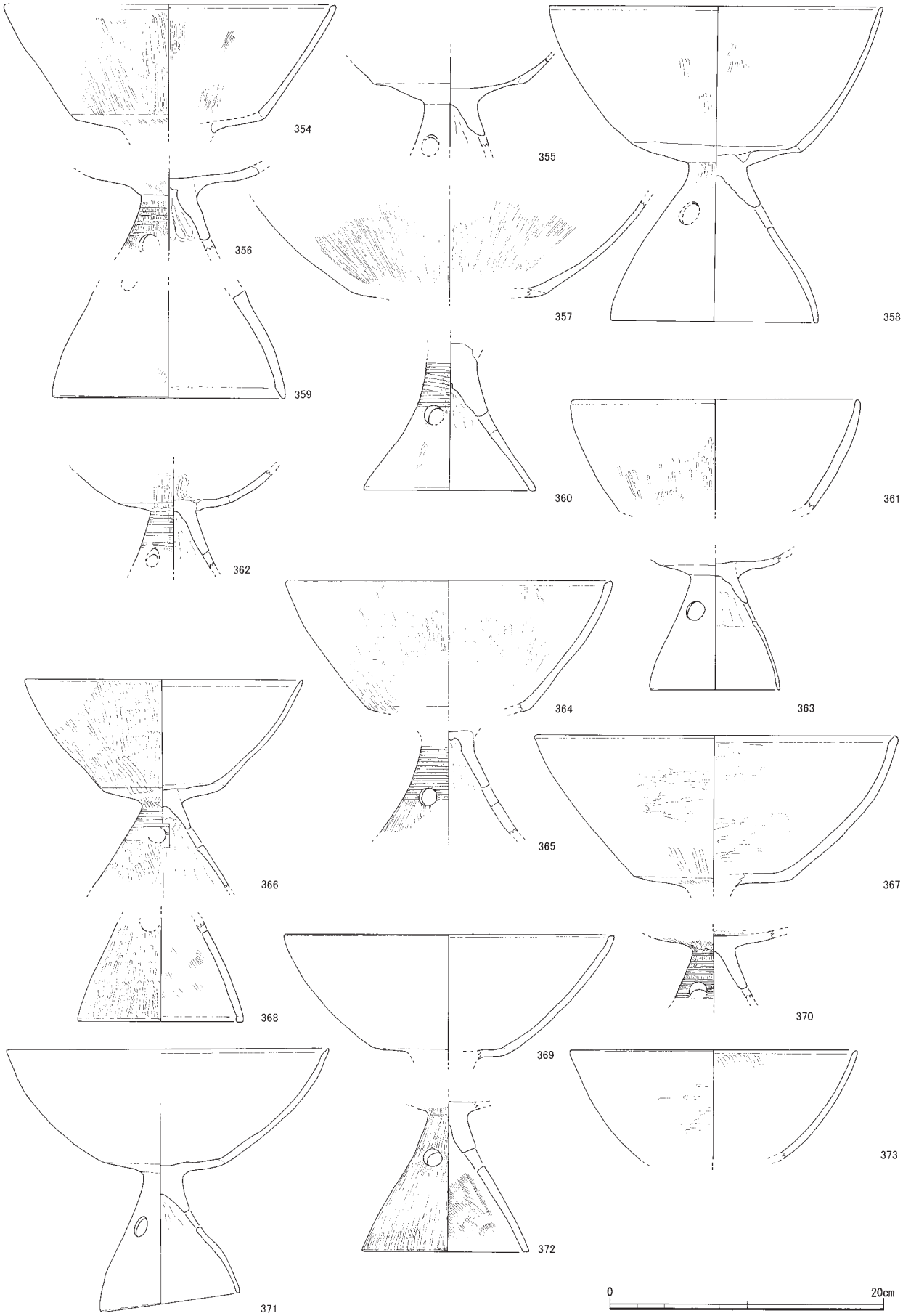
374～390のうち、脚の形態が明確なものは内弯を示さず直線的に開き、Ⅵ－３様式にちかいものと思われる。横線文を施すものは多く、全てに透孔が３



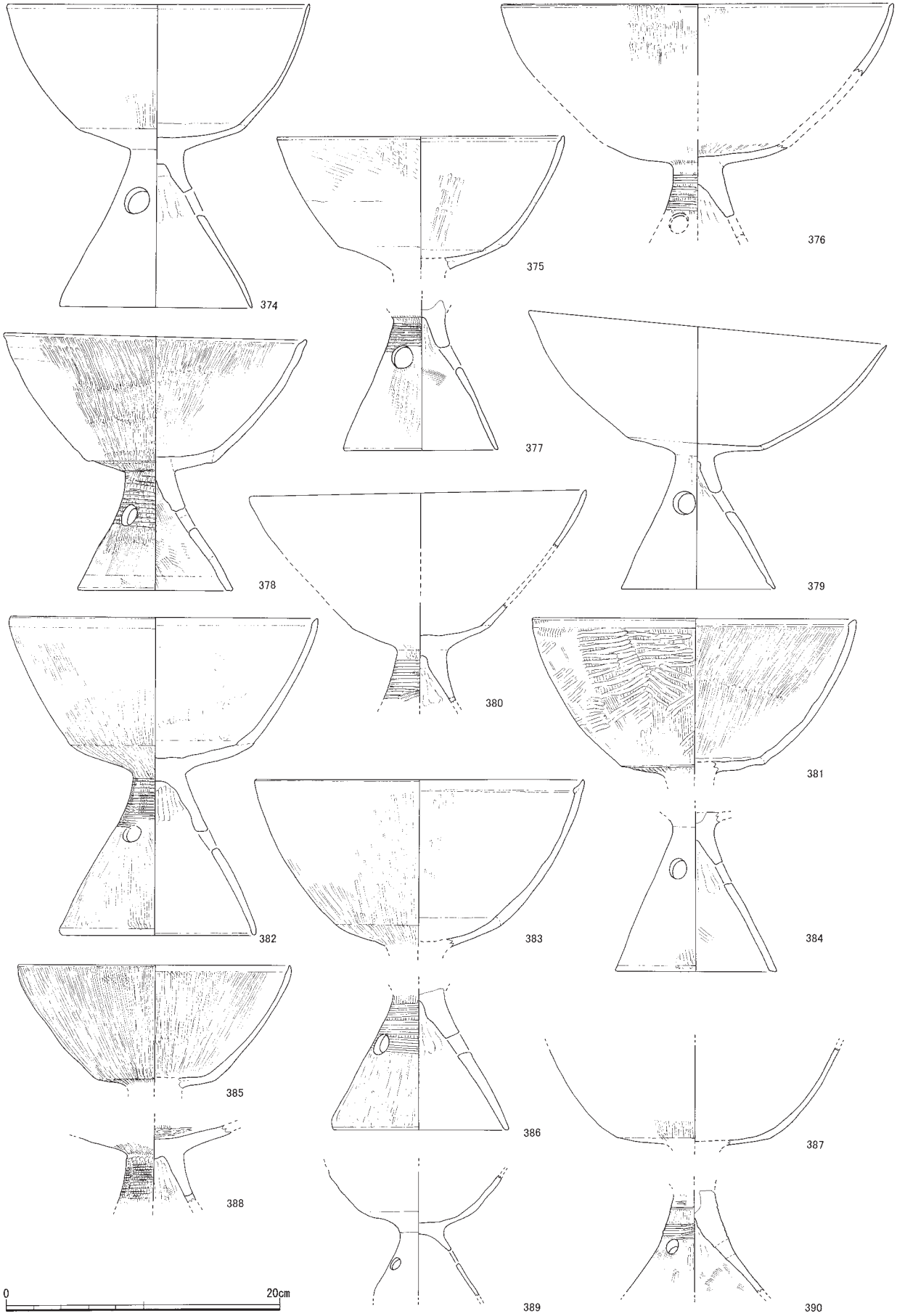
第19図　ＳＤ12出土遺物実測図　⑩　（1：4）



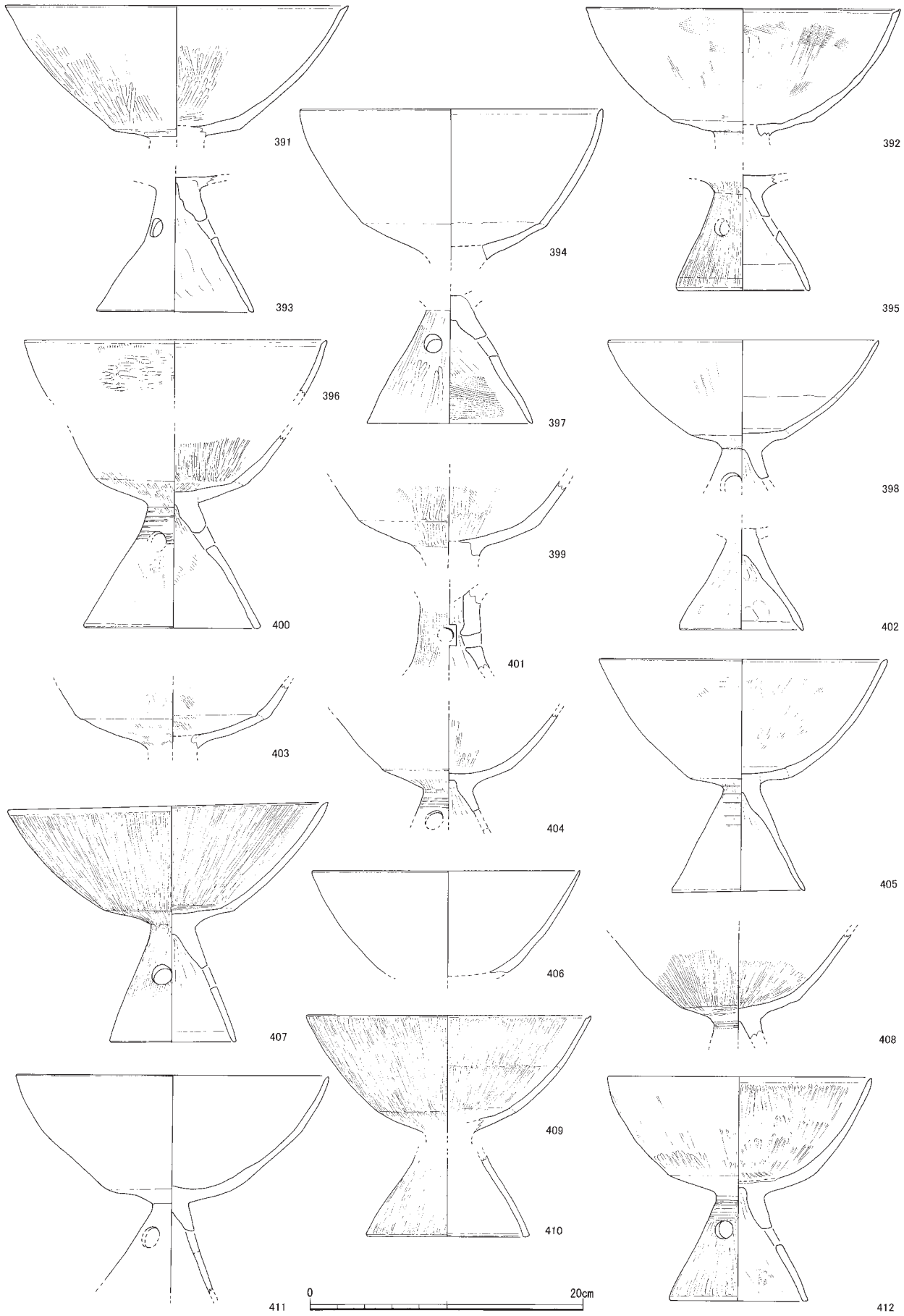
第 20 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　⑪　（1：4）



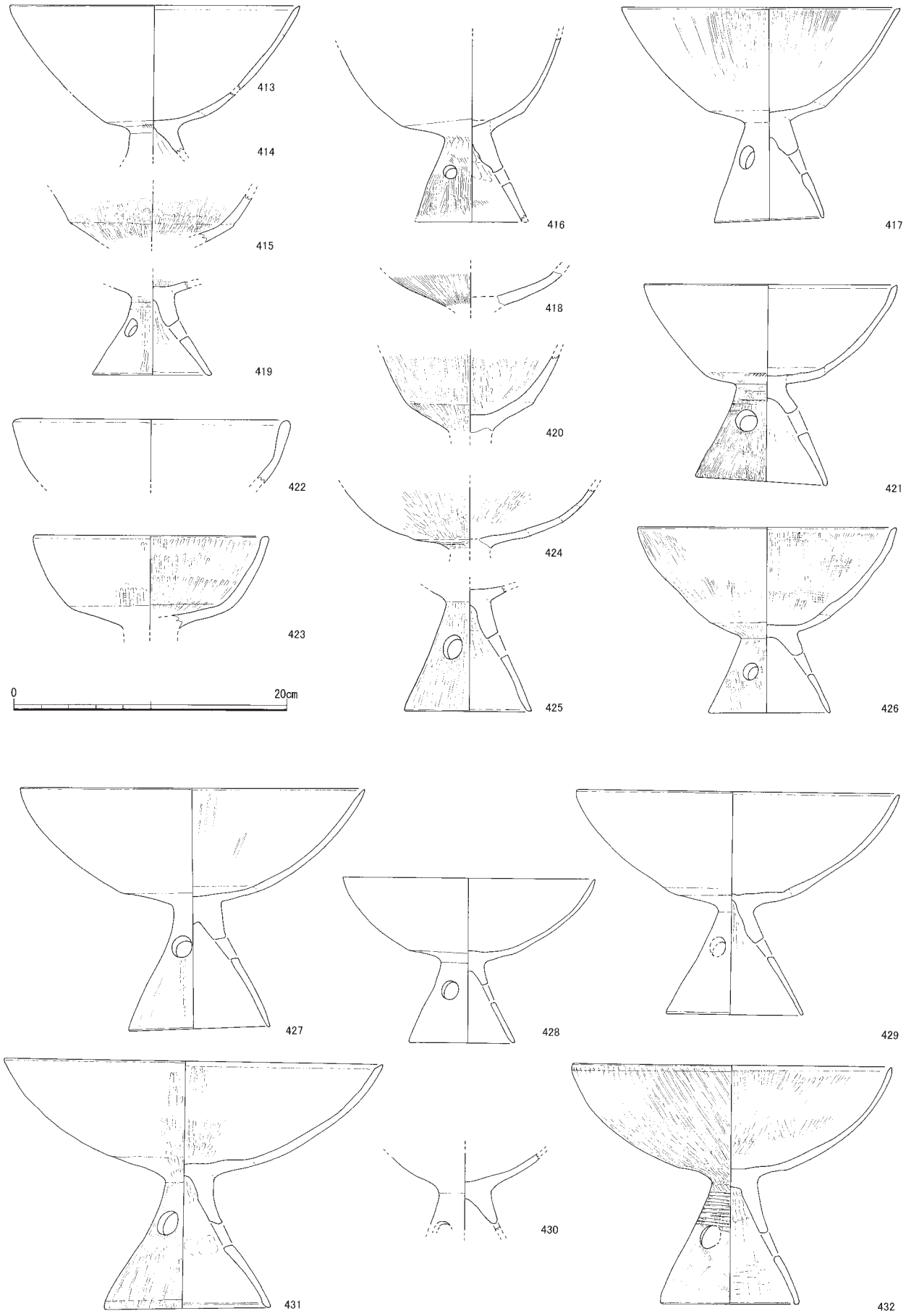
第21図　ＳＤ12出土遺物実測図　⑫　（1：4）



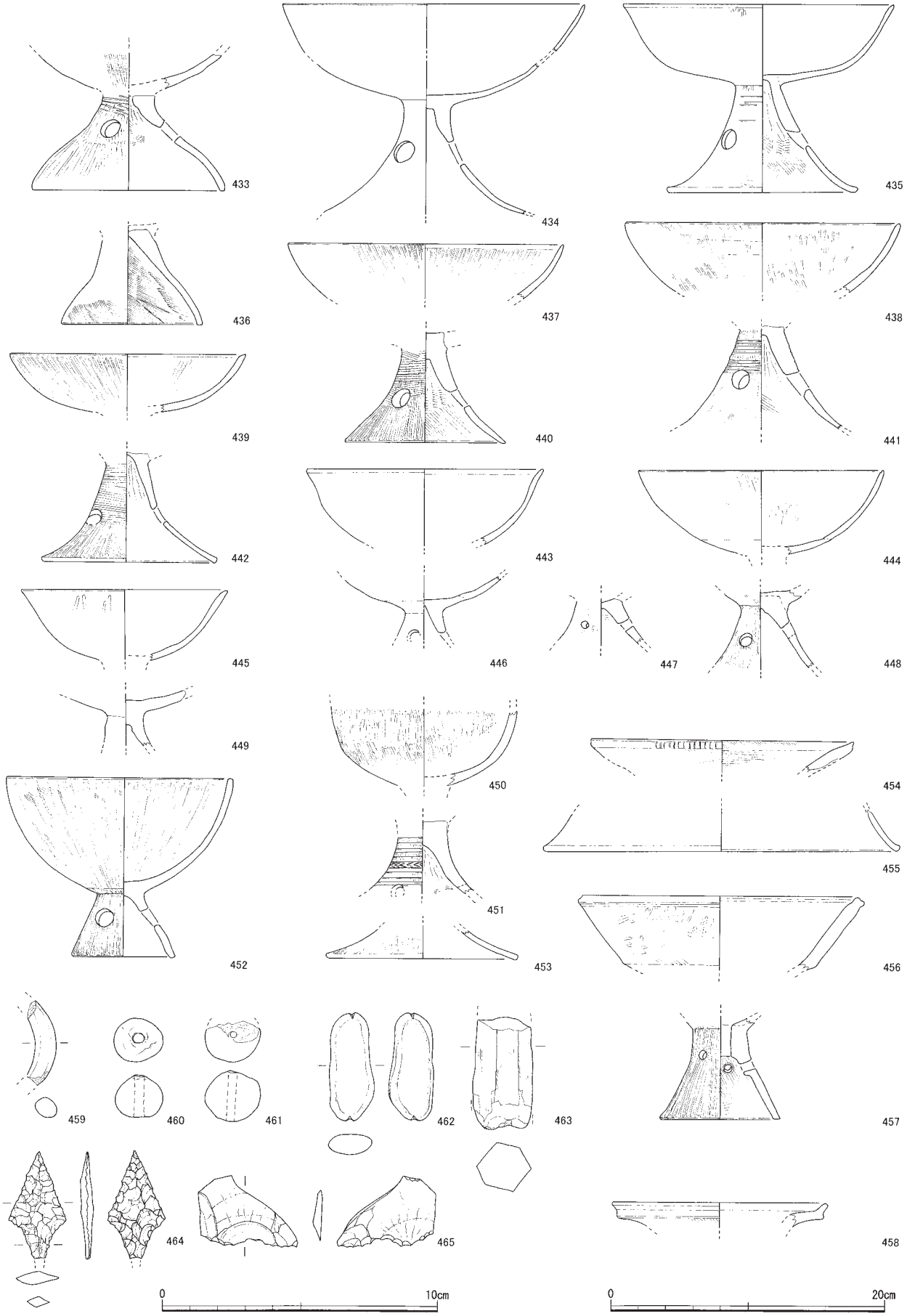
第 22 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　⑬　（1：4）



第 23 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　⑭　（１：４）



第 24 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　⑮　（１：４）



第 25 図　ＳＤ 12 出土遺物実測図　⑯　（１：４、464・465 ＝１：２）

方に施される。杯部の形態が明確なものでは底部が縮小し脚基部ちかくから口縁部が屈曲して立ち上がるものもみられる。ただし、374は図上での復元のため全体の形態に性格を欠き、389は杯部、脚部とも破断面は疑口縁となる。381の口縁部外面の調整は、縦方向のヘラミガキを施した後、やや幅の広い横方向のミガキを施す。

391 ～ 412のうち脚の形態が明確なものは、前述したものと同様あるいは脚の短縮が進んだもので、Ⅵ－３様式と考えられる。ただし、401は柱状部を残し、透孔は４方で、別系統の高杯の可能性もあり、詳細な時期は不明確である。杯部の形状は前述したものと同様であるが、やや小型である。392の口縁端部の内傾面には１条の沈線が巡る。402・405は透孔が省略され、402の外面のヘラミガキは強く、ヘラケズリ状を呈する部分もある。

413～426は前述したものより、さらに小型のものである。全体の形状が明確なものは少ないが、短脚のためか横線文を施すものは421のみである。ただし、419は横線文の位置に横方向のナデまたはヘラミガキを施している。414・424・426は杯部の屈曲が緩慢で椀形を呈する。423は杯部の規模に対して器壁が厚く、全体的に頑丈な印象を与える。422とともに別系統の可能性があり、椀型の杯部をもつ高杯とすべきかもしれない。

427～429・431・432は杯部の屈曲がなく、大きく外傾する口縁部をもち、前述のものと同様な脚部が付く。430は小片ではあるが同様なものと思われる。これらは地蔵層遺跡SB26出土の高杯[9]と酷似し、Ⅵ－３様式とすることができる。432のみに横線文が施される。

433～449は椀型の杯部をもつ高杯またはその脚部と考えられるものであるが、細部の形態は多様である。434・435は全体の形態が明確なものである。435は口縁端部が外反し脚基部に横線文が施されるようで、434と異なる。杯部の形態では435の他に437・443・445の口縁端部も外反する。444の口縁端部内傾面には１条の沈線が巡る。脚は外反するものが多いが、433・436は内弯する。脚基部から透孔までを横線文で装飾するものが多いが、442の横線文は、非常に浅いものである。

452は半球状の深い杯部に対し台状の短い脚である。450も非常に深い杯部と思われ、ワイングラス状を呈するものかもしれず、451・453はそれに伴う脚の可能性がある。451は間隔の広い横線と羽状に施す刺突文で装飾する。刺突文は二枚貝腹縁によると思われるが、直線的な刺突であり疑問も残る。

器台（454 ～ 458） 454は一応器台としたが、ハケメ調整で、外面の仕上げは雑である。456も一応器台としたが、高杯の可能性もある。口縁端部外面に棒状工具による１条の沈線、端部内面は強いヨコナデにより凹線状を呈する。457は直径1.4cmの棒を軸に作成しているようである。458は小型の器台で山城Ⅰ式[10]以降に並行するものと思われ、他のものより後出である。

土製品（459 ～ 461） 459は小片であり、不明とせざるを得ないが、把手の一部であろうか。460・461は球形の土錘であるが、460は焼成不良のためか全面黒斑となっている。

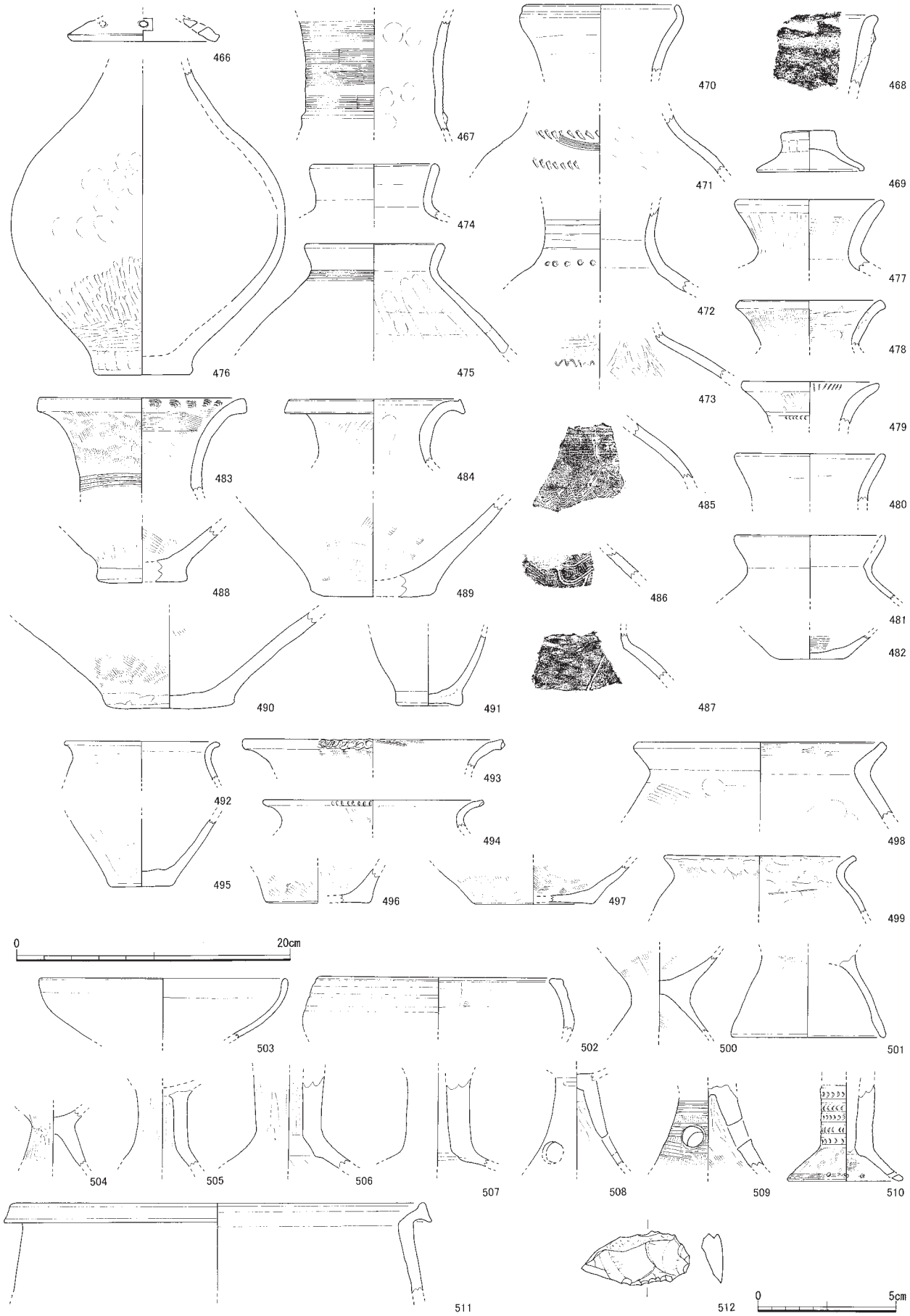
石製品（462 ～ 465） 462は石錘、463は砥石、464は石鏃、465は剥片である。462は自然石の両端に切れ目を入れたものである。463は六角柱を呈し、６面とも使用面である。464は比較的大型の凸基有茎鏃で、弥生時代に降るものと思われる。

３　ＳＤ１３出土遺物（第26図）

比較的多くの遺物が出土したが、512の剥片を除き全体の形状が明確なものはない。土器では、468の縄文土器、511の中世陶器を除き全て弥生土器である。弥生時代中期に遡るものが目立つが、終末期に降るものもある。

466・467は下層出土である。466は器台とした。直径0.7cmの円孔を外から内へ空けている。残存部分では３cm間隔で２ヶ所に空けられていることが確認でき、全周では11ヶ所と推測できる。ただし、波瀬Ｂ遺跡ＳＸ１出土のもの[11]の様に２個対に蓋用の紐孔として空けられたものもあり、壺の可能性も残る。467は筒状の頸部を横線と突帯で飾る広口壺と考えられる。第Ⅱ様式と思われ、弥生時代中期に遡るものである。

468は縄文土器の深鉢とした。口縁端部は外反気味となり、突帯に指により押し潰すかたちの刻み目を



第 26 図　ＳＤ 13 出土遺物実測図　（1：4、512 ＝ 1：2）466・467 ＝下層、475 ＝ＳＫ 17 出土　　■ ＝ 赤彩

施す。このことから８類[12]に相当し、樫王式に並行するもので、明らかに混入である。

469 は蓋、470 ～ 491 は壺である。470 は細頸壺で、口縁端部外面を工具により強くヨコナデすることにより凹線の代わりとしている。第Ⅳ様式と思われ弥生時代中期後半である。474・475 は短頸壺とした。475の頸基部には横線が施されるが、ハケメにちかい浅いものである。SD12の底部で検出したSK17 出土遺物と接合しており、ＳＫ 17 に帰属する遺物である。483・484は広口壺で、両者ともに口縁部外面に面をもつ。483は頸部下端に横線文、口縁部内面に扇形文を同一の工具で施している。477～481も広口壺としたが、直口壺にちかい形態である。479を除き加飾はない。479は摩滅が激しく口縁端部の形状が不明確ではあるが、頸部に棒状工具による沈線、その下が弱い突帯状を呈し、その上に半裁竹管による連弧文、口縁部内面に櫛状工具による刺突列点文を施している。478 は小片のため口径がもう少し大きくなる可能性を残し、477のハケメは内外ともに板状工具によるナデにちかいものである。482 は 481 と接合できなかったが、同一個体の可能性が高い。471～473 は口縁部を欠くが、いずれも加飾される。471はヘラの角による刺突を２段に巡らせ、その間に波状文を巡らせるが、波長が非常に長く、波状文とするに疑問もある。472は頸基部に竹管文を施し、その上部に横線文を施すように見えなくもないが、摩滅のため確証を欠く。473は細い棒状工具による 1本波状文を施し、内面には鋭利な工具による間隔の広いハケメ状の痕跡がある。485・486も口縁部を欠くが、広口壺の体部片と考えられる。両者とも横線文や波状文で加飾されるが、486は施文具中央が浮いた状態である。487も壺の体部片であるが、外面にヘラによる沈線が直線状に刻まれる。小片のため記号か絵画かは不明である。

492～501は甕で、492～494 は口縁部が水平ちかくまで外反するものである。小片のため口径の正確を欠くが、493・494の口縁部には刻目を施し、493 の施文はハケメの原体を使用しているようである。弥生時代中期に遡るものと考えられる。498・499はく字状に屈曲する口縁部をもつもので、両者とも頸部から口縁部外面を工具による強いヨコナデを施す。ただし、499 はヨコナデを強く施すものの指押えも目立つ雑な仕上げである。脚台（500・501）の出土もあるが、これらが脚台をもつかどうかは不明である。

502は台付鉢としたが、高杯の可能性もある。口縁部内外面を板状工具により強くヨコナデするが、内面は一部ヘラケズリ状を呈する。外面には一部凹線状を呈する部分もあるが、凹線施文を意図したものかは摩滅もあり不明である。

503～510は高杯である。503は小片で摩滅も激しく弥生土器とするに疑問もあるが、金剛坂遺跡ＳＸ６出土のもの[13]のような浅い椀状の杯部をもつ高杯と推測し、Ｖ－１様式とした。504～509は脚部で、505 ～ 507 は柱状部をもち、506には赤彩が残る。508・509 は透孔が施され、509には横線文を加える。これらの脚部はいずれも脚裾部や杯部を欠損しているが、508・509は明らかにⅥ－２様式以降である。510 は一応高杯としたが、器台の可能性もある。棒状工具を芯にして成形された柱状部の下端部が大きく開く形態を呈し、柱状部には棒状工具による沈線を６本巡らす。沈線間には半裁竹管文を段毎に向きを変えて施文する特異な文様である。脚裾には直径0.3cm の円孔を１cm 間隔の２個を１組として四方に空けている。沈線、半裁竹管文、円孔は同一工具による施工の可能性もある。外面の一部には赤色顔料が残るが、本来は脚全体に赤彩が及んでいたものと推測できる。

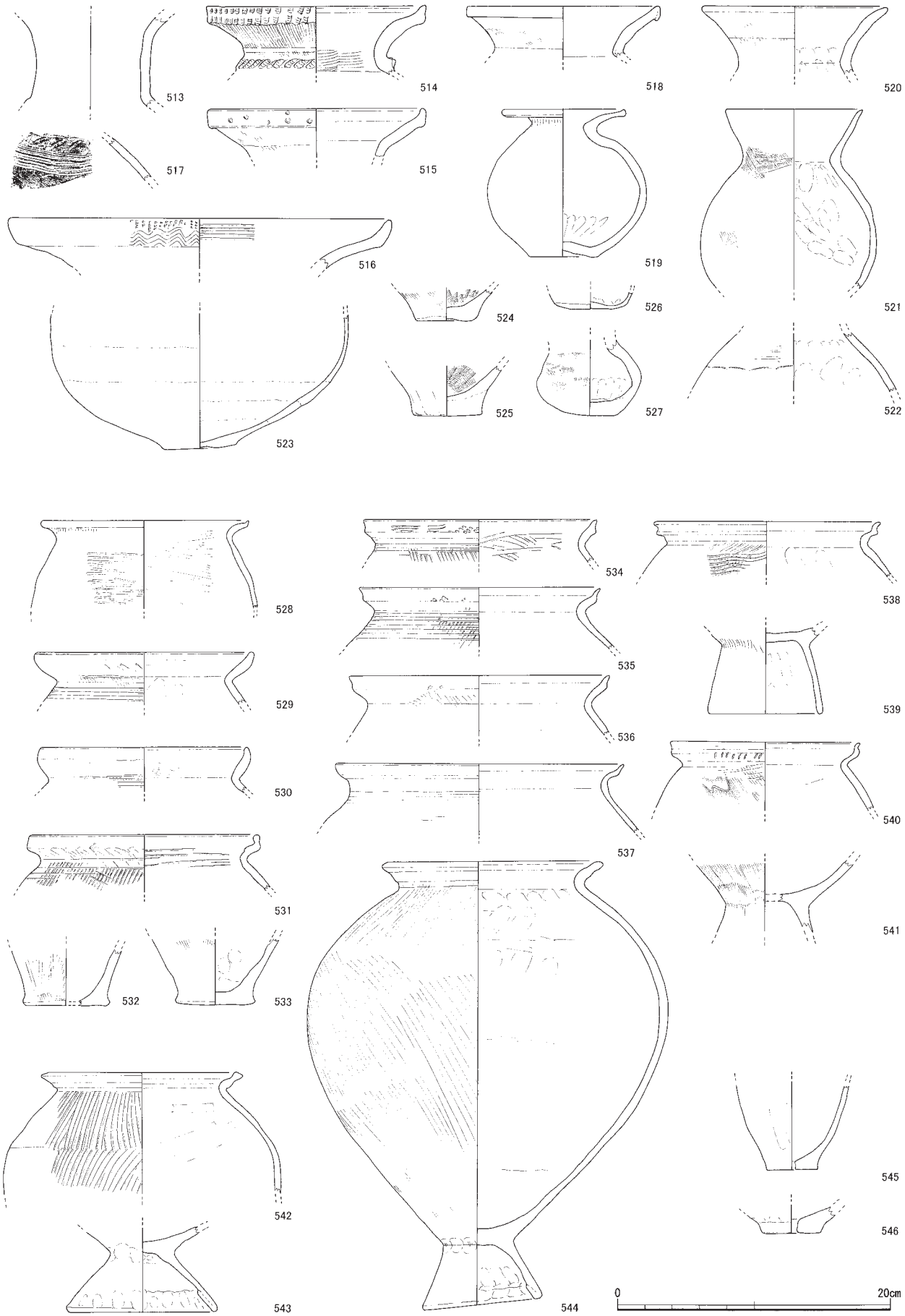
511は陶器の甕である。口縁部は比較的幅の狭い縁帯を形成しており、常滑の５型式から6ａ型式[14]までに並行すれば13世紀中頃となり、明らかに混入遺物である。

512 は剥片である。一部に母岩面を残す。

４　ＳＤ１０出土遺物（第 27・28 図）

出土状況は一連の遺構であるＳＤ 12 と同様な状況で、多くの遺物が出土している。古墳時代中頃の遺物もあるが、重複するＳＫ９からの混入と考えられる。

513～527は弥生土器の壺で、522は体部に二枚貝腹縁による連弧文が施されることから瓢形壺、526・527は小型の壺である。他は底部片を除き広口壺である。広口壺には筒状に直立する頸部をもつもの(513)と体部から外方に開くものがある。後者のうちで



第 27 図　ＳＤ 10 出土遺物実測図　①　（1：4）　　■ ＝ 赤彩

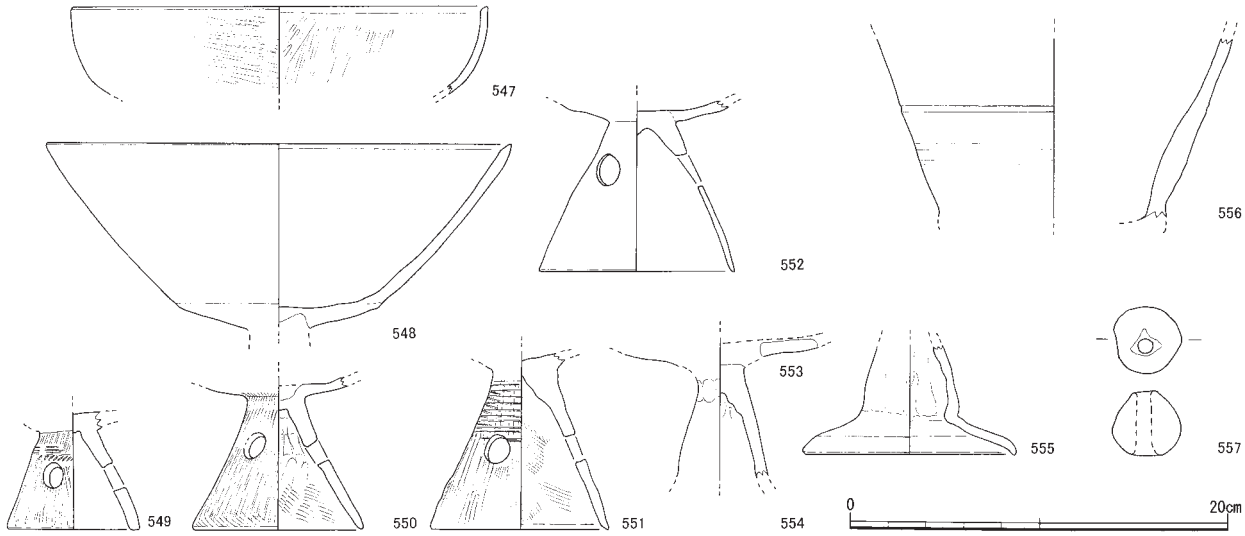
514・515・516は口縁端部を上方に摘み上げることにより面をもつもので、516は受口状を呈する。いずれも加飾され、515は竹管文を2段に、516は櫛による刺突列点文に波状文を加え、口縁部内面にも横線文を施している。横線は、櫛状工具によりヨコナデしたもので、文様としての意識があったのかどうか疑わしいものである。514は体部との境に突帯を巡らせ、口縁部と突帯上に櫛による刻目を施すが、口縁部のものは若干押引き状となる。頸部にはハケメを残すが、突帯の上部裾に一周強く工具によるナデを施す。痕跡程度の残存からであるが、口縁部内外面を赤彩していることが分かる。517・523も同類の体部と思われるが、523は剥離・摩滅が激しく器壁厚をはじめ細部は不明確である。体部上半を疑口縁により欠損するものとして壺としたが、ここまでで壺の製作を中断し、鉢として利用した可能性も考えられる。518は口縁端部を外に折り返すことにより幅の狭い面を形成しているが、加飾はない。519は鋭角状に大きく開く口縁部であるが、頸部を工具による面取り風の強いナデで調整するが、ハケメ状を呈する部分もある。

528～541は弥生土器の甕である。528はく字状に屈曲する口縁部をもつものであるが、剥離が激しく口縁部厚や端部形態が不明確である。体部外面上部には横方向のハケメがみられるが、浅いものである。ヘラミガキにみえる部分もあるが、摩滅のため確証はない。529～531は受口状の口縁部をもつものである。529・530は口縁部の屈曲が緩慢であるが、S字状口縁台付甕0類にみられるような口縁端部の面取りはなく丸く収めている。摩滅により不鮮明であるが、口縁部外面の刺突文も押引きではなく、ヘラ状工具による刻目ともみえる。531は直角に屈曲し、完全な受口を呈するが、端部の摘み出しや面取りはない。文様・調整は529・530と共通するが、口縁端部の刺突文については摩滅のため不明確で、その可能性を示す疑いのある痕跡を認める程度である。534～537も受口状を呈するものである。外面は鋭利な面であり端部を摘み出し、S字状口縁台付甕A類にちかい形態である。しかし、内面の屈曲は緩慢であり、端部の面取りも不鮮明である。なお、537は激しい摩滅のため器厚を正確に示していない。538はS字状口縁台付甕B類、540は同A類としたいが、540は屈曲が緩慢である。体部上端に横方向のハケメを施すが、加えて波長の不安定な浅い波状沈線が認められる。しかし、文様を意識したものかどうかは不明である。

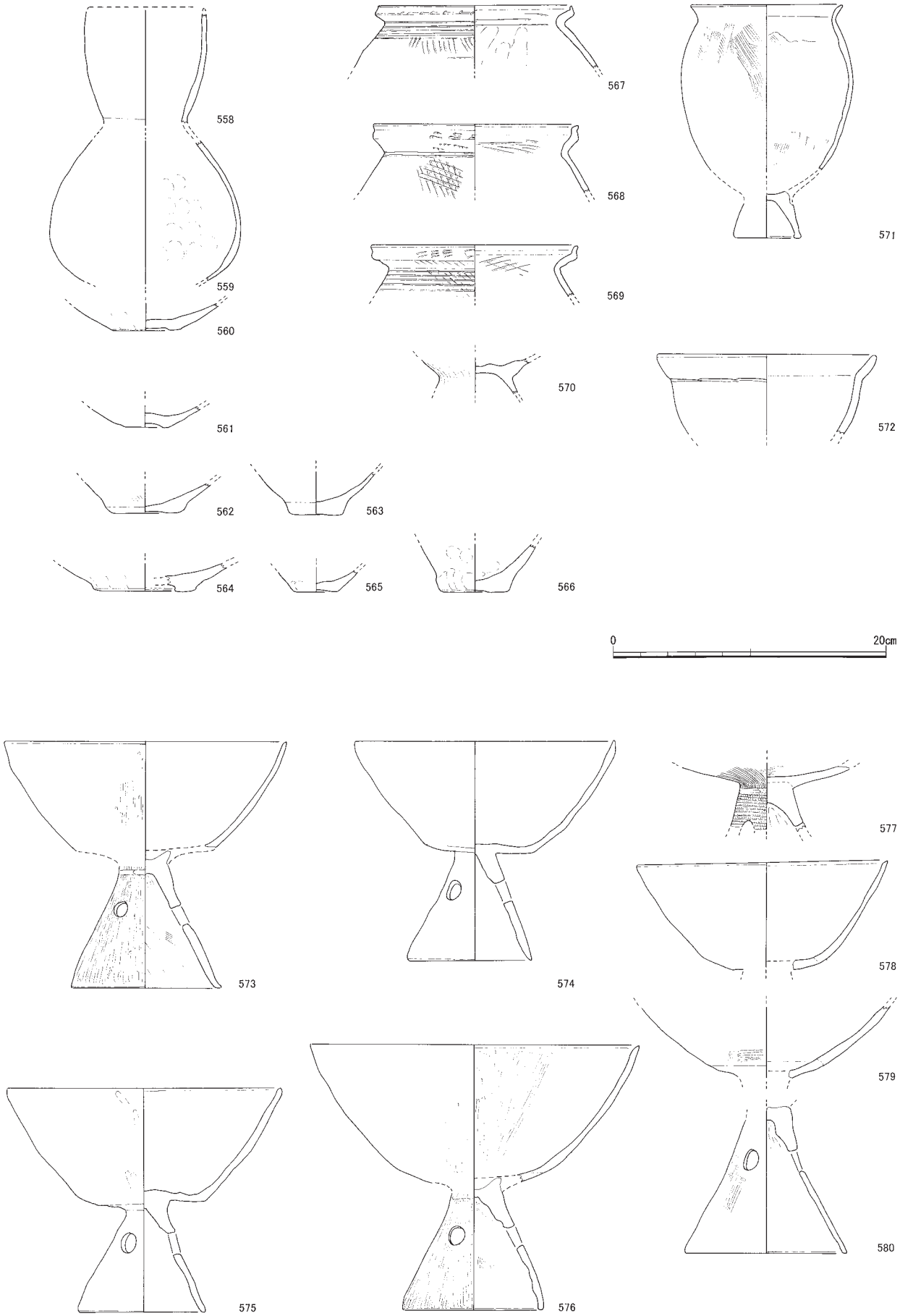
542・544はS字状口縁台付甕D類に分類され、土師器と称すべきものである。543はこれらに伴う脚台と考えられ、これらは他のものより明らかに後出で、重複するSK9からの混入と考えられる。

545・546は弥生土器の鉢で、両者とも底部中央に円孔をもつ有孔鉢である。545の体部内面は指で掻き取るように強くナデられている。

547～555は高杯である。547は椀形の杯部であるが、深さが皿状に減じている。小片からの作図のため正



第28図　SD10出土遺物実測図　②　(1：4)



第 29 図　ＳＺ 11 出土遺物実測図　（1：4）

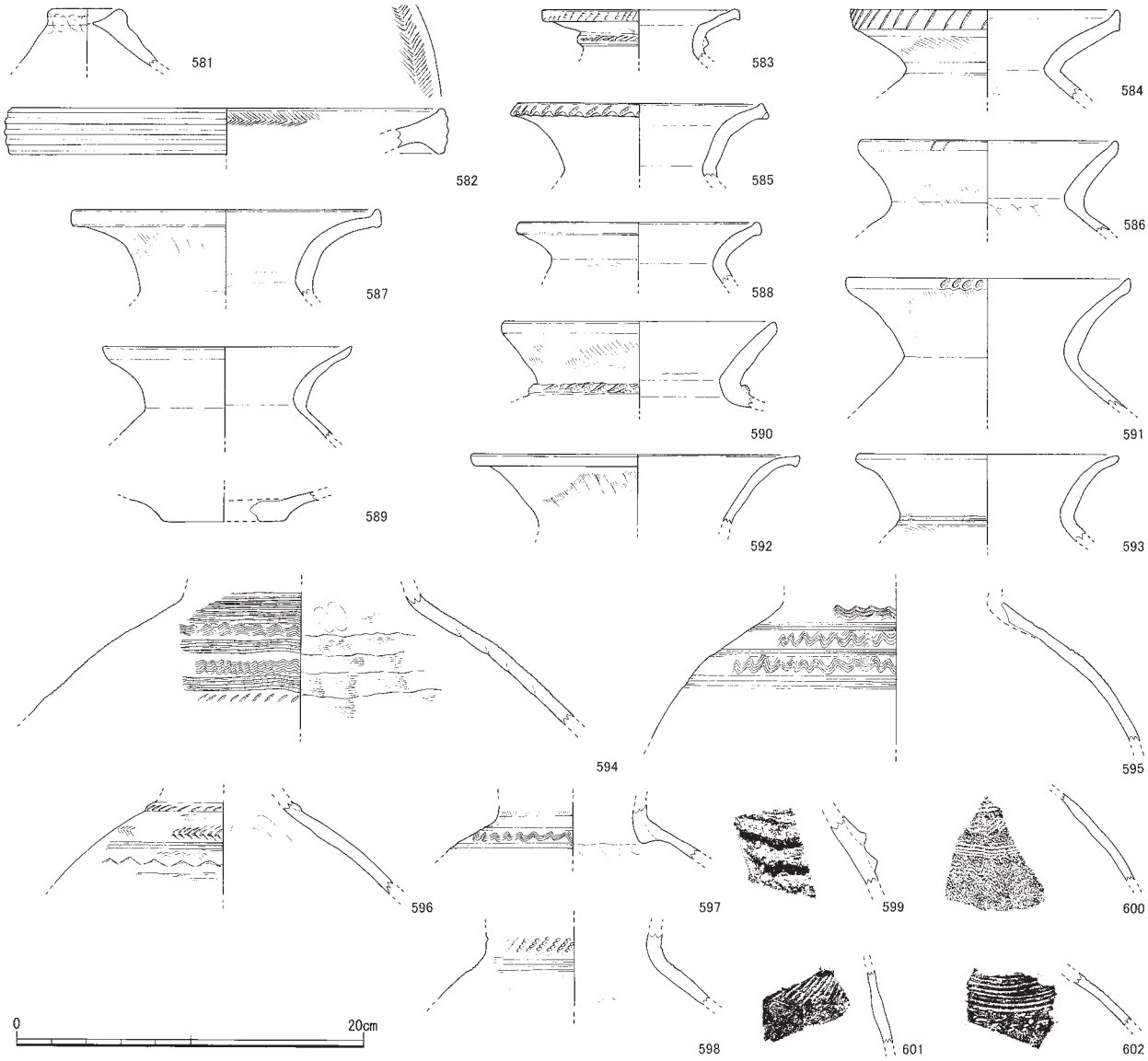
確を欠くが、地蔵層遺跡SB47出土のもの[15]と類似するものであろう。脚は全て短く、僅かに内弯傾向が認められるものが多いが、550は直線状で横線文も認められない。これらはⅥ－３様式以降のものと考えられる。549は櫛描の横線を巡らすが、不明瞭で、施文後、ヘラミガキで消しているようにもみえる。横線下に施すヘラによる刻目も同様である。脚の形態も特異なもので、脚の途中で切断し短脚にしたような形状である。なお、552の器厚が薄いのは摩滅のためである。

553と554は接合できなかったが、同類の高杯と思われ555と同様に須恵器が伴う時期まで降る可能性がある。556は須恵器の擂鉢で、これらは既述した甕と同様、ＳＫ９からの混入と考えられる。557は土製品で球形の土錘である。

５　ＳＺ１１出土遺物（第29図）

遺物が集中して出土したもので、土坑は伴わないものの比較的一括性の高いものである。後述するようにＳ字状口縁台付甕Ａ類や短く直線的に開く脚部をもつ高杯等の特徴から弥生土器Ⅵ－３様式のものが中心と思われ、壺（558～566）、甕（567～571）、鉢（572）、高杯（573～580）がある。

558～561は瓢形の壺で、558～560は同一個体の可能性がある。他の壺は、底部片のみであり口縁部形態は不明であるが、広口壺と思われる。ただし、566



第30図　ＳＫ９出土遺物実測図　①（１：４）

は甕の可能性もある。

甕は全て小片であるが、台付甕と思われる。571はく字状に屈曲する口縁部をもち、568・569はＳ字状口縁台付甕Ａ類として良いであろう。567はＳ字状口縁台付甕と同様な文様・調整であるが、受口状に短く口縁端部を摘み上げるに止まる。567～569の口縁端部外面には櫛状工具による刺突列点文を施すが、568・569は押引き状に流れたものとなっている。体部上端には横方向のハケメを施すが、３者とも櫛状工具による横線と判断でき得る深いものである。

高杯の杯部は比較的深いもので、杯底部から屈曲して口縁部に至るが、576・579は屈曲が緩慢である。脚は576が若干内弯傾向を残す他は、直線的なもので、３方に透孔を施す。脚基部に横線文を施すものは577のみであるが、非常に浅いハケメ状のものである。ただし、573の脚基部には縦方向のヘラミガキの後、横方向の幅の広いヘラミガキを一周させる。573の脚内面は板状工具によるナデまたは浅いハケメともとれるもので、576も同様である。

６　ＳＫ９出土遺物（第30～34図）

ＳＤ10・12の上層部分であるが、明確に層位を把握できていない状況のため、ＳＤ10・12に伴う遺物が多数混入しているものと思われる。弥生時代終末期のものと古墳時代中頃のものに概略大別され、後者が本来ＳＫ９に伴うものと考えられる。

581～602は弥生時代終末期のものと考えられる。581は一応蓋としたが確証はない。台付甕の脚部と酷似した形態であり、蓋に転用した可能性もあるが、摩滅により不明確である。天井部に0.5cmの円孔を空けるが、故意によるものか摩滅の結果によるものかは不明である。

582は広口壺で、凹線文と羽状刻目を施す加飾性の高いものである。羽状刻目は細かい櫛のようにも見えるが摩滅のため明確でなく、ヘラの可能性も残る。583～593も広口壺で、口縁部に刻目等の簡素な加飾を行うものがある。583～586・591は口縁端部外面に刻目を施すが、583は押引き状である。585は口縁下端にも刻目を施し、583は頸部に刻目を施した突帯を巡らす。同様な突帯は590にも施され、593では横線となっている。589は胴部を欠損するが、口縁部と底部は同一個体と判断した。

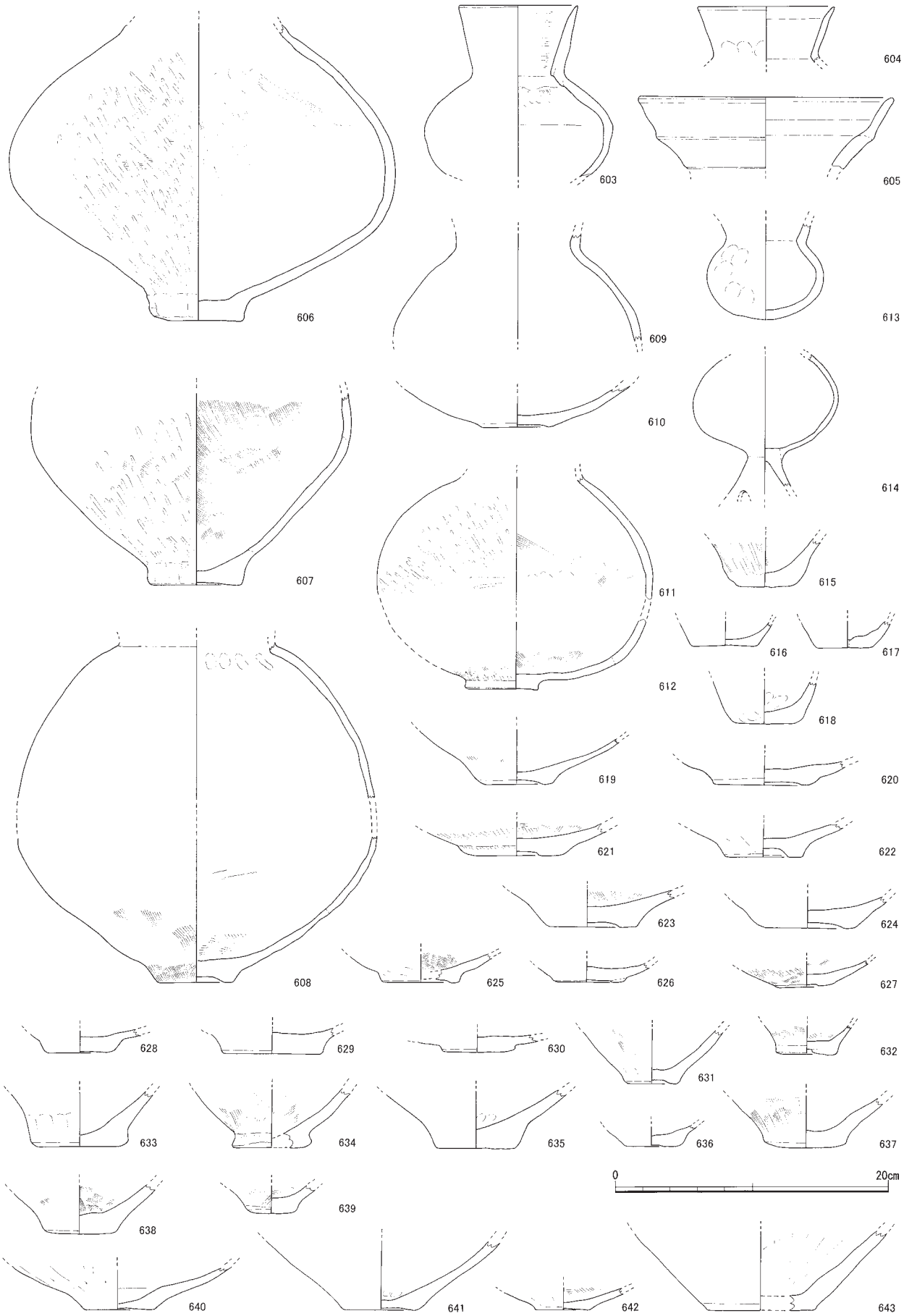
594～602は壺の体部である。口縁部を欠くものの広口壺と思われる。横線文と刻目または波状文で飾るものが多いが、596は刻目を施した突帯と羽状の刻目、山形文を加える。597にも突帯が施されたようであるが、剥離している。２条以上の沈線と波状文で飾り、波状文上方にも１条の沈線が巡るようにみえるが、突帯が剥離した影響かもしれない。601は櫛による刺突列点となるべきところを櫛により掻き下ろし、斜行線文としている。599は肩部に２条の突帯を巡らす「パレススタイル」と呼ばれる壺であろう。

603～643も弥生時代終末期のものと考えられるが、605は二重口縁壺、613は小型丸底壺で明らかに古墳時代に降るものである。603・604は直口壺とした。603の口縁部内面の横方向のハケメは、ナデの痕跡かもしれない。606～612も壺であるが、口縁部または体部上半を欠損している。加飾されるものはなく、609は610と、611は612と接合できなかったが、同一個体の可能性がある。

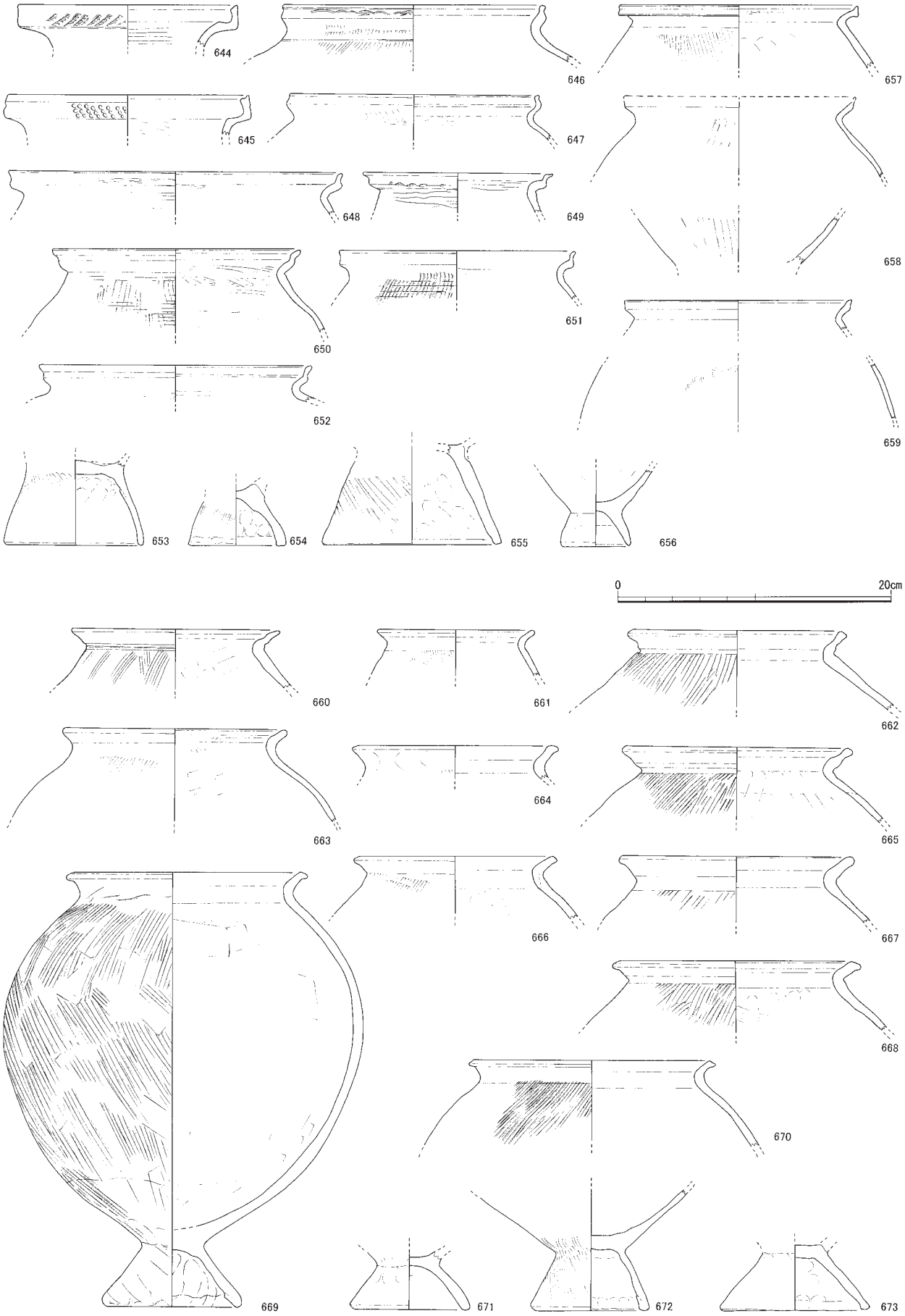
614は脚の付くもの、615～643は壺の底部である。615～618は小型で、617は、粘土紐の痕跡が明瞭に残る雑な仕上げである。619～627は底部からおおきく広がる体部で、底部が輪台状を呈するものである。628～630は同様な形態であるが、輪台状を呈しない。631・632は底部から斜め上方に立ち上る体部で底部が輪台状を呈するもの、633～639は同様な形態であるが、輪台状を呈しない。640～643は体部厚と比べ底部厚の変化が少ないもので、体部は底部から大きく広がる。

644・645は受口状の口縁部を呈する甕である。両者とも刺突列点文を加えるが、644はやや押し引き状である。

646～652は口縁部がＳ字状に屈曲する甕で、653～656に示すような脚台をもつものと考えられる。しかし、646・647は屈曲が緩慢で、端部も丸くおさめる。648・649は施文等に違和感もあるが、Ｓ字状口縁台付甕Ａ類、650～652は同Ｂ類としてよいものと思われる。646・648・649の口縁部外面には櫛による刺突列点文が施されるが、押引き状を呈し、特に646は大きく横引きになる。また、649は櫛というよりもヘラによる刻目に見える。体部上端には横方向のハケメ



第 31 図　ＳＫ９出土遺物実測図　②（１：４）



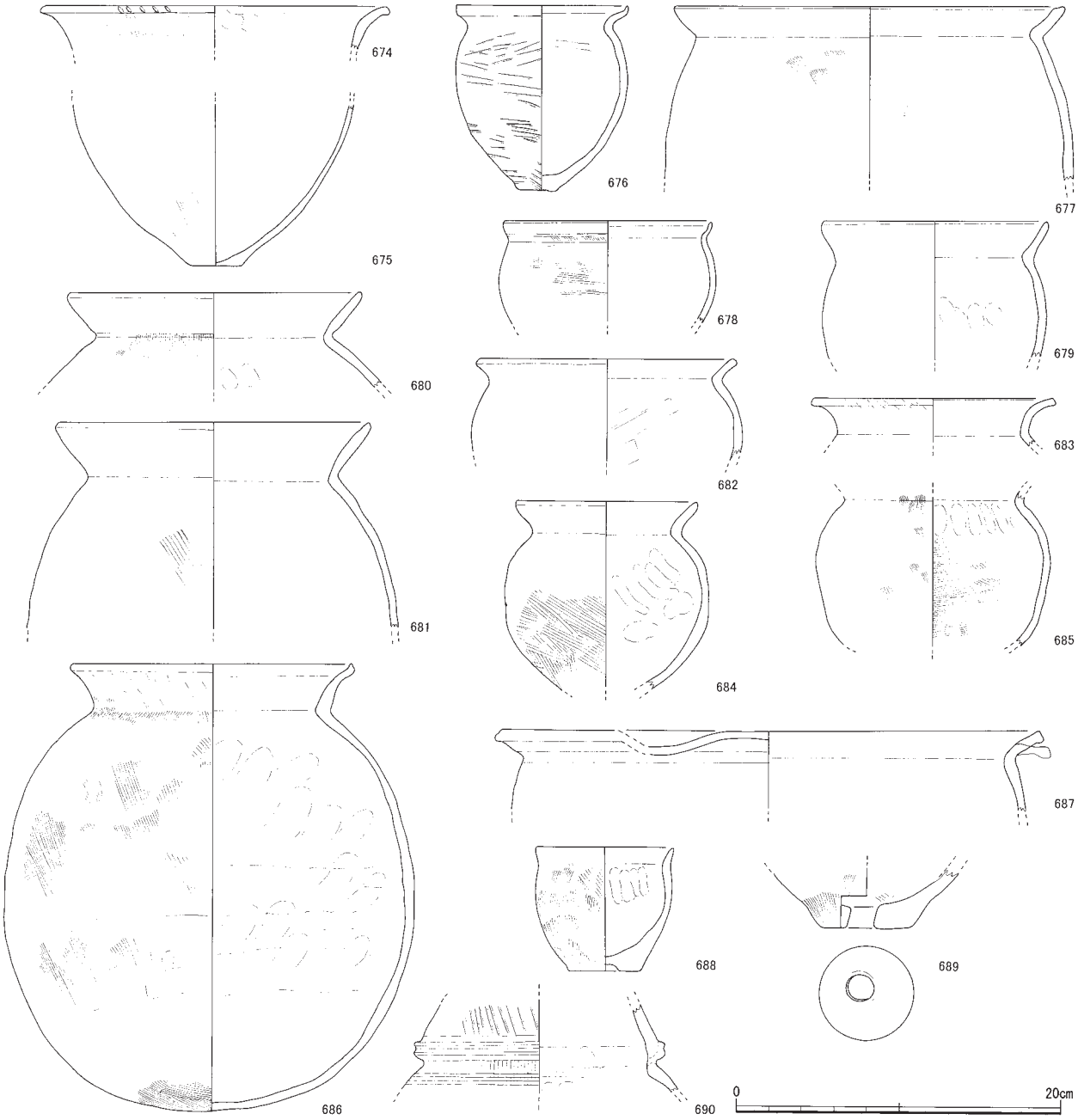
第 32 図　ＳＫ９出土遺物実測図　③（１：４）

が施されるが、646は櫛によらず、板状工具の角で押し引く。649の頸部との境には１条の沈線が巡る。

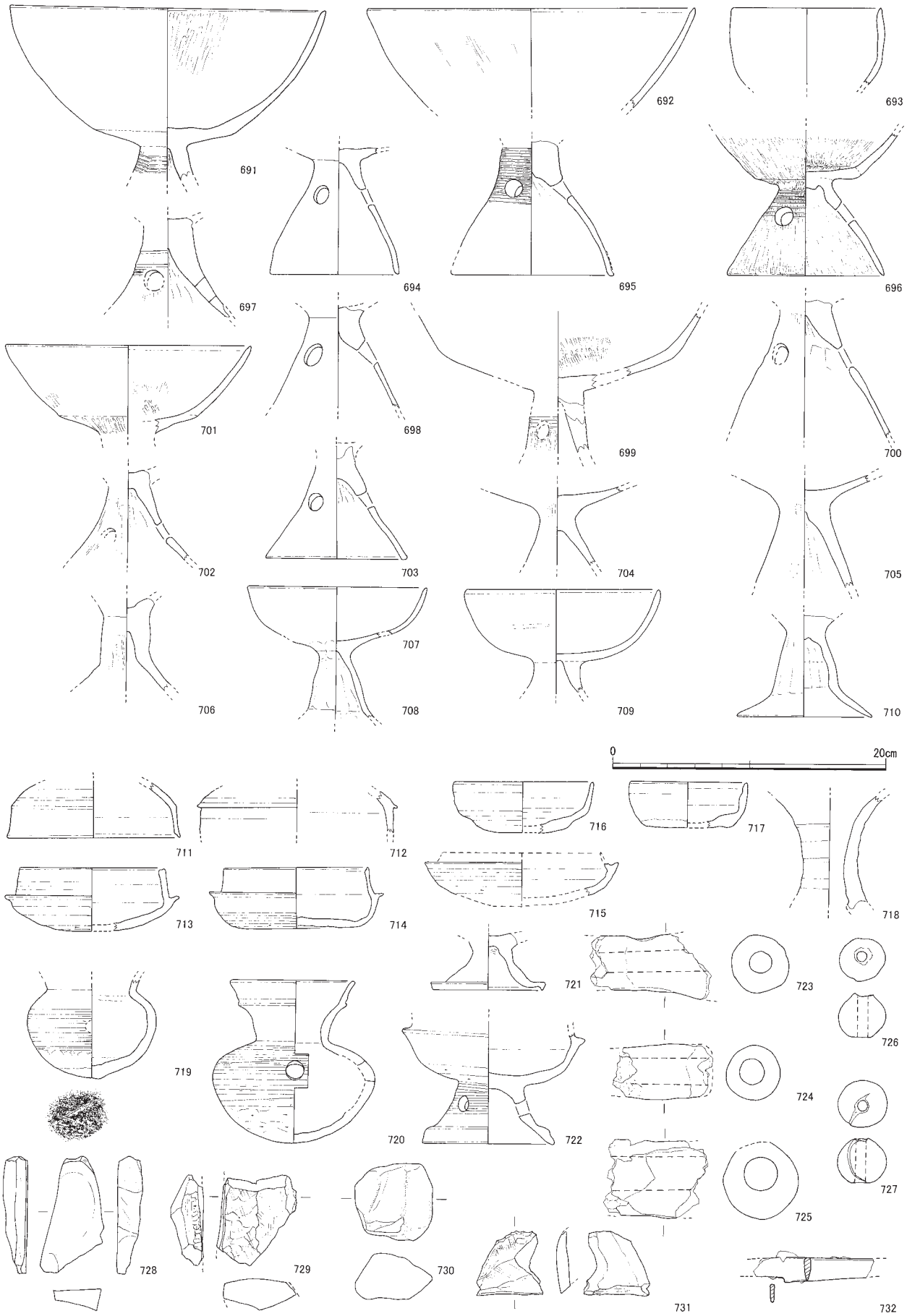
657は端部をつまみ上げることにより、若干の受口状を呈するもので、口縁部の屈曲は鋭利なものである。土師器としては比較的高温で焼成されている。658・659も口縁端部をつまみ上げる傾向があるが、摩滅が激しく器厚を含め不明確である。

660はS字状口縁台付甕C類と類似した形態であるが器壁が厚く、体部上部の横方向のハケメもない。ただし、体部と頸部の接点に二股状工具による強いヨコナデがあり、あるいはハケメ工具の角によるものかもしれない。

661～670はＳ字口縁台付甕のＤ類から宇田型に相当するもので671～673はそれに対応する脚部と考えられる。662･665は口縁部の屈曲を比較的残しＤ類、670は口縁端部の肥厚のみが目立ち宇田型とすべきであろう。他のものについては、その中間的要素をもつが宇田型にちかいものと考えられる。ただし、661については口縁端部の面が未発達である。669の体部外面のハケメは工具が強く当たるところが一部にあ



第33図　ＳＫ９出土遺物実測図　④（１：４）



第 34 図　ＳＫ９出土遺物実測図　⑤（１：４）

り、ヘラケズリ状を呈する。

674は水平ちかくに開く口縁部をもつ甕で端部に刻目を施し、弥生時代中期に遡るものである。675はそれに相当する体部と思われるが、摩滅が激しく明確ではない。

676はタタキで調整される甕で、関西方面で普遍的にみられるもの、677～679は口縁部が内弯する甕で近江や伊賀地方でよくみられるものである。677は長胴を呈し、679と共に古墳時代中頃以降のものである。

680～686はくの字に屈曲する口縁部をもつ甕で、いずれも古墳時代中頃以降のものと思われる。686は口縁端部を摘み上げ丸底を呈する。683の口縁部には工具痕が残るが、刻目とは思えない。684の内面のナデの一部は、指により掻き取るような強いものである。

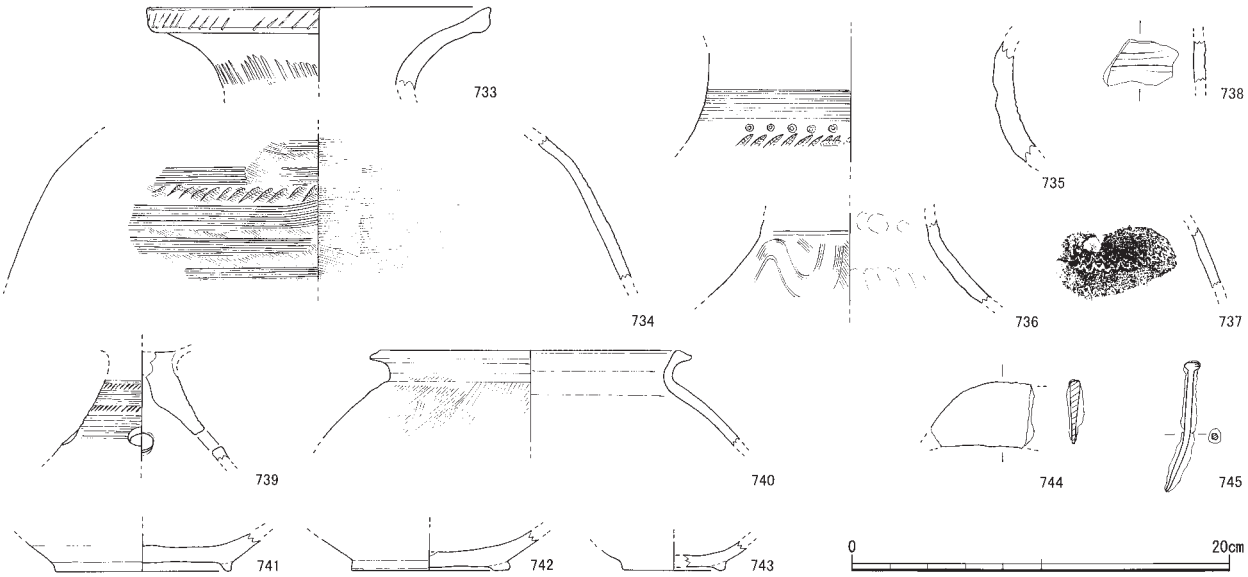
687もくの字に屈曲する口縁部をもつものである。破片のため明確ではないが、口縁部を指で押し下げることにより片口を形成している。甕としたが、鉢の可能性もある。

688・689は鉢、690は手焙形土器で、689は有孔鉢である。688の外面の調整は、ハケメの後ナデかヘラミガキを施しているようだが明確ではない。仮にヘラミガキを施しているとすれば、橙色を呈することを加え、壺にちかい体裁となる。

691～710は高杯であるが、707～710は山城Ⅴ式に多くみられる[16]もので、明らかに古墳時代中頃に降るものである。710は内外面ともに工具によるナデで調整するが、面取状を呈する。691・692・699は深い杯部であるが、691・699の杯底部からの屈曲は緩慢である。701も同様であるが、杯部の外頃が大きく浅いもので、これらはⅥ－３様式と考えられる。脚はいずれも低いものと推測されるが、694・695は内弯し、Ⅵ－２様式に遡る。脚基部に横線文と透孔を３方に設けるが、702・705・706には横線文が施されない。700の透孔は3方としたが、内1個は位置が高く不揃いである。しかし、３方透孔の上に１個の透孔を設けるものとするには及ばない。他のものについても横線文や透孔がないものが含まれると思われるが、摩滅や欠損のため明確でない。

711～722は須恵器である。711・712は蓋で天井部と口縁部の境に稜をもつ。713～717は杯で、713～715は受部をもつ。713・714が高い口縁部で端部に段や面を有するのに対し715は低く内頃するものである。716は蓋の可能性もあるが、ここでは杯としておく。718は壺で、頸部に沈線を巡らす長頸壺である。719・720は瓦で体部にカキメを施すが、底部外面については719がロクロケズリの後ナデにより雑に調整し、720はロクロケズリの外縁に雑なヘラケズリを施す。719の底部外面にはヘラ記号が施される。

723～727は土製品である。723～725は鞴の羽口で、723の吹口はラッパ状に開く。723・725の炉側は灰白色に変色し、724には溶解物が付着する。付近からは



第35図　包含層他出土遺物実測図　（1：4）

少量ながらも鉄滓の出土もあり、なかには接合の結果、坩堝の底部に溜まったものであるかの形態を呈するもの（写真図版25）もある。726・727は土錘で、両者とも球形を呈する。727は粘土接合痕が明瞭で、芯に粘土紐を巻き付けて形成していることが分かる。これらの土製品の時期については不明であるが、鞴の羽口についてはＳＫ９以外からの出土がなく、古墳時代中頃の遺物の出土も同様であるため、それに伴う可能性が高い。

728～731は石製品である。729は石斧、731は石包丁と思われるが小片のため明確ではない。728・730は砥石で、729も砥石に転用した可能性がある。729の表面には鱗状の加工痕が残る。

732は鉄製品で、刀子の刀身から茎の一部と思われる。

7　包含層他出土遺物（第35図）

733～739は弥生土器で、733～737は壺、738は甕、739は高杯である。後期から終末期が中心であるが、735・736は中期に遡り得るもので、738は今回の調査で出土した弥生土器のなかで最も古く、前期に属するものである。小片のため不明な部分も多いが、一応、甕とした。鉢あるいは壺の可能性もあり、ヘラによる沈線を２条巡らす。壺・高杯は加飾され、櫛による横線文や刺突文等が施されている。733の口縁部の刻目はヘラによるものと思われるが摩滅が激しく櫛の可能性も残る。736の波状文は、施文工具の先端が完全な櫛状でないためか、波状の板状工具痕にちかい状態で、完全に一周巡らず途絶え気味である。横線についても二股状工具としたが、波状文と同じ工具によるため横線の刻みが不十分の結果であるかもしれない。735の刻目も櫛ではなく、板状工具による。一方、737の波状文は二股状工具による鋭利なものである。739は４本１組の横線文を３段に施すが、最下段は６本となっている。別工具によるものか、あるいは２本１組の原体によるものかもしれない。横線文間には二枚貝腹縁による弧状刺突文が施される。

740は土師器の台付甕、741～743は山茶椀、744・745は鉄製品である。山茶椀はいずれも底部片のため器形全体は不明であるが、比較的低い高台に加え体部には丸味が残り、尾張型山茶椀の第５型式後半から第６型式前半に並行するものと考えられ13世紀前半のもの[17]となる。内面は平滑で、転用硯の可能性も考えられるが、743は平滑性がやや弱く、通常の使用痕とした方が良いかもしれない。

鉄製品の744は鎌、745は腐食が激しいが和釘である。弯曲しており、使用後に引き抜かれたものであろう。両者とも表土が埋土の柱穴状遺構から出土しており、時期決定の要素に欠ける。前述した山茶椀と並行する13世紀前半から近世までのいずれかとせざるを得ない。

〔註〕

① 上村安生「伊勢･伊賀地域」『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社　2002年6月25日

②・赤塚次郎「「Ｓ字甕」について」『欠山式土器とその前後』愛知考古学談話会　1986年11月1日

・原田幹「Ｓ字甕の波及と定着をめぐる問題」『Ｓ字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会資料

③ 三重県埋蔵文化財センター『嶋抜Ⅲ』2001年3月

④ 愛知考古学談話会『欠山式土器とその前後』1986年11月1日

⑤ 三重県教育委員会「伊勢市上地町・中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』1973.3

⑥ 豊田市教育委員会『高橋遺跡』1969.3

⑦ 四日市市教育委員会『永井遺跡発掘調査報告』1973年3月30日

⑧ 愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990

⑨ 亀山市教育委員会『地蔵層遺跡発掘調査報告』1978

⑩ 三重県埋蔵文化財センター『山城遺跡・北瀬古遺跡』1994.3

⑪ 三重県埋蔵文化財センター『波瀬Ｂ遺跡発掘調査報告』1992年3月

⑫ 鈴木克彦「伊勢湾岸地方における凸帯文深鉢の様相」『三重県史研究第6号』三重県　平成2年3月31日

⑬ 三重県教育委員会『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1985.3

⑭ 中野晴久「赤羽・中野「生産地における編年について」」『中世常滑焼をおって』日本福祉大学知多半島総合研究所

⑮ 前掲⑨に同じ

⑯ 前掲⑩に同じ

⑰ 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第３号』三重県埋蔵文化財センター　平成６年３月

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
					口径	器高	その他					
1	192-3	D-17	SD12下層	弥生土器壺	30.6	—	—	ナデ	外：橙(2.5YR6/6) 内：にぶい橙（7.5YR7/4）	4mm以下の砂粒多含	口縁部1/12残	口縁部内面に刺突列点文。
2	190-7	C-13	SD12下層	弥生土器壺	20.0	—	—	—	にぶい黄橙（10YR7/3）	4mmの砂粒多含	口縁部2/12残	頸部に横線文。
3	189-5	C-11	SD12下層	弥生土器壺	13.2	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白（10YR8/2）	2mmの砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。
4	125-4	C-12	SD12下層	弥生土器壺	14.6	—	—	外面ハケメ	灰黄褐（10YR6/2）	2mmの砂粒多含	脚部2/12残	口縁部外面に沈線2条。摩滅のため内面調整不明。
5	192-1	D-17	SD12下層	弥生土器壺	12.0	—	—	—	外：橙(7.5YR6/6) 内：灰白（2.5Y8/2）	1mm以下の砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に（刻目＋円形浮文）。摩滅のため文様・調整不明確。
6	193-1	C-10	SD12下層	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：浅黄（2.5Y7/3）	0.5mmの砂粒含	体部上半4/12残	体部に刻目2段以上。摩滅のため調整不明確。
7	158-1	C-12	SD12下層	土師器壺	—	—	—	外面ハケメ、内面未調整	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：黄灰（2.5Y6/1）	1mmの砂粒多含	体部2/12残	体部に波状文。
8	193-7	C-10	SD12下層	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	灰白(2.5Y8/2)	2mmの砂粒含	体部小片	体部に円形浮文3個1組。摩滅のため調整不明確。
9	190-6	C-11	SD12下層	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/2） 内：灰白（2.5Y8/1）	3mmの砂粒含	体部小片	体部に横線文2段以上＋刺突列点文。
10	189-2	C-13	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径7.0	外面ハケメ、内面ナデ	外：淡橙(5YR8/4) 内：灰白（5Y7/1）	3mmの砂粒含	底部2/12残	摩滅のため調整不明確。
11	191-3	D-17	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径5.0	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）～黒（10YR2/1）	2.5mm以下の砂粒多含	底部3/12残	剥離・摩滅のため調整不明確。
12	193-2	C-10	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径7.2	外面ヘラケズリ、内面ナデ	外：黄灰(2.5Y6/1) 内：暗灰（N3/）	1mmの砂粒含	底部4/12残	剥離・摩滅のため調整不明確。
13	189-1	C-12	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径6.0	ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：褐灰（10YR5/1）	4mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
14	195-4	C-10	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径6.0	内面未調整	外：にぶい黄橙(10YR6/3) 内：灰黄（2.5Y6/2）	3mmの砂粒多含	底部7/12残	摩滅のため調整不明確。
15	191-1	C-14	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径6.8	内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：褐灰（10YR4/1）	5mm以下の小石多含	底部3/12残	摩滅のため調整不明確。
16	189-3	C-13	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径4.7	—	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：橙（5YR6/6）	2mmの砂粒含	底部5/12残	摩滅のため調整不明。
17	194-6	C-10	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径6.2	—	にぶい黄橙(10YR7/4)	3mmの砂粒多含	底部9/12残	摩滅のため調整不明。
18	193-5	C-10	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径8.0	—	外：灰褐(5YR5/2) 内：灰（5Y4/1）	5mmの砂粒多含	底部3/12残	摩滅のため調整不明。
19	193-6	C-10	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径6.3	工具ナデ	外：にぶい褐(7.5YR5/3) 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	5mmの小石多含	底部3/12残	摩滅のため調整不明確。
20	194-1	C-10	SD12下層	弥生土器壺	—	—	底径6.4	—	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	2mmの砂粒多含	底部3/12残	摩滅のため調整不明。
21	191-2	C-14	SD12下層	弥生土器甕	12.6	—	—	外面ハケメ	灰白（10YR8/2）	2mm以下の砂粒含	口縁部1/12残	口縁端部外面に刻目。剥離・摩滅のため調整不明確。
22	190-4	C-13	SD12下層	弥生土器甕	—	—	—	外面ナデ、内面ハケメ	にぶい黄橙（10YR7/2）	2mmの砂粒含	口縁部小片	
23	190-5	C-11	SD12下層	弥生土器甕	20.8	—	—	ハケメ	外：にぶい黄橙（10YR7/2） 内：灰白（10YR8/2）	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	摩滅のため文様・調整不明確。
24	194-2	C-10	SD12下層	弥生土器甕	—	—	—	ヨコナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	1mmの砂粒若干含	口縁部小片	摩滅のため調整不明確。
25	190-2	C-13	SD12下層	弥生土器甕	19.0	—	—	ナデ	外：にぶい橙（7.5YR7/3） 内：橙（7.5YR7/6）	3mmの砂粒含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。外面に炭化物付着。摩滅のため調整不明確。
26	190-1	C-13	SD12下層	弥生土器甕	16.0	—	—	ナデ	外：褐灰（7.5YR4/1） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	3mmの砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため調整不明確。
27	195-1	C-10	SD12下層	弥生土器甕	14.7	—	—	頸部内面ハケメ	外：褐灰(7.5YR5/1) 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため調整不明確。
28	194-5	C-10	SD12下層	弥生土器甕	16.2	—	—	—	灰白(7.5YR8/2)	2mmの砂粒多含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため文様・調整不明確。
29	192-2	D-17	SD12下層	弥生土器甕	17.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	1mm以下の砂粒・雲母多含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文、体部に横線文。
30	195-3	C-10	SD12下層	弥生土器甕	16.5	—	—	—	褐灰(7.5YR4/1)	微砂粒・雲母含	口縁部1/12残	摩滅のため文様・調整不明。
31	195-2	C-10	SD12下層	弥生土器鉢	24.2	—	—	ヨコナデ	外：橙(2.5YR6/6) 内：橙（7.5YR7/6）	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	
32	190-3	C-11	SD12下層	弥生土器鉢	11.1	—	—	ナデ	にぶい橙（7.5YR7/3）	微砂粒含	口縁部1/12残	
33	193-3	C-10	SD12下層	弥生土器高杯	—	—	筒部径3.4	外面ヘラミガキ	にぶい橙(5YR7/4)	0.5mmの砂粒含	脚柱部6/12残	脚柱部に横線文。摩滅のため調整不明確。
34	191-4	D-17	SD12下層	弥生土器高杯	—	—	脚基部4.0	外面ヘラミガキ、内面ナデ	灰白（10YR8/2）	微砂粒・赤色斑粒含	脚基部6/12残	筒部に横線文3段。
35	194-4	C-10	SD12下層	弥生土器高杯	19.3	—	—	ヘラミガキ	外：褐灰(7.5YR5/1) 内：にぶい橙（7.5YR7/3）	0.5mmの砂粒・雲母多含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
36	189-4	C-13	SD12下層	弥生土器高杯	—	—	脚基部4.2	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：灰白（10YR8/2）	2mmの砂粒含	脚部5/12残	
37	194-3	C-10	SD12下層	弥生土器高杯	—	—	脚基部4.2	外面ヘラミガキ、内面未調整	浅黄橙（7.5YR8/3）	1mmの砂粒・雲母若干含	脚基部完存	透孔3方。剥離・摩滅のため文様・調整不明確。
38	193-4	C-10	SD12下層	弥生土器高杯	—	—	脚基部5.0	—	にぶい黄橙(10YR7/3)	1mmの砂粒含	脚基部完存	摩滅のため調整不明。
39	192-4	D-17	SD12下層	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.2	—	橙(7.5YR6/6)	3mm以下の砂粒含	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明。
40	6-2	C-11	SD12下層	石製品石斧	—	—	残存重7.6g	—	明青灰(5B7/1)	ハイアロクラスタイト	小片	扁平片刃
41	126-5	C-13	SD12	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰（10YR4/1）	1mmの砂粒多含	頸部2/12残	頸部に横線文。文様・摩滅のため調整不明。
42	123-2	C-10	SD12	土師器壺	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	橙(5YR6/6)	0.5mmの砂粒若干含	口縁部小片	頸部に（突帯＋刻目）。
43	127-3	C-13	SD12	弥生土器壺	35.0	—	—	—	灰黄褐（10YR5/2）	3mmの砂粒多含	口縁部1/12残	口縁部内面に扇形文、刺突列点文。摩滅のため文様・調整不明確。
44	175-5	C-11	SD12	弥生土器壺	15.1	—	—	外面ハケメ	外：橙(2.5YR7/6) 内：浅黄橙（7.5YR8/4）	2mmの砂粒含	口縁部9/12残	口縁端部外面に山形刻目、頸部に突帯。外面赤彩。摩滅のため調整不明確。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
45	100-4	C-12	SD12	弥生土器壺	16.6	—	—	ハケメ	褐灰(10YR5/1)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/12残	口縁端部外面に刻目、口縁端部内面に竹管文。
46	126-4	C-13	SD12	弥生土器壺	16.0	—	—	ヨコナデ	灰白（10YR8/2）	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	
47	100-1	C-12	SD12	弥生土器壺	17.2	—	—	外面ハケメ、内面ヘラミガキ	灰白(2.5Y8/2)	精良	口縁部3/12残	口縁端部外面に刻目。
48	102-2	C-12	SD12	弥生土器壺	15.2	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	黄灰（2.5Y5/1）	1mmの砂粒若干含	口縁部2/12残	口縁部外面に刻目。
49	127-1	C-13	SD12	弥生土器壺	16.0	—	—	外面ハケメ、内面ヘラミガキ	灰黄褐（10YR5/2）	2mmの砂粒含	頸部3/12残	口縁端部外面に刻目、内面に竹管文。
50	66-2	D-17	SD12	弥生土器壺	14.0	—	—	ハケメ	外：橙(5YR7/6) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	1mmの砂粒含	口縁部2/12残	口縁部内面に二又状工具による掻揚げ痕。
51	66-3	C-14	SD12	弥生土器壺	14.6	—	—	ハケメ	にぶい橙(5YR7/4)	3mmの砂粒若干含	口縁部3/12残	口縁部内面に鋭利な工具による掻揚げ痕。
52	122-3	C-10	SD12	弥生土器壺	14.6	—	—	ハケメ	にぶい橙(5YR6/4)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。頸部に（突帯＋刻目）。
53	100-2	C-12	SD12	弥生土器壺	12.1	—	—	ヨコナデ	外：橙(7.5YR7/6) 内：浅黄橙（7.5YR8/4）	4mmの小石若干含	口縁部2/12残	高温で焼成。
54	77-2	D-16	SD12	弥生土器壺	20.0	—	—	—	橙(7.5YR7/6)	2mmの砂粒若干含	口縁部2/12残	口縁端部内外面に刺突列点による羽状刻目。
55	104-1	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部12.2	—	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰白（2.5Y8/2）	微砂粒含	頸部3/12残	体部上端に刺突文＋横線文。摩滅のため調整不明。
56	84-1	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部径8.9	内面未調整	外：灰白(10YR8/2) 内：にぶい黄橙(10YR7/2)	微砂粒若干含	頸部3/12残	頸部に（突帯＋刻目）、体部に刺突文2段＋波状文2段。文様のため外面調整不明。
57	67-1	C-9	SD12	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	褐灰(7.5YR4/1)	1mmの砂粒含	体部小片	体部に波状文＋横線文。
58	106-2	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	—	—	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：灰白（2.5Y8/2）	1.5mmの砂粒・雲母含	体部上端3/12残	体部に横線文2段＋波状文。摩滅のため調整不明。
59	71-1	D-17	SD12	弥生土器壺	—	—	—	外面ハケメ、内面未調整	外：橙(7.5YR6/6) 内：褐灰(10YR4/1)	微砂粒・雲母片含	体部1/12残	体部に横線文＋連弧文。摩滅のため調整不明確。
60	81-2	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部径12.9	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	褐灰(10YR5/1)	3mmの小石多含	頸部1/12残	体部外面に横線文。摩滅のため内面調整不明。
61	90-3	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	0.5mmの砂粒若干含	体部上半4/12残	体部上半に横線文＋波状文。
62	70-1	C-9	SD12	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ？、内面ハケメ	外：灰褐(7.5YR4/2) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	1mmの砂粒若干含	体部1/12残	体部外面に横線文＋刺突列点文。体部外面に炭化物付着。
63	81-5	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	—	内面ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	精良	体部小片	体部に横線文+羽状刻目。文様・摩滅のため調整不明確。
64	105-7	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	—	内面ナデ	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：灰黄褐（10YR5/2）	微砂粒・雲母含	体部小片	体部に横線文＋波状文＋刺突文。文様のため外面調整不明。
65	104-5	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	—	—	外：橙(5YR6/6) 内：にぶい橙（7.5YR6/4）	精良	体部小片	体部外面に横線文＋羽状刻目。文様・摩滅のため調整不明。
66	133-3	C-13	SD12	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ	浅黄橙(10YR8/3)	微砂粒・雲母含	体部上半2/12残	体部に横線文＋刻目。剥離・摩滅のため調整不明確。
67	99-4	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.3	外面ナデ、内面ハケメ	淡黄(2.5Y8/3)	1mmの砂粒・雲母多含	底部ほぼ完存	摩滅のため調整不明確。
68	187-2	C-13	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.9	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：にぶい褐(7.5YR5/4) 内：橙（7.5YR6/6）	1.5mmの砂粒・雲母多含	底部完存	
69	101-3	C-12	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.9	外面ナデ、内面ハケメ	灰白(2.5Y8/2)	1mmの砂粒・雲母多含	底部完存	
70	99-2	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径7.0	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙（7.5YR8/4）	1.5mmの砂粒・雲母含	底部9/12残	摩滅のため調整不明確。
71	109-1	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.8	外面ヘラミガキ	灰（N4/）	3mmの砂粒含	底部11/12残	摩滅のため調整不明確。
72	85-5	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.7	ハケメ	黒褐(2.5Y3/1)	2mmの砂粒若干含	底部完存	
73	89-1	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.8	ヘラミガキ	灰黄(2.5Y6/2)	精良	底部完存	
74	107-6	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径5.6	外面一部ハケメ、他はナデ	外：橙(7.5YR6/6) 内：黄灰（2.5Y5/1）	2mm以下の砂粒若干含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
75	105-1	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径5.0	ハケメ	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：灰（N4/）	微砂粒・雲母含	底部4/12残	
76	105-2	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.3	ハケメ	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：灰黄（2.5Y6/2）	2mmの砂粒・雲母含	底部完存	
77	99-1	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径7.0	外面ハケメ、内面ナデ	暗灰(N3/)	4mmの砂粒多含	底部9/12残	剥離のため調整不明確。
78	96-5	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.5	—	外：にぶい橙(5YR7/4) 内：黄灰（2.5Y5/1）	精良	底部完存	内面に炭化物付着。摩滅のため調整不明確。
79	103-4	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.6	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：灰（5Y6/1）	2mmの砂粒含	底部7/12残	摩滅のため内面調整不明確。
80	110-3	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.8	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：灰（N5/）	1mmの砂粒含	底部完存	
81	109-2	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.3	ハケメ	灰白（10YR8/2）	1mmの砂粒若干含	底部完存	
82	65-2	D-8	SD12	弥生土器壺	—	—	底径5.4	ハケメ	外：褐灰(7.5YR4/1) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	5mmの小石含	底部完存	
83	72-1	D-17	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.6	ハケメ	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：黒(N2/)	微砂粒・雲母片含	底部完存	摩滅のため外面調整不明確。
84	125-1	C-13	SD12	弥生土器壺	—	—	底径5.4	外面ヘラミガキ	浅黄橙（10YR8/3）	3mmの砂粒含	底部完存	剥離・摩滅のため内面調整不明確。
85	109-3	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.5	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	にぶい橙（5YR7/4）	1mmの砂粒多含	底部完存	
86	78-1	D-17	SD12	弥生土器壺	13.0	—	—	外面ハケメ、内面未調整	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄(2.5Y7/3)	1mmの砂粒若干含	口縁部7/12残	口縁端部外面に棒状浮文1組3本で4方。頸部に突帯、摩滅のため刻目不明確。
87	137-1	C-10	SD12 №36	弥生土器壺	—	—	頸部径10.6	—	灰白(10YR8/2)～灰(5Y6/1)	4mmの砂粒含	頸部完存	口縁部外面に3本1組棒状浮文6方、体部に2個1組円形浮文6方、頸部に（突帯＋刻目）。
88	104-3	C-11	SD12	弥生土器壺	16.2	—	—	口縁部内面ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	微砂粒含	口縁部3/12残	口縁部外面に棒状浮文3本1組4方。剥離により外面調整不明。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
89	186-1	C-11	SD12	弥生土器壺	17.3	35.2	底径7.9	外面ヘラミガキ、内面未調整	明赤褐(5YR5/6)	3mmの砂粒若干含	口縁部・底部完存	口縁部外面に（刺突列点文＋棒状浮4方）、体部に横線文5段＋（刺突列点文＋円形浮文4方）。体部～口縁部内面に赤彩。剥離・摩滅のため文様・調整不明確。
90	93-3	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	—	—	外：橙(5YR6/6) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	微砂粒含	体部小片	体部外面に2個対の円形浮文＋刺突文。摩滅のため内面調整不明。
91	99-5	C-11	SD12	弥生土器壺	13.5	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白(2.5Y8/2)	2.5mmの砂粒多含	口縁部ほぼ完存	摩滅のため調整不明確。
92	131-5	C-12	SD12	弥生土器壺	13.7	—	—	内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒含	口縁部1/12残、頸部3/12残	摩滅のため調整不明確。
93	77-3	D-16	SD12	弥生土器壺	10.6	—	—	ヨコナデ	灰白(10YR8/2)～橙(5YR7/6)	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面にヘラミガキ痕が残る。
94	103-2	C-11	SD12	弥生土器壺	15.0	—	—	—	浅黄橙（10YR8/3)	微砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明。
95	173-1	C-11	SD12 №19	弥生土器壺	15.1	—	—	—	橙（5YR7/6)	精良	口縁部4/12残。	剥離･摩滅のため調整不明。
96	84-4	B-10	SD12	弥生土器壺	15.0	—	—	ハケメ	外：橙(5YR7/6) 内：黄灰(2.5Y5/1)	微砂粒含	口縁部1/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
97	133-1	C-13	SD12	弥生土器壺	17.4	—	—	内面ハケメ	灰白(5Y7/1)	2mmの砂粒・雲母多含	口縁部3/12残	口縁端部外面に刻目、体部上端に横線文。施文のため外面調整不明。
98	68-5	C-9	SD12	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ？、内面ナデ	外：灰白(10YR8/2) 内：灰白(2.5Y8/1)	雲母微粒子含	体部小片	体部外面に沈線2条。
99	173-2	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径9.3	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：灰白(2.5Y8/2) 内：灰白（5Y7/1)	精良	底部完存	摩滅のため調整不明確。
100	177-1	C-12	SD12	弥生土器壺	—	—	底径7.6	ハケメ	にぶい黄橙（10YR7/3)	10mm以下の小石多含	底部10/12残	摩滅のため調整不明確。
101	172-1	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：灰(N5/)	0.5mmの砂粒含	体部4/12残。	
102	166-1	C-12	SD12	弥生土器壺	—	—	底径5.7	体部内面上半工具ナデ、他はハケメ	橙(5YR6/6)	4mmの小石若干含	底部完存、体部9/12残	摩滅のため調整不明確。
103	69-4	C-9	SD12	弥生土器壺	13.0	—	—	外面ハケメ、内面未調整	灰白(10YR8/2)	2mmの砂粒若干含	口縁部1/12残	頸部に横線文。
104	100-5	C-12	SD12	弥生土器壺	16.2	—	—	—	浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	剥離のため調整不明。
105	103-3	C-11	SD12	弥生土器壺	14.0	—	—	外面ハケメ	外：橙(7.5YR7/6) 内：浅黄橙（10YR8/4)	2mmの砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため内面調整不明確。
106	97-3	C-11	SD12	弥生土器壺	10.2	—	—	—	浅黄橙（7.5YR8/3)	4mmの小石・雲母含	口縁部1/12残	剥離・摩滅のため調整不明。
107	87-1	C-11	SD12	弥生土器壺	14.0	—	—	ハケメ	外：橙(7.5YR7/6) 内：橙(7.5YR6/6)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部3/12残	摩滅のため調整不明確。
108	74-2	B-10	SD12	弥生土器壺	13.0	—	—	—	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：浅黄橙(10YR8/3)	2.5mmの砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に赤彩。摩滅のため調整不明。
109	103-5	C-11	SD12	弥生土器壺	13.4	—	—	—	外：橙(7.5YR7/6) 内：浅黄橙（10YR8/4)	2mmの砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため内面調整不明。
110	91-1	B-11	SD12	弥生土器壺	10.4	—	—	外面ハケメ、内面未調整	にぶい橙(5YR7/4)	1mmの砂粒若干含	口縁部3/12残	体部上端に横線文。剥離・摩滅のため文様・調整不明確。
111	103-6	C-11	SD12	弥生土器壺	14.0	—	—	外面ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙（10YR8/3)	微砂粒・雲母含	口縁部1/12残	口縁端部外面に刻目、口縁部外面に沈線。摩滅のため内面調整不明。
112	96-2	B-11	SD12	弥生土器壺	12.6	—	—	ヨコナデ	にぶい橙(5YR7/4)	精良	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。
113	71-3	D-17	SD12	弥生土器壺	10.2	—	—	ナデ	橙(2.5YR6/6)	2mm以下の砂粒含	口縁部4/12残	頸部に刺突文。摩滅のため調整不明確。
114	119-5	C-10	SD12	弥生土器壺	13.3	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：橙(7.5YR7/6) 内：浅黄橙（10YR8/4)	微砂粒・雲母若干含	口縁部9/12残	摩滅のため内面調整不明確。
115	79-5	B-10	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部径8.5	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの砂粒多含	頸部3/12残	頸部に雑な突帯。
116	81-4	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部径10.6	口縁部内外面ヘラミガキ、体部外面ハケメ	橙(5YR7/6)	精良	頸部2/12残	摩滅のため調整不明確。
117	90-2	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部径10.2	ハケメ	橙(5YR6/6)	0.5mmの砂粒・雲母若干含	頸部3/12残	
118	86-1	C-10	SD12 №35	弥生土器壺	15.0	—	底径4.3	外面ヘラミガキ、内面未調整	灰黄(2.5Y7/2)	精良	口縁部1/12残、底部完存	摩滅のため調整不明確。
119	121-4	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部径8.2	内面工具ナデ	灰白(10YR8/2)	1mmの砂粒含	頸部3/12残	摩滅のため調整不明確。
120	78-3	D-8	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.2	—	灰白(10YR8/2)	2mm以下の砂粒含	底部完存、体部小片	摩滅のため調整不明。
121	179-1	C-12	SD12	弥生土器壺	15.2	—	—	外面ヘラミガキ、内面工具ナデ	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：灰黄（2.5Y7/2)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部7/12残、体部上半完存	体部に横線文3段＋羽状刻目＋波状文。
122	128-1	C-13	SD12 №24	弥生土器壺	16.9	—	—	外面ハケメ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：黄灰（2.5Y6/1)	5mmの小石多含	口縁部8/12残、頸部完存	摩滅のため内面調整不明確。
123	154-1	B-11	SD12	弥生土器壺	13.6	30.8	底径6.3	外面ヘラミガキ、内面工具ナデ	灰白(10YR8/2)	精良	口縁部1/12残、底部完存	口縁端部に刻目。
124	184-1	C-11	SD12 №32	弥生土器壺	14.0	26.6	底径5.2	内面ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：褐灰（10YR4/1)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/12残、頸部・底部完存	摩滅のため外面調整不明。
125	120-1	C-10	SD12	弥生土器壺	16.8	31.6	底径8.4	外面ヘラミガキ、内面未調整	灰白(7.5YR8/1)	2mmの砂粒若干含	口縁部8/12残、体部6/12残	口縁端部外面に刻目、頸部に羽状刻目。
126	122-1	C-10	SD12 №25	弥生土器壺	16.0	—	—	外面ヘラケズリ、内面工具ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰黄（2.5Y7/2)	1mmの砂粒・雲母多含	口縁部1/12残	口縁端部外面に沈線。
127	142-1	C-11	SD12	弥生土器壺	11.0	—	—	外面ハケメ、内面下半工具ナデ	橙(7.5YR7/6)～浅黄橙(10YR8/3)	3mmの砂粒含	口縁部ほぼ完存	口縁端部に刻目。
128	161-1	C-12	SD12	弥生土器壺	13.8	—	—	体部外面下半ヘラミガキ、他はハケメ	灰白(2.5Y8/2)	0.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残、頸部完存	
129	167-1	C-13	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部径9.4	外面ハケメ、内面一部ハケメ	灰黄(2.5Y7/2)	3mmの砂粒含	頸部11/12残、体部上半完存	摩滅のため調整不明確。
130	144-1	C-11	SD12 №19	弥生土器壺	—	—	底径6.4	外面ヘラミガキ、内面工具ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒多含	口縁部欠損	摩滅のため調整不明確。
131	104-4	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径5.0	ハケメ	外：灰(5Y5/1) 内：黄灰（2.5Y5/1)	2mmの砂粒含	底部5/12残、体部3/12残	
132	79-2	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部径8.0	—	外：橙(5YR6/6) 内：灰(5Y4/1)	2mmの砂粒含	頸部8/12残	頸部に沈線。摩滅のため調整不明。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
133	79-4	B-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径3.0	ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)	2mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
134	170-5	C-13	SD12	弥生土器壺	—	—	底径3.8	ヘラミガキ	外：橙(5YR7/6) 内：橙（5YR6/6)	4mm以下の砂粒・雲母含	底部ほぼ完存	
135	132-2	C-12	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.0	ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：暗灰（N3/)	微砂粒含	底部3/12残	
136	131-3	C-9	SD12 №7	弥生土器壺	—	—	底径5.8	—	にぶい黄橙(10YR7/3)	4mmの砂流多含	底部完存	剥離・摩滅のため調整不明。
137	144-2	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.1	外面ヘラミガキ、内面工具ナデ	橙(7.5YR7/6)	2mmの砂粒多含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
138	79-1	B-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径8.5	—	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：橙(5YR6/6)	5mmの砂粒含	底部6/12残	摩滅のため調整不明。
139	92-5	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径8.0	外面ヘラケズリ	灰黄(2.5Y7/2)	3mmの砂粒含	底部4/12残	摩滅のため内面調整不明。
140	113-1	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径7.6	—	外：橙(2.5YR6/8) 内：にぶい橙（7.5YR5/4)	3mmの砂粒・雲母多含	底部完存	内面に工具痕。
141	79-3	B-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.8	—	外：橙(5YR7/8) 内：黄灰(2.5Y5/1)	4mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明。
142	89-2	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.0	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：灰(5Y5/1)	2mmの砂粒含	底部6/12残	摩滅のため調整不明確。
143	124-3	C-12	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.3	—	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：橙（2.5YR6/8)	3mmの砂粒含	底部10/12残	
144	100-6	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径6.4	外面ハケメ、一部ヘラミガキ、内面ナデ	灰白(2.5Y8/1)	2mmの砂粒多含	底部4/12残	
145	174-4	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径3.8	ナデ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：橙（5YR6/6)	精良	底部4/12残	
146	117-1	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.9	未調整	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：にぶい黄橙（10YR7/3)	3mmの砂粒含	底部完存	
147	79-6	B-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径3.7	ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：橙(7.5YR6/6)	3mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
148	68-3	C-9	SD12	弥生土器壺	8.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：褐灰(10YR5/1) 内：黄灰(2.5Y6/1)	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12残	
149	92-1	C-11	SD12	弥生土器壺	22.0	—	—	ナデ	灰白(10YR8/2)	2mmの砂粒含	口縁部3/12残	
150	187-4	C-12	SD12	弥生土器壺	9.0	—	—	ナデ	灰白(2.5Y8/2)	0.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
151	148-3	C-10	SD12	弥生土器壺	12.7	—	—	外面ハケメ	外：橙(5YR7/6) 内：にぶい黄橙（10YR7/4)	1.5mmの砂粒・雲母含	口縁部ほぼ完存	摩滅のため調整不明確。
152	139-1	B･C-11	SD12	弥生土器壺	11.3	27.8	底径5.8	外面ハケメ、内面未調整	外：橙(2.5YR7/8) 内：暗灰（N3/)	2mmの砂粒・雲母含	体部3/12欠損	
153	94-2	C-11	SD12	弥生土器壺	12.6	—	—	ナデ	外：橙(5YR7/6) 内：浅黄橙(10YR8/4)	精良	口縁部2/12残	
154	112-2	C-10	SD12	弥生土器壺	12.4	—	—	外面ヘラミガキ、内面未調整	橙(5YR7/6)	3mmの小石若干含	口縁部1/12残、体部6/12残	
155	85-6	C-10	SD12 №46	弥生土器壺	—	—	底径4.8	外面ヘラミガキ	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：黄灰(2.5Y6/1)	0.5mmの砂粒若干含	底部完存	摩滅のため内面調整不明確。
156	81-3	C-10	SD12 №39	弥生土器壺	11.9	18.0	底径4.8	ハケメ	橙(5YR7/6)	7mmの小石含	口縁部3/12残、体部6/12残	摩滅のため調整不明確。
157	181-3	C-12	SD12	弥生土器壺	—	—	頸部8.7	工具ナデ、一部ハケメ	浅黄橙（10YR8/3)	精良	頸部ほぼ完存	剥離・摩滅のため調整不明確。
158	159-1	C-12	SD12	弥生土器壺	10.2	—	底径5.0	外面ヘラミガキ	浅黄橙(10YR8/3)	6mm以下の砂粒多含	口縁部5/12残、底部完存	摩滅のため調整不明確。
159	153-2	D-17	SD12	弥生土器壺	12.6	—	—	—	灰白(10YR8/2)	1mmの砂粒含	口縁部4/12残、頸部ほぼ完存	頸部に横線文。
160	92-4	C-11	SD12	弥生土器壺	5.6	—	—	—	橙(5YR7/6)	2mmの砂粒若干含	口縁部3/12残	摩滅のため調整不明。
161	119-4	C-10	SD12	弥生土器壺	8.0	—	—	ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)	微砂粒・雲母含	口縁部6/12残	
162	96-3	B-11	SD12	弥生土器壺	8.0	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	1mmの砂粒多含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。
163	142-3	B-11	SD12	弥生土器壺	8.0	—	—	ヘラミガキ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：橙（7.5YR6/6)	精良	口縁部ほぼ完存	頸部に連弧文2段。
164	181-1	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.1	外面ヘラミガキ、内面工具ナデ	にぶい橙（7.5YR6/4)	雲母若干含	体部完存	体部に連弧文2段。摩滅のため調整不明確。
165	169-3	C-11	SD12	弥生土器壺	—	—	底部4.3	外面ヘラミガキ	浅黄橙(10YR8/3)	1mm以下の砂粒若干含	体部ほぼ完存	体部に連弧文2段。摩滅のため調整不明確。
166	188-3	C-10	SD12 №42	弥生土器壺	13.0	19.1	底径4.8	体部内面未調整、一部ハケメ、他はヘラミガキ	外：橙(5YR6/6) 内：褐灰（10YR5/1)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/12残、底部完存	
167	133-4	C-13	SD12	弥生土器壺	—	—	—	内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	1mmの砂粒含	体部上半2/12残	体部に横線文2段以上＋刺突連弧文2段以上。
168	119-2	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径3.0	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：黄灰（2.5Y5/1)	2mmの砂粒含	底部4/12残	
169	121-2	C-10	SD12 №25	弥生土器壺	13.1	—	—	ヘラミガキ	橙(5YR7/6)	2mmの砂粒若干含	口縁部2/12残	
170	88-4	C-10	SD12	弥生土器壺	11.7	—	—	ヘラミガキ	外：明褐(7.5YR5/6) 内：浅黄(2.5Y7/3)	2mmの砂粒・雲母含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。
171	148-1	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.8	内面ハケメ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：浅黄橙（10YR8/4)	1mmの砂粒若干含	底部ほぼ完存	摩滅のため調整不明確。
172	72-4	D-17	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.3	内面ナデとハケメ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：浅黄(2.5Y7/2)	2mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため外面調整不明確。
173	65-3	C-14	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.5	—	外：灰白(10YR8/2) 内：灰(5Y4/1)	2mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明。
174	88-5	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	体部径14.0	内面工具ナデ	外：橙(7.5YR7/6) 内：暗灰(N3/)	1.5mmの砂粒含	体部2/12残	摩滅のため調整不明確。
175	93-6	C-11	SD12	弥生土器壺	11.5	—	—	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒含	口縁部1/12残	
176	169-1	B-11	SD12	弥生土器壺	—	—	脚基部3.6	ヘラミガキ	外：橙(5YR6/6) 内：褐灰(10YR5/1)	精良	体部下半6/12残	摩滅のため調整不明確。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
177	102-3	C-12	SD12	弥生土器壺	—	—	脚基部3.6	外面ヘラミガキ	にぶい黄橙灰（10YR7/2）	2mmの砂粒多含	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
178	92-2	C-11	SD12	土師器壺	—	—	—	—	外：橙(7.5YR7/6) 内：黄灰(2.5Y5/1)	3mmの砂粒含	頸部6/12残	摩滅のため調整不明。
179	124-4	C-10	SD12 №43	弥生土器壺	—	—	底径4.5	外面ヘラミガキ、内面ハケメ・ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：浅黄橙（10YR8/3）	2mmの砂粒含	底部完存	剥離・摩滅のため調整不明確。
180	74-3	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径5.1	ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)	雲母片含	底部6/12残	
181	170-3	C-10	SD12	弥生土器壺	—	—	底径4.1	ハケメ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：灰（5Y4/1）	2mmの砂粒・雲母含	底部ほぼ完存	
182	126-3	C-13	SD12	弥生土器甕	17.2	—	—	外面ハケメ、内面未調整	灰黄（2.5Y7/2）	精良	口縁部1/12残	口縁端部外面に刻目。摩滅のため調整不明確。
183	70-3	C-9	SD12	弥生土器甕	18.6	—	—	外面ハケメ、内面一部ハケメ	外：淡橙(5YR8/4) 内：浅黄橙(10YR8/3)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/12残	口縁部外面に刻目。
184	81-1	C-10	SD12 №47	弥生土器甕	21.4	—	—	—	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	口縁端部外面に刻目。摩滅のため調整不明。
185	126-2	C-13	SD12	弥生土器甕	27.6	—	—	ヨコナデ	にぶい橙（7.5YR7/3）	2mmの砂粒多含	口縁部2/12残	口縁端部外面に刻目。
186	127-2	C-13	SD12	弥生土器甕	20.0	—	—	ハケメ	褐灰（10YR4/1）	雲母含	口縁部1/12残	ハケメは条痕状。
187	126-6	C-13	SD12	弥生土器甕	14.4	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	灰黄褐（10YR4/2）	4mmの砂粒含	頸部1/12残	口縁端部外面に弱い沈線。ハケメは条痕状。
188	107-5	C-11	SD12	弥生土器甕	27.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：灰白（2.5Y7/1）	2mm以下の砂粒多含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。
189	66-1	C-9	SD12	弥生土器甕	14.0	—	—	外面ヨコナデ、内面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)	1mmの砂粒多含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。
190	101-4	B-11	SD12	弥生土器甕	16.0	—	—	ヨコナデ	褐灰(10YR6/1)	1mmの砂粒多含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。外面に煤付着。
191	95-1	C-11	SD12	弥生土器甕	13.3	—	—	ハケメ	褐灰(10YR4/1)	1.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
192	174-3	B-11	SD12	弥生土器甕	—	—	底径4.5	外面ハケメ、内面ナデ	外：褐灰(10YR5/1) 内：灰（5Y4/1）	雲母若干含	底部ほぼ完存	
193	117-4	C-10	SD12	弥生土器甕	—	—	底径4.0	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：灰白（10YR8/2）	精良	底部完存	
194	118-4	C-10	SD12	弥生土器甕	17.0	—	—	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
195	118-1	C-10	SD12	弥生土器甕	12.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	
196	105-4	B-11	SD12	弥生土器甕	10.3	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：暗灰(N3/) 内：灰白（2.5Y8/2）	0.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
197	117-2	C-10	SD12	弥生土器甕	16.0	—	—	—	外：黄灰(2.5Y6/1) 内：灰黄（2.5Y7/2）	3mmの砂粒多含	口縁部1/12残	剥離・摩滅のため調整・器壁厚不明。
198	122-5	C-10	SD12	弥生土器甕	15.6	—	—	ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/3)	精良	口縁部2/12残	
199	85-4	C-10	SD12 №25	弥生土器甕	11.4	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	2mmの砂粒多含	口縁部3/12残	
200	77-6	D-8	SD12	弥生土器甕	11.8	—	—	内面ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	灰(N4/)	4mm以下の砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。
201	169-2	C-11	SD12	弥生土器甕	13.2	13.7	脚径5.2	外面ハケメ、内面工具ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	5mm以下の小石・雲母含	口縁部4/12残、脚部完存	
202	147-2	C-10	SD12	弥生土器甕	13.8	—	—	ハケメ	褐灰(10YR5/1)	雲母含	口縁部3/12残	
203	136-2	C-10	SD12	弥生土器甕	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：赤褐(5YR4/6) 内：橙（7.5YR6/6）	4mmの小石若干含	体部6/12残	摩滅のため調整不明確。
204	142-4	B-11	SD12 №22	弥生土器甕	12.0	—	—	外面ハケメ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ	にぶい黄橙(10YR7/3)	4mmの砂粒含	口縁部2/12残、体部9/12残	
205	175-1	B-11	SD12	弥生土器甕	—	—	底径3.8	外面タタキ、内面ナデ	外：灰褐(7.5YR5/2) 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	3mmの砂粒含	底部完存	
206	113-3	C-10	SD12	弥生土器甕	20.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	口縁部外面に刻目。
207	75-2	C-10	SD12 №33	弥生土器甕	22.0	—	—	ハケメ	外：淡黄(2.5Y7/3) 内：浅黄(2.5Y7/2)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部7/12残	口縁部外面に刺突列点文。
208	118-2	C-10	SD12	弥生土器甕	28.0	—	—	外面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため内面調整不明。
209	67-2	D-17	SD12	弥生土器甕	19.0	—	—	ハケメ	外：暗灰黄(2.5Y4/2) 内：灰黄(2.5Y7/2)	3mmの砂粒多含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
210	67-3	D-17	SD12	弥生土器甕	23.6	—	—	ハケメ	外：にぶい黄褐(10YR7/2) 内：黄灰(2.5Y6/1)	3mmの砂粒多含	口縁部3/12残	口縁部外面に刺突列点文。
211	71-2	D-17	SD12	弥生土器甕	20.0	—	—	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/3)	0.5mmの砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
212	109-5	C-10	SD12	弥生土器甕	17.2	—	—	ハケメ	灰黄（2.5Y7/2）	1mmの砂粒含	口縁部2/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
213	83-4	C-10	SD12 №45	弥生土器甕	17.0	—	—	—	外：黄灰(2.5Y5/1) 内：にぶい黄橙(10YR7/2)	3mmの砂粒含	口縁部2/12残	剥離・摩滅のため文様・調整・器壁厚不明。
214	89-4	B-11	SD12	弥生土器甕	22.4	—	—	外面ハケメ、内面未調整	黄灰(2.5Y6/1)	2mmの砂粒多含	口縁部2/12残	剥離・摩滅のため文様の有無不明。
215	94-7	C-11	SD12	弥生土器甕	16.7	—	—	外面ハケメ	浅黄橙(10YR8/4)	2mmの砂粒・雲母含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため内面調整不明。
216	163-1	B-11	SD12	弥生土器甕	17.7	—	—	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒含	口縁部4/12残、頸部完存	口縁部外面に刺突列点文。
217	74-5	C-9	SD12	弥生土器甕	18.6	—	—	ハケメ	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：灰黄(2.5Y7/2)	1.5mmの砂粒・雲母含	口縁部3/12残	口縁部外面に刺突列点文。
218	114-3	C-10	SD12 №40	弥生土器甕	16.4	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：灰黄褐(10YR6/2) 内：灰白（2.5Y8/2）	1mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突文。
219	108-5	B-11	SD12	弥生土器甕	14.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ、未調整	外：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	4mm以下の砂流多含	口縁部1/12残	
220	91-2	B-11	SD12	弥生土器甕	15.0	—	—	ハケメ	灰黄(2.5Y7/2)	0.5mmの砂粒・雲母若干含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
221	85-3	C-10	SD12 №25	弥生土器 甕	19.0	—	—	ハケメ	外：灰(N4/) 内：灰黄褐(10YR6/2)	1mmの砂粒含	口縁部2/12残	
222	170-7	C-12	SD12	弥生土器 甕	19.9	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白(2.5Y8/2)	1mmの砂粒・雲母若干含	口縁部2/12残。	口縁部に刺突列点文。剥離・摩滅のため調整不明確。
223	119-1	C-10	SD12	弥生土器 甕	13.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：暗灰黄(2.5Y5/2) 内：黄灰（2.5Y4/1)	0.5mmの砂粒・雲母多含	口縁部1/12残、頸部3/12残	口縁部外面に刺突列点文。
224	69-3	C-9	SD12	弥生土器 甕	17.6	—	—	ハケメ	にぶい黄褐(10YR5/3)	2mm以下の砂粒多含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
225	94-6	C-11	SD12	弥生土器 甕	17.0	—	—	ハケメ	浅黄橙(10YR8/3)	細砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
226	89-5	C-11	SD12	弥生土器 甕	15.0	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	灰白(10YR8/2)	0.5mmの砂粒多含	口縁部1/12残	
227	122-6	C-10	SD12	弥生土器 甕	16.7	—	—	ハケメ	灰黄(2.5Y7/2)	1mmの砂粒多含	口縁部2/12残	口縁部外面に刻目。
228	83-3	B-10	SD12	弥生土器 甕	17.0	—	—	ハケメ	浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒含	口縁部3/12残	
229	114-2	C-10	SD12 №40	弥生土器 甕	16.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：灰白（2.5Y8/2)	2mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
230	117-3	C-10	SD12	弥生土器 甕	13.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰白（2.5Y7/1)	2mmの砂粒・雲母含	口縁部2/12残	
231	103-7	C-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚基部4.0	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：にぶい黄橙（10YR7/4)	3mmの砂粒含	脚基部8/12残	
232	94-4	C-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径7.7	ハケメ	外：淡橙(5YR8/3) 内：灰白(10YR8/2)	細砂粒・雲母含	脚部3/12残	
233	73-2	D-17	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径6.7	—	橙(7.5YR7/6)	1mmの砂粒多含	脚部完存	摩滅のため調整不明。
234	133-6	C-13	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径7.0	—	にぶい黄橙(10YR7/3)	1mmの砂粒多含	脚部3/12残	摩滅のため調整、器壁厚不明。
235	68-2	C-9	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径8.2	ナデ	赤橙(10R6/6)	2mm以下の砂粒含	脚部8/12残	
236	107-1	C-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径5.8	脚部内面未調整、他はハケメ	浅黄橙(10YR8/3)	2mm以下の砂粒含	脚部9/12残	
237	95-7	C-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚基部7.3	外面ハケメ、内面ナデ	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：灰（N5/)	3mmの砂粒・雲母含	脚基部完存	
238	122-4	C-10	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径7.0	脚部内面ナデ、他はハケメ	灰黄褐(10YR6/2)	1mmの砂粒多含	脚部2/12残	
239	77-5	D-16	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径8.0	—	外：灰白(2.5Y7/1) 内：黒(2.5Y2/1)	1mmの砂粒含	脚部8/12残	摩滅のため調整・器壁厚不明。焼成不良。
240	125-3	C-13	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径7.6	ナデ	外：にぶい橙(5YR7/3) 内：灰白（10YR8/2)	2mmの砂粒若干含	脚部3/12残	
241	133-5	C-13	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径8.0	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	1mmの砂粒多含	脚部4/12残	
242	170-4	C-13	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径6.5	外面ハケメ、内面ナデ	外：灰白(2.5Y8/2) 内：灰白（10YR8/2)	3mm以下の砂粒・雲母含	脚部ほぼ完存	剥離・摩滅のため調整不明確。
243	121-1	C-10	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径7.8	脚部外面ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：褐灰（10YR4/1)	2mmの砂粒多含	脚部ほぼ完存	剥離のため調整・器壁厚不明確。
244	84-2	C-10	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径7.0	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)～灰黄褐(10YR6/2)	2mmの砂粒含	脚部5/12残	摩滅のため調整不明確。
245	146-5	C-10	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径7.6	外面ハケメ、内面工具ナデ	褐灰(10YR5/1)	0.3mmの砂粒含	脚部6/12残	剥離・摩滅のため調整不明確。
246	65-4	D-17	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径7.0	ナデ	褐灰(10YR5/1)	2mmの砂粒含	脚部完存	
247	109-4	C-10	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径7.6	外面ハケメ、内面ナデ	暗灰黄（2.5Y5/2)	2mmの砂粒多含	脚部5/12残	摩滅のため調整不明確。
248	170-2	C-13	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径6.2	外面ハケメ、内面ナデ	外：灰褐(7.5YR5/2) 内：橙（2.5YR6/6)	7mm以下の砂粒・雲母含	脚部ほぼ完存	剥離・摩滅のため調整不明確。
249	91-3	C-11	SD12	弥生土器 甕	23.0	—	—	外面ハケメ、内面未調整	外：灰黄(10YR5/2) 内：にぶい黄橙(10YR7/2)	1mmの砂粒多含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。
250	82-3	C-10	SD12	弥生土器 甕	21.7	—	—	ハケメ	浅黄橙(10YR8/3)	0.5mmの砂粒多含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。
251	121-5	C-10	SD12	弥生土器 甕	17.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	1mmの砂粒多含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
252	187-5	C-13	SD12	弥生土器 甕	16.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	2mmの砂粒含	口縁部3/12残	口縁部外面に刺突列点文。
253	82-1	C-10	SD12 №41	弥生土器 甕	20.5	—	脚基部6.5	外面ハケメ、内面ナデ	明褐灰(7.5YR7/2)	2mmの砂粒多含	口縁部1/12残、底部5/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため調整不明確。
254	88-3	C-10	SD12	弥生土器 甕	17.8	—	—	ハケメ	外：浅黄(2.5Y7/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	2.5mmの砂粒・雲母含	口縁部2/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
255	170-6	C-13	SD12	弥生土器 甕	18.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	0.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残。	口縁部に刺突列点文。剥離・摩滅のため調整不明確。
256	94-5	C-11	SD12	弥生土器 甕	16.0	—	—	ハケメ	灰白(2.5Y8/2)	細砂粒・雲母含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。
257	87-3	C-11	SD12	弥生土器 甕	20.4	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：灰黄褐(10YR5/2) 内：淡黄(2.5Y8/3)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部2/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
258	69-1	C-9	SD12	弥生土器 甕	20.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mm以下の砂粒多含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点。
259	100-3	C-12	SD12	弥生土器 甕	12.2	—	—	ハケメ	灰白(10YR8/2)	白色微砂多含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため調整不明確。
260	108-1	C-11	SD12	弥生土器 甕	22.0	—	—	ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：浅黄橙（10YR8/3)	雲母含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
261	121-3	C-10	SD12	弥生土器 甕	17.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰(5Y6/1)	1mmの砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
262	107-2	C-11	SD12	弥生土器 甕	12.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR6/3) 内：にぶい黄橙（10YR7/2)	2mm以下の砂粒多含	口縁部3/12残	口縁部外面に刺突列点文。
263	87-5	C-11	SD12	弥生土器 甕	14.3	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄(2.5Y7/3) 内：淡黄(2.5Y8/3)	0.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
264	82-4	C-10	SD12	弥生土器 甕	21.1	—	—	ハケメ	浅黄橙(7.5YR8/3)	1mmの砂粒多含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
265	97-2	B-11	SD12	弥生土器 甕	19.6	—	—	ハケメ	灰白（10YR8/2）	1㎜の砂粒・雲母含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突文。
266	88-2	C-11	SD12	弥生土器 甕	14.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄(2.5Y7/3) 内：淡黄(2.5Y8/3)	1㎜の砂粒・雲母若干含	口縁部4/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
267	122-2	C-10	SD12	弥生土器 甕	15.2	—	—	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)	1㎜の砂粒多含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。
268	104-2	C-11	SD12	弥生土器 甕	19.0	—	—	外面ハケメ、内面未調整	にぶい黄橙(10YR7/2)	微砂粒・雲母若干含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。
269	110-1	C-10	SD12	弥生土器 甕	13.2	—	—	外面ハケメ	灰白（10YR8/2）	3㎜の砂粒・雲母若干含	口縁部2/12残	口縁端部外面に刺突列点文。剥離・摩滅のため調整不明確。
270	102-1	C-12	SD12	弥生土器 甕	15.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白（2.5Y8/2）	白色微砂・雲母若干含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
271	74-4	C-9	SD12	弥生土器 甕	18.0	—	—	ハケメ	外：黄灰(2.5Y5/1) 内：灰白(2.5Y7/1)	3㎜の砂粒・雲母含	口縁部3/12残	口縁部外面に刺突列点文。
272	80-3	B-10	SD12	弥生土器 甕	15.2	—	—	外面ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：灰（5Y4/1）	2㎜の砂粒含	口縁部2/12残	口縁端部外面に刺突列点文。摩滅のため内面調整不明。
273	107-4	C-11	SD12	弥生土器 甕	17.0	—	—	外面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/4)	5㎜の小石含	口縁部4/12残	口縁部外面に刺突列点文。剥離・摩滅のため調整不明確。
274	98-2	B-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚基部6.6	ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	1㎜の砂粒多含	脚基部5/12残	
275	119-6	C-10	SD12	弥生土器 甕	—	—	—	ハケメ	褐灰（10YR5/1）	2㎜の砂粒含	体部下端5/12残	
276	80-2	B-10	SD12	弥生土器 甕	—	—	—	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)	2㎜の砂粒含	体部下半3/12残	内面に炭化物付着。
277	160-3	C-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚基部5.7	外面ハケメ、内面ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	2.5㎜の砂粒・雲母含	体部下端完存	
278	145-2	C-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径10.0	外面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2㎜の砂粒多含	脚部完存	摩滅のため調整・器壁厚不明確。
279	175-2	B-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径8.3	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：にぶい橙（7.5YR7/3）	2㎜の砂粒含	脚部8/12残	
280	95-4	C-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚基部5.3	外面ハケメ、内面ナデ	外：灰黄褐(10YR5/2) 内：淡黄(2.5Y8/3)	1㎜の砂粒・雲母含	脚基部6/12残	
281	73-1	D-17	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚基部5.0	外面ハケメ、内面ナデ	外：黄橙(7.5YR7/8) 内：橙(2.5YR6/6)	1㎜の砂粒多含	底部6/12残	摩滅のため調整不明確。
282	125-2	C-13	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径5.1	外面ハケメ、内面未調整	外：灰褐(5YR6/2) 内：褐灰（5YR6/1）	2㎜の砂粒多含	脚基部完存	剥離・摩滅のため内面調整不明確。
283	160-1	C-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径9.4	—	外：灰白(2.5Y8/2) 内：灰白（5Y5/1）	1.5㎜の砂粒・雲母多含	脚部ほぼ完存	摩滅のため調整・器壁厚不明。
284	146-2	C-10	SD12 №25	弥生土器 甕	—	—	脚径11.6	—	灰黄(2.5Y7/2)	2㎜の砂粒多含	脚部9/12残	摩滅のため調整・器壁厚不明。
285	170-1	C-11	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径9.0	外面ハケメ、内面ナデ	灰白(2.5Y8/2)	0.5㎜の砂粒・雲母若干含	脚部完存	
286	119-3	C-10	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径9.7	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：黄灰（2.5Y4/1）	微砂粒・雲母多含	脚部4/12残	
287	117-5	C-10	SD12	弥生土器 甕	—	—	脚径4.5	外面ハケメ、内面ナデ	外：褐灰(10YR5/1) 内：褐灰（10YR4/1）	精良	脚部4/12残	
288	97-1	B-11	SD12	弥生土器 甕	19.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白（2.5Y8/2）	白色微砂・雲母若干含	口縁部5/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため調整不明確。
289	87-4	C-11	SD12	弥生土器 甕	14.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄(2.5Y7/3) 内：淡黄(2.5Y8/3)	2㎜の砂粒・雲母含	口縁部3/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
290	109-6	C-11	SD12	弥生土器 甕	16.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	雲母多含	口縁部2/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
291	83-2	B-12	SD12	弥生土器 甕	18.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰黄(2.5Y7/2)	2㎜の砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
292	108-2	C-11	SD12	弥生土器 甕	15.0	—	—	外面ハケメ、内面未調整	灰黄褐(7.5YR6/2)	1㎜以下の砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため文様不明確。
293	109-7	C-10	SD12	弥生土器 甕	16.3	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰黄（2.5Y7/2）	1㎜の砂粒多含	頸部1/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
294	74-1	B-10	SD12	弥生土器 甕	17.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)	1㎜の砂粒・雲母含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
295	147-3	C-10	SD12	弥生土器 甕	19.0	—	—	ハケメ	外：黒褐(10YR3/1) 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	0.5㎜の砂粒・雲母含	口縁部2/12残	
296	82-2	C-10	SD12	弥生土器 甕	24.0	—	—	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/3)	1㎜の砂粒含	口縁部1/12残	摩滅のため文様・調整不明確。
297	96-1	B-11	SD12	弥生土器 甕	25.3	—	—	ハケメ	灰黄(2.5Y7/2)	2㎜の砂粒多含	頸部3/12残	剥離のため文様不明。
298	107-3	C-11	SD12	弥生土器 甕	23.0	—	—	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/4)	3㎜の砂粒含	口縁部2/12残	体部上端に横線文。摩滅のため文様不明確。
299	95-3	C-11	SD12	弥生土器 甕	21.5	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：灰白(2.5Y8/2)	2㎜の砂粒・雲母含	口縁部2/12残	剥離のため文様不明確。
300	90-1	B-11	SD12	弥生土器 甕	22.6	—	—	外面ハケメ、内面未調整	灰黄(2.5Y6/2)	1㎜の砂粒多含	口縁部1/12残	
301	93-2	C-11	SD12	弥生土器 甕	20.5	—	—	外面ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：灰黄(2.5Y7/2)	2㎜の砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため内面調整不明。
302	118-3	C-10	SD12	土師器 甕	16.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：浅黄（2.5Y7/3）	微砂粒含	口縁部1/12残	
303	70-2	C-9	SD12	土師器 甕	16.2	—	—	外面ハケメ、内面未調整	にぶい黄橙(10YR7/3)	精良	口縁部1/12残	
304	97-4	B-11	SD12	土師器 甕	—	—	—	外面ハケメ、内面ハケメ・一部ナデ	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：灰黄褐（10YR6/2）	1㎜の砂粒含	体部下半4/12残	
305	95-2	C-11	SD12	土師器 甕	—	—	脚基部6.0	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：灰黄褐(10YR5/2)	2㎜の砂粒・雲母多含	脚基部完存	
306	94-8	C-11	SD12	土師器 甕	—	—	脚基部6.4	外面ハケメ	淡黄(2.5Y8/3)	2㎜の砂粒・雲母多含	脚基部10/12残	摩滅のため内面調整不明確。
307	187-3	C-13	SD12	土師器 甕	—	—	脚径8.0	内面ハケメ	灰白(5Y8/2)	2.5㎜以下の砂粒含	脚部完存	摩滅のため調整不明確。
308	98-1	C-11	SD12	土師器 甕	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：褐灰(7.5YR5/1) 内：にぶい黄橙（10YR7/2）	白色微砂・雲母多含	体部下半3/12残	

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
309	156-1	B-11	SD12	土師器甕	—	—	脚基部6.0	ハケメ	にぶい黄橙(10YR6/3)	微砂粒含	体部下半完存	
310	187-1	C-10	SD12	土師器甕	—	—	脚基部6.0	ハケメ	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：灰白 (2.5Y8/2)	1mmの砂粒・雲母多含	脚基部完存	摩滅のため調整不明確。
311	155-1	C-12	SD12 №21	土師器甕	—	—	脚基部6.0	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)～灰黄(2.5Y7/2)	3mmの砂粒含	体部下半完存	
312	110-2	C-10	SD12	土師器甕	—	—	脚径10.0	外面ハケメ、内面ナデ	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：黄灰 (2.5Y4/1)	1mmの砂粒多含	脚部1/12残	
313	77-4	D-16	SD12	土師器甕	—	—	脚径7.6	内面未調整	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mm以下の砂粒多含	脚部完存	摩滅のため外面調整不明。
314	146-4	C-10	SD12 №40	土師器甕	—	—	脚径9.2	内面未調整	灰(N4/)	微砂粒・雲母若含	脚部5/12残	剥離・摩滅のため調整不明確。
315	69-5	C-9	SD12	弥生土器鉢	17.2	—	—	—	灰黄(2.5Y7/2)	0.5mmの砂粒若干含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明。
316	69-2	C-9	SD12	弥生土器鉢	14.6	—	—	—	暗赤褐(5YR3/2)	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12残	内面に炭化物付着。摩滅のため調整不明。
317	124-5	B-10	SD12	弥生土器鉢	12.9	—	—	ヘラミガキ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mmの砂粒含	体部9/12残	口縁部外面に刺突列点文。体部上端に横線文。摩滅のため調整不明確。
318	74-6	C-9	SD12	弥生土器鉢	10.0	9.5	底径4.6	工具ナデ	外：淡黄橙(10YR8/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/6)	0.5mmの砂粒・雲母含	口縁部5/12残、底部11/12残。	
319	75-3	B-10	SD12	弥生土器鉢	—	—	頸部径17.0	ハケメ	外：褐灰(10YR5/1) 内：灰黄(2.5Y6/2)	5mmの砂粒多含	体部5/12残	
320	72-2	D-17	SD12	弥生土器鉢	15.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	2mm以下の砂粒・雲母・赤色粒含	口縁部1/12残	体部に刺突列点文＋横線文＋山形文2段。
321	68-4	C-9	SD12	弥生土器鉢	8.1	6.1	底径4.0	ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：橙(7.5YR6/6)	2mm以下の小石・雲母含	口縁部2/12残、底部完存	
322	147-1	B-11	SD12	弥生土器鉢	13.9	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	橙(5YR6/6)	4mmの小石若干含	口縁部11/12残	剥離が激しい。
323	160-2	C-11	SD12	弥生土器有孔鉢	—	—	底径6.3	ナデ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.5mmの砂粒・雲母含	底部完存	孔径1.7cm。
324	110-4	C-10	SD12	弥生土器有孔鉢	—	—	底径4.4	工具ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	精良	底部5/12残	孔径1.2cm。
325	99-3	C-11	SD12	弥生土器有孔鉢	—	—	底径4.5	ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：灰白 (2.5Y8/2)	1mmの砂粒・雲母含	底部完存	孔径1.6cm。剥離のため調整不明確。
326	106-3	B-11	SD12	弥生土器鉢	16.3	—	—	ハケメ	浅黄橙(10YR8/3)	雲母若干含	口縁部2/12残	
327	106-1	B-11	SD12	弥生土器手焙形土器	15.0	—	—	ハケメ	外：灰白(2.5Y8/2) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
328	178-2	B-11	SD12	弥生土器手焙形土器	23.5	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	外：灰黄褐(10YR5/2) 内：にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残、覆部欠損	体部に（突帯＋刻目）。摩滅のため調整不明確。
329	116-1	C-12	SD12	弥生土器手焙形土器	15.6	18.3	底径5.1	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの砂粒・雲母含	口縁部10/12残	覆接合部に棒状浮文。体部に（突帯＋刻目）。
330	76-1	C-10	SD12	弥生土器手焙形土器	—	—	—	ハケメ、内面一部工具ナデ	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：浅黄(2.5Y7/3)	0.5mmの砂粒・雲母含	覆部小片	
331	101-5	C-12	SD12	弥生土器手焙形土器	—	—	—	ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：灰白 (10YR8/2)	1mmの砂粒・雲母多含	覆部小片	
332	83-1	B-10	SD12	弥生土器高杯	21.0	—	—	外面ヘラミガキ	橙(5YR7/6)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
333	131-1	C-9	SD12	弥生土器高杯	21.5	—	—	ヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの砂粒含	口縁部11/12残	
334	68-1	C-9	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚柱部5.0	外面ヘラミガキ	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒含	脚柱部完存	摩滅のため調整不明確。
335	125-6	C-13	SD12	弥生土器高杯	—	—	筒部径4.6	外面ヘラミガキ、内面ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	2mmの砂粒多含	筒部6/12残	透孔8方。裾部外面に横線文。摩滅のため調整不明確。
336	73-3	D-17	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部4.0	—	橙(2.5YR6/8)	1mmの砂粒多含	脚基部完存	透孔2＋3方。摩滅のため調整不明。
337	188-1	C-10	SD12	弥生土器高杯	23.0	—	—	ヘラミガキ	浅黄橙(10YR8/4)	細砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
338	188-2	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.6	脚部内面ハケメ、他はヘラミガキ	灰黄(2.5Y7/2)	細砂粒・雲母含	脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため文様不明確。
339	111-1	C-10	SD12 №32	弥生土器高杯	26.2	—	—	外面ヘラミガキ	灰黄(2.5Y7/2)	2mmの砂粒含	口縁部小片	摩滅のため調整不明確。
340	111-2	C-10	SD12 №32	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.8	脚部外面・杯部内面ヘラミガキ、脚部内面未調整	灰白(10YR8/2)	精良	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
341	111-3	C-10	SD12 №32	弥生土器高杯	—	—	脚径12.0	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/3)	5mmの小石若干含	脚部1/12残	
342	134-1	C-10	SD12	弥生土器高杯	22.8	—	—	ヘラミガキ	灰黄(2.5Y7/2)	精良	口縁部1/12残、杯底部3/12残	
343	134-2	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.8	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	灰黄(2.5Y7/2)	精良	脚基部完存	透孔1+3方。脚基部に横線文。
344	171-2	B-12	SD12	弥生土器高杯	25.0	—	—	外面ヘラミガキ	にぶい橙(5YR7/3)	1mmの砂粒若干含	口縁部2/12残。	摩滅のため調整不明確。
345	152-2	D-17	SD12	弥生土器高杯	—	—	—	ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	0.5mmの砂粒・雲母若干含	杯部2/12残	摩滅のため調整不明確。
346	77-1	D-16	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部4.6	内面未調整	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒多含	脚基部完存	脚基部に横線文。透孔1＋3方。施文により外面調整不明。
347	148-5	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.8	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：にぶい褐(7.5YR5/4) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mmの砂粒・雲母含	脚部3/12残、脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。
348	99-7	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.8	杯部内面ヘラミガキ	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：灰白 (2.5Y8/2)	2mmの砂粒・雲母含	脚基部完存	摩滅のため調整・器壁厚不明確。
349	94-3	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.6	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：橙(5YR7/6) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	精良	脚部3/12残	透孔数不明。
350	157-2	C-12	SD12	弥生土器高杯	—	—	—	ヘラミガキ	灰白(2.5Y7/1)	0.5mmの砂粒含	杯下半完存	摩滅のため調整不明確。
351	93-5	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.6	脚部内面ハケメ、他はヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR7/3)	微砂粒含	脚基部完存	透孔3方。
352	110-5	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.8	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：にぶい橙(5YR7/4) 内：橙 (7.5YR7/6)	1mmの砂粒・雲母含	脚基部完存	透孔1＋3方。脚基部に横線文。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
353	145-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.5	外面ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	雲母含	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
354	114-1	C-10	SD12 №46	弥生土器高杯	24.0	—	—	ヘラミガキ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：橙（7.5YR7/6)	1.5㎜の砂粒・雲母若干含	口縁部1/12残	
355	157-3	C-12	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.9	—	浅黄橙(7.5YR8/4)	1㎜の砂粒・雲母含	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明。
356	113-2	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部4.0	脚部内面未調整、他はヘラミガキ	外：灰白(2.5Y8/2) 内：黄灰（2.5Y6/1)	1㎜の砂粒・雲母含	脚基部9/12残	透孔3方。脚基部に横線文。
357	80-1	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	—	ヘラミガキ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：浅黄橙(10YR8/3)	3㎜の砂粒含	杯部3/12残	
358	164-1	C-13	SD12	弥生土器高杯	24.2	22.8	脚径15.0	ヘラミガキ	明褐灰(7.5YR7/2)	3㎜の赤色斑粒含	口縁部1/12残、杯下半完存	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明確。
359	103-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径17.0	ヘラミガキ	灰白（10YR8/2)	微砂粒含	脚部4/12残	摩滅のため調整不明確。
360	146-3	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.4	外面ヘラミガキ	にぶい橙(7.5YR6/4)	1㎜の砂粒若干含	脚部3/12残、脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
361	133-2	C-13	SD12	弥生土器高杯	21.0	—	—	外面ヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR7/3)	3㎜の砂粒若干含	口縁部2/12残	剥離・摩滅のため調整不明確。
362	101-2	C-12	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.3	脚部内面未調整、他はヘラミガキ	橙(5YR6/6)	精良	脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。
363	185-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径9.5	—	にぶい黄橙(10YR7/4)	3㎜以下の砂粒・雲母含	脚部9/12残、脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明。
364	113-4	C-10	SD12	弥生土器高杯	26.5	—	—	ヘラミガキ	浅黄橙(10YR8/3)	1㎜の砂粒若干含	杯部1/12残	
365	113-5	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.6	外面ヘラミガキ、内面ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	雲母含	脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。
366	138-2	C-11	SD12	弥生土器高杯	20.1	—	—	脚部内面工具ナデ、他はヘラミガキ	外：橙(7.5YR6/6) 内：橙（5YR6/8)	2.5㎜の砂粒・雲母含	口縁部2/12残、脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
367	115-1	C-10	SD12 №44	弥生土器高杯	26.3	—	—	ヘラミガキ	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：浅黄（2.5YR7/3)	1㎜の砂粒若干含	口縁部6/12残	
368	144-3	B-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.0	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：橙(5YR6/6) 内：浅黄橙（7.5YR8/4)	精良	脚部3/12残	透孔3か4方。
369	135-1	C-10	SD12 №31	弥生土器高杯	23.9	—	—	ヘラミガキ	浅黄橙(10YR8/4)	精良	口縁部5/12残	摩滅のため調整不明確。
370	84-3	B-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.0	外面ヘラミガキ、内面未調整	橙(7.5YR6/6)	微砂粒含	脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。
371	182-1	C-10	SD12 №28	弥生土器高杯	23.0	18.5	脚径10.2	—	にぶい橙（7.5YR7/4)	3㎜の砂粒含	杯部ほぼ完存	透孔3方。剥離・摩滅のため調整・器壁厚不明。
372	142-2	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.0	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒含	脚部4/12残	透孔3方。
373	88-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	20.8	—	—	ヘラミガキ	浅黄橙(7.5YR8/6)	微砂粒若干含	口縁部4/12残	摩滅のため調整不明確。
374	140-1	D-17	SD12	弥生土器高杯	22.0	22.0	脚径14.0	外面ヘラミガキ	淡黄(2.5Y8/3)	精良	口縁部2/12残、脚基部完存	透孔3方。剥離・摩滅のため文様・調整・器壁厚不明確。
375	112-1	C-10	SD12	弥生土器高杯	20.8	—	—	ヘラミガキ	褐灰(10YR5/1)	5㎜の小石若干含	口縁部9/12残	摩滅のため調整不明確。
376	86-2	C-10	SD12 №37	弥生土器高杯	28.3	—	脚基部3.8	ヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR7/3)	4㎜の小石若干含	口縁部1/12残、脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文3段。
377	148-4	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径11.2	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：橙(7.5YR7/6) 内：にぶい黄橙（10YR7/4)	1㎜の砂粒含	脚部2/12残、脚基部ほぼ完存	透孔3方。脚基部に横線文。
378	176-2	C-11	SD12	弥生土器高杯	22.0	18.5	脚径11.2	脚部内面ハケメ、他はヘラミガキ	橙(5YR6/6)～にぶい赤褐（5YR5/4)	2㎜以下の砂粒・雲母含	口縁部2/12残、脚部8/12残	透孔3方。脚基部に横線文。
379	141-1	B-11	SD12	弥生土器高杯	26.0	19.0	脚径11.1	外面ヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2㎜の砂粒含	口縁部2/12残、脚基部完存	透孔3方。剥離・摩滅のため文様・調整・器壁厚不明確。
380	123-1	C-10	SD12 №34	弥生土器高杯	24.5	—	—	—	浅黄橙(7.5YR8/3)	3㎜の砂粒若干含	口縁部小片、脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整・器壁厚不明。
381	153-1	D-17	SD12	弥生土器高杯	23.5	—	—	ヘラミガキ	外：橙(5YR6/6) 内：橙（7.5YR7/6)	2㎜の砂粒・雲母含	口縁部4/12残、杯底部8/12残	
382	129-1	C-10	SD12	弥生土器高杯	22.3	23.1	脚径14.0	ヘラミガキ	灰白(2.5Y8/2)	雲母若干含	脚部ほぼ完存、杯底部6/12残	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため内面調整不明確。
383	157-1	C-13	SD12	弥生土器高杯	14.0	—	—	ヘラミガキ	明褐灰(7.5YR7/2)	1㎜の砂粒含	口縁部2/12残、杯下半4/12残	摩滅のため調整不明確。
384	146-1	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径11.6	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	橙(7.5YR7/6)	2㎜の砂粒含	脚部3/12残、脚基部完存	透孔3方。摩滅のため文様・調整不明確。
385	143-1	C-11	SD12 №23	弥生土器高杯	19.8	—	—	ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	微砂粒含	口縁部7/12残	
386	65-1	C-9	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.9	外面ヘラミガキ、内面ナデ？	灰黄(2.5Y7/2)	1㎜の砂粒若干含	脚部完存	透孔3方。脚基部に横線文3段。摩滅のため調整不明確。
387	85-2	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	—	外面ヘラミガキ	灰褐(7.5YR6/2)	1㎜の砂粒若干含	杯部1/12残	剥離・摩滅のため調整・器壁厚不明確。
388	99-6	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部4.1	脚部内面未調整、他はヘラミガキ	浅黄橙(10YR8/3)	1.5㎜の砂粒・雲母含	脚基部完存	透孔数不明。脚基部に横線文。
389	159-4	C-13	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.0	—	外：橙(5YR7/6) 内：橙（5YR6/6)	8㎜以下の砂粒含	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明。
390	101-1	B-12	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.4	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：灰黄（2.5Y7/2)	白色微砂・雲母含	脚基部6/12残	透孔数不明。脚基部に横線文2段。
391	159-3	C-12	SD12	弥生土器高杯	25.0	—	—	ヘラミガキ	外：淡赤橙(2.5YR7/4) 内：橙（7.5YR6/6)	微砂粒・雲母多含	口縁部6/12残	摩滅のため調整不明確。
392	174-1	B-11	SD12	弥生土器高杯	23.0	—	—	ヘラミガキ	明赤褐(2.5YR5/6)	微砂粒・雲母含	口縁部3/12残	口縁端部内面に沈線。摩滅のため調整不明確。
393	176-1	B-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径11.5	—	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：橙（7.5YR7/6)	微砂粒含	脚部9/12残	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明。
394	152-1	D-16	SD12	弥生土器高杯	21.9	—	—	—	橙(2.5YR6/8)	3.5㎜の砂粒含	口縁部8/12残	摩滅のため調整不明。
395	172-2	B-12	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径9.8	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：黄灰(2.5Y5/1) 内：にぶい黄橙（10YR6/3)	精良	脚部ほぼ完存	透孔3方。
396	171-3	C-13	SD12	弥生土器高杯	22.0	—	—	外面ヘラミガキ	外：橙(5YR7/6) 内：浅黄橙（7.5YR8/4)	0.5㎜の砂粒若干含	口縁部1/12残。	摩滅のため調整不明確。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
397	108-3	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.0	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	橙(7.5YR7/6)	4mm以下の砂流含	脚部9/12残	透孔3方。
398	131-2	B-10	SD12	弥生土器高杯	19.6	—	—	ヘラミガキ？	浅黄橙(7.5YR8/6)	3mmの砂粒含	口縁部7/12残	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明確。
399	72-3	D-17	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部4.2	ヘラミガキ	灰黄(2.5Y7/2)	雲母・微砂若干含	杯底部5/12残	
400	149-1	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.8	脚部内面ハケメ、他はヘラミガキ	外：橙(7.5YR7/6) 内：にぶい黄橙（10YR7/4）	1mmの砂粒・雲母含	脚部1/12残、脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。
401	105-3	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚柱径4.4	外面ヘラミガキ、内面未調整	淡黄(2.5Y8/3)	1mmの砂粒・雲母若干含	脚柱部5/12残	透孔4方か。
402	83-6	B-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径9.0	外面ヘラミガキ、内面未調整	橙(5YR6/6)	精良	脚部2/12残	
403	113-6	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	—	ヘラミガキ	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：浅黄（2.5Y7/3）	1mmの砂粒・雲母若干含	杯底部6/12残	
404	89-3	B-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.6	杯部内面ヘラミガキ	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	精良	脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
405	135-2	C-10	SD12 №26	弥生土器高杯	20.3	16.9	脚径9.6	ヘラミガキ	外：灰白(2.5Y8/2) 内：橙（5YR6/6）	5mmの小石・雲母含	口縁部3/12残、杯底部完存	脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
406	174-2	C-11	SD12	弥生土器高杯	19.5	—	—	—	にぶい黄橙(10YR7/4)	微砂粒含	口縁部2/12残、杯下半9/12残	摩滅のため調整不明。
407	132-1	C-13	SD12	弥生土器高杯	23.3	17.0	脚径9.2	脚部内面未調整、他はヘラミガキ	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの砂粒含	ほぼ完形	透孔3方。
408	75-1	C-10	SD12 №30	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.5	ヘラミガキ	外：淡黄(2.5Y8/4) 内：浅黄橙(10YR8/4)	精良	杯底部完存	脚基部に横線文。
409	124-1	B-11	SD12	弥生土器高杯	20.7	—	—	ヘラミガキ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	精良	口縁部2/12残、杯底部完存	
410	124-2	B-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径12.0	外面ヘラミガキ	外：橙(7.5YR7/6) 内：橙（7.5YR6/6）	微砂粒含	脚部7/12残	
411	165-1	C-10	SD12 №27	弥生土器高杯	22.7	—	—	—	橙(5YR7/6)	精良	口縁部9/12残	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明。
412	136-1	C-10	SD12 №17	弥生土器高杯	19.2	16.3	脚径10.0	脚部内面ハケメ、他はヘラミガキ	橙（5YR6/6）	3mm以下の砂粒含	口縁部若干欠損	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
413	105-5	B-11	SD12	弥生土器高杯	21.1	—	—	—	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：橙（7.5YR7/6）	2mmの砂粒・雲母多含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明。
414	105-6	B-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.5	—	橙（7.5YR7/6）	2mmの砂粒含	脚基部完存	摩滅のため調整不明。
415	85-1	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	—	ヘラミガキ	外：にぶい赤褐(5YR4/4) 内：にぶい褐(7.5YR6/3)	0.5mmの砂粒含	杯部3/12残	
416	138-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径8.3	脚部内面ハケメ、他はヘラミガキ	外：橙(5YR7/6) 内：橙（7.5YR7/6）	2.5mmの砂粒・雲母含	脚部ほぼ完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
417	183-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	20.3	15.5	脚径8.0	ヘラミガキ	橙（5YR6/6）	3mmの砂粒含	口縁部3/12残、脚部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
418	124-6	C-13	SD12	弥生土器高杯	—	—	—	外面ヘラミガキ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：浅黄橙（10YR8/3）	微砂粒・雲母含	杯底部完存	摩滅のため内面調整不明確。
419	181-2	C-12	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径8.6	脚部内面ナデ、他はヘラミガキ	にぶい橙（7.5YR7/4）	微砂粒若干含	脚部4/12残、脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
420	125-5	C-13	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.2	ヘラミガキ	にぶい橙（5YR7/4）	0.5mmの砂粒含	脚基部完存	
421	178-1	C-12	SD12	弥生土器高杯	18.4	14.2	脚径9.6	脚外面ヘラミガキ	外：明赤褐(5YR5/8) 内：明赤褐（2.5YR5/8）	4mm以下の砂粒含	ほぼ完形	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
422	126-1	C-13	SD12	弥生土器高杯	20.2	—	—	—	にぶい黄橙（10YR7/2）	2mmの砂粒多含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明。
423	158-2	B-12	SD12	弥生土器高杯	17.2	—	—	ヘラミガキ	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：灰白（10YR8/2）	0.5mmの砂粒若干含	口縁部10/12残	摩滅のため調整不明確。
424	185-2	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.0	ヘラミガキ	にぶい橙(5YR7/4)	6mm以下の小石・雲母多含	杯底部10/12残	摩滅のため調整不明確。
425	180-2	B-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径9.3	脚部内面ナデ、他はヘラミガキ	にぶい橙（7.5YR7/4）	精良	脚部7/12残	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
426	168-3	C-11	SD12	弥生土器高杯	19.0	13.5	脚径8.8	ヘラミガキ	橙(5YR7/6)	4mm以下の小石含	口縁部8/12残、脚部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
427	151-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	25.0	17.5	脚径10.4	ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)～橙(7.5YR6/6)	2mmの砂粒若干含	ほぼ完形	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
428	168-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	18.5	12.0	脚径7.7	—	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)	2mm以下の砂粒若干含	口縁部3/12残、脚部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明。
429	162-2	C-11	SD12	弥生土器高杯	23.5	16.2	脚径10.0	—	橙(7.5YR7/6)～橙（7.5YR6/6）	3mmの砂粒含	口縁部2/12残、脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明。
430	131-4	C-12	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.8	—	浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒含	脚基部完存	透孔3方。剥離・摩滅のため調整不明。
431	180-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	27.5	18.1	脚径12.2	脚部内面未調整、他はヘラミガキ	橙（5YR7/6）	0.5mm以下の砂粒多含	口縁部1/12残、脚部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
432	130-1	C-10	SD12 №29	弥生土器高杯	23.3	17.3	脚径9.8	脚部外面ハケメ、内面ナデ、他はヘラミガキ	橙(5YR6/8)	3mmの砂粒・雲母若干含	脚部ほぼ完存、杯部9/12残	透孔3方。脚基部に横線文。
433	78-2	D-17	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径14.0	外面ヘラミガキ、一部ハケメ	外：橙(5YR6/6) 内：にぶい橙(5YR6/4)	2mm以下の砂粒含	脚部8/12残、杯部小片	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
434	136-3	C-10	SD12	弥生土器高杯	22.0	—	—	—	浅黄橙（10YR8/3）	4mmの小石多含	杯底部・脚基部完存	剥離・摩滅のため調整・器壁厚不明。
435	140-2	C-11	SD12	弥生土器高杯	19.6	13.7	脚径14.0	外面ヘラミガキ、脚部内面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/4)	精良	口縁部2/12残、脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。剥離・摩滅のため文様・調整・器壁厚不明確。
436	93-4	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径10.2	ハケメ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの砂粒若干含	脚部2/12残、脚基部完存	
437	93-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	20.0	—	—	ヘラミガキ	外：橙(5YR6/6) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
438	94-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	20.0	—	—	ヘラミガキ	外：橙(5YR6/8) 内：橙(5YR7/6)	1mmの砂粒・雲母多含	口縁部2/12残	
439	92-3	C-11	SD12	弥生土器高杯	17.0	—	—	ヘラミガキ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：橙(5YR7/6)	2mmの砂粒含	口縁部2/12残	
440	143-2	B-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径11.6	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	橙(5YR6/6)	微砂粒含	脚部ほぼ完存	透孔3方。脚基部に横線文。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
441	175-4	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.1	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	灰白(2.5Y8/2)	微砂粒含	脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文2段。摩滅のため調整不明確。
442	132-3	C-10	SD12 №38	弥生土器高杯	—	—	脚径12.5	外面ヘラミガキ	にぶい橙(7.5YR7/4)～浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒含	脚部4/12残	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
443	87-2	C-11	SD12	弥生土器高杯	17.1	—	—	—	浅黄橙(10YR8/4)	微砂粒若干含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明。
444	168-2	C-11	SD12 №20	弥生土器高杯	17.8	—	—	ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	4mm以下の小石・雲母含	口縁部3/12残、杯底部完存	口縁端部内面に沈線。摩滅のため調整不明確。
445	108-4	C-11	SD12	弥生土器高杯	15.0	—	—	外面ヘラミガキ？	外：にぶい黄橙(10YR6/6) 内：浅黄橙（10YR8/4)	精良	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明。
446	175-3	B-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部2.7	—	外：橙(7.5YR7/6) 内：橙（5YR6/8)	精良	脚部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
447	83-5	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.3	外面ヘラミガキ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	0.5mmの砂粒含	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
448	118-5	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.3	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：橙（7.5YR7/6)	微砂粒含	脚基部完存	透孔3方。
449	95-6	C-11	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部2.8	内面ナデ	外：橙(5YR6/8) 内：橙（5YR7/6)	細砂粒・雲母含	脚基部完存	摩滅のため調整不明確。
450	159-2	C-13	SD12	弥生土器高杯	—	—	—	ヘラミガキ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：にぶい橙（5YR7/4)	雲母若干含	杯下半完存	
451	65-5	D-17	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.6	内面ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	精良	脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文＋羽状刻目。摩滅のため調整不明確。
452	162-1	C-11	SD12	弥生土器高杯	16.3	13.0	脚径7.5	脚部内面以外ヘラミガキ	橙(5YR6/6)～にぶい橙（7.5YR7/4)	3mmの砂粒含	口縁部2/12残、脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
453	148-2	C-10	SD12	弥生土器高杯	—	—	脚径14.0	外面ヘラミガキ	淡黄(2.5Y8/3)	1mmの砂粒・雲母含	脚部4/12残	摩滅のため調整不明確。
454	171-4	C-12	SD12	弥生土器器台	19.0	—	—	ハケメ	灰白(2.5Y8/2)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/12残。	口縁端部に刻目。
455	95-5	C-11	SD12	弥生土器器台	—	—	脚径26.0	ナデ	外：浅黄橙(7.5YR8/6) 内：浅黄橙（7.5YR8/4)	1.5mmの砂粒含	脚下端部1/12残	摩滅のため調整不明確。
456	96-4	B-11	SD12	弥生土器器台	20.8	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	明赤褐(5YR5/6)	2mmの砂粒若干含	口縁部3/12残	口縁端部外面に沈線。摩滅のため調整不明確。
457	183-2	C-12	SD12	弥生土器器台	—	—	脚径8.7	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	橙（5YR7/6)	2mmの砂粒含	脚部7/12残	透孔5方。
458	84-5	C-10	SD12	土師器器台	15.7	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	橙(5YR7/6)	3mmの砂粒含	口縁部1/12残	
459	66-5	C-9	SD12	土製品	—	—	—	ナデ	灰白(5Y7/1)	2mmの砂粒多含	—	把手の一部か。
460	66-4	C-10	SD12	土製品土錘	3.5	3.0	重33.1g	未調整	暗灰(N3/)	1mmの砂粒含	完形	孔径0.8cm。全面黒斑。
461	73-4	D-17	SD12	土製品土錘	4.0	3.7	残重33.7g	ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	1mmの砂粒若干含	6/12残	孔径0.6cm。
462	7-2	B-11	SD12	石錘	長7.8	厚1.5	重63.2g	—	灰(N5/)	頁岩	完形	
463	7-4	D-9	SD12	砥石	残長8.1	厚3.7	残存重164.1g	—	にぶい褐(7.5YR5/4)	珪質泥岩	一部欠損	
464	7-1	C-12	SD12	石鏃	残長3.9	厚0.5	残存重2.8g	—	灰(N4/)	サヌカイト	茎部若干欠損	
465	6-5	C-14	SD12	剥片	長2.6	厚0.4	重3.1g	—	灰(N6/1)	サヌカイト	完形	ＲＦ
466	9-1	C-7	SD13 下層	弥生土器器台	—	—	脚径11.0	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	微砂粒含	脚部2/12残	穿孔11方。摩滅・剥離のため調整不明確。
467	8-4	C-7	SD13 下層	弥生土器壺	—	—	頸基部9.8	内面ナデ	外：灰(N4/) 内：灰(7.5Y4/1)	微砂粒含	頸基部2/12残	頸部に横線文3段＋突帯。摩滅のため調整不明確。
468	11-5	C-8	SD13	縄文土器深鉢	—	—	—	ナデ？	にぶい黄橙(10YR7/4)	5mmの小石含	口縁部小片	口縁部外面に（凸帯＋押圧）
469	8-2	C-7	SD13	弥生土器蓋	7.8	3.0	—	ナデ	外：にぶい黄橙(10YR6/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	3mmの砂粒含	口縁部9/12残	
470	5-4	C-8	SD13	弥生土器壺	11.3	—	—	ナデ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：橙(7.5YR7/6)	2.5以下mmの砂粒・雲母含	口縁部2/12残	
471	3-2	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	—	内面ナデ？	外：褐灰(10YR4/1) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	1mmの砂粒・雲母含	体部上端2/12残	体部に刺突文2段＋波状文。摩滅のため調整不明確。
472	5-3	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	頸部径8.0	内面ナデ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：灰白(2.5Y8/2)	2mmの砂粒含	頸部3/12残	頸部に竹管文＋横線文？。摩滅のため文様・調整不明確。
473	3-3	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：橙(5YR6/6) 内：黒(N2/)	5～2mmの砂粒含	体部小片	体部に波状文。摩滅のため調整不明確。
474	4-4	C-8	SD13	弥生土器壺	9.4	—	—	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	3.5mm以下の小石・雲母含	口縁部3/12残	摩滅のため調整不明確。
475	9-2	D-17	SK17 SD13	弥生土器壺	10.3	—	—	外面ナデ、内面未調整	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	3mm以下の砂粒含	口縁部1/12残、頸部4/12残	頸部に横線文。
476	8-1	C-8	SD13 №13	弥生土器壺	—	—	底径7.0	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：にぶい黄(2.5Y6/3)	3mm以下の砂粒含	口縁部欠損	摩滅のため調整不明確。
477	10-4	C-8	SD13	弥生土器壺	10.8	—	—	ハケメ	明褐灰(7.5YR7/2)	2mmの小石含	口縁部2/12残	ハケメは工具ナデ状。
478	10-5	C-8	SD13	弥生土器壺	10.9	—	—	ハケメ	灰白(10YR8/2)	精良	口縁部1/12残	
479	11-7	C-8	SD13	弥生土器壺	10.0	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	橙(5YR7/6)	5mmの小石含	口縁部3/12残	頸部に沈線＋半裁竹管文、口縁部内面に刺突列点文。
480	4-3	C-8	SD13	弥生土器壺	11.0	—	—	ナデ	外：にぶい褐(7.5YR5/4) 内：にぶい黄褐(10YR5/3)	1.5mm以下の砂粒多含	口縁部2/12残	
481	9-3	C-7	SD13	弥生土器壺	11.0	—	—	—	灰白(10YR8/2)	3mm以下の砂粒含	口縁部6/12残	剥離・摩滅のため調整不明。
482	9-4	C-7	SD13	弥生土器壺	—	—	底径5.2	外面ナデ、内面ハケメ	灰白(10YR8/2)	5mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
483	5-1	C-8	SD13 №16	弥生土器壺	15.1	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：灰白(2.5Y8/2)	5mm以下の小石・雲母含	口縁部完存	頸部に横線文、口縁部内面に扇形文。
484	10-3	C-8	SD13	弥生土器壺	12.4	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm以下の小石含	口縁部2/12残	高温で焼成。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
485	11-4	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	—	外面ナデ、内面簡単なハケメ	橙(7.5YR7/6)	2mmの小石含	体部小片	体部に横線文＋波状文。
486	11-6	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	—	外面ハケメ、内面簡単なハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの小石含	体部小片	体部に波状文。
487	11-3	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ、内面未調整	黄灰(2.5Y6/1～4/1)	精良	体部小片	体部にヘラ記号。
488	3-4	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	底径6.6	外面ナデ、内面ハケメ	外：橙(2.5YR6/6) 内：黄灰(2.5Y6/1)	1～2mmの砂粒含	底部8/12残	
489	11-2	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	底径9.1	ハケメ？	にぶい黄褐(10YR7/3)	5mm以上の小石含	底部1/12残	摩滅のため調整不明確。
490	4-1	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	底径9.3	外面ハケメ、内面ナデ	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：灰(N4/)	2mmの砂粒含	底部完存	
491	3-5	C-8	SD13	弥生土器壺	—	—	底径4.8	内面ナデ	灰黄(2.5YR6/2)	0.3mmの砂粒・雲母多含	底部8/12残	摩滅のため調整不明確。
492	10-6	C-8	SD13	弥生土器甕	11.3	—	—	—	灰黄褐(10YR5/2)	2mmの小石多含	口縁部1/12以下残	摩滅のため調整不明。
493	3-1	C-8	SD13	弥生土器甕	19.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白(10YR8/1)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12以下残	口縁端部に刻目。摩滅のため調整不明確。
494	10-7	C-8	SD13	弥生土器甕	15.4	—	—	外面ハケメ	にぶい黄褐(10YR7/3)	精良	口縁部1/12以下残	小片のため口径不明確。口縁端部に刻目。外面に煤付着。
495	3-6	C-8	SD13	弥生土器甕	—	—	底径4.8	外面工具ナデ、内面未調整	外：にぶい黄褐(10YR5/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm以下の砂粒・雲母含	底部完存	
496	10-8	C-8	SD13	弥生土器甕	—	—	底径7.6	外面ハケメ、内面工具ナデ	灰黄褐(10YR6/2)	3mmの小石含	底部1/12残	
497	4-2	C-8	SD13	弥生土器甕	—	—	底径8.9	ハケメ	外：灰白(10YR8/2) 内：灰(N4/)	微砂粒含	底部8/12残	
498	10-1	C-8	SD13	弥生土器甕	18.3	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	5mm以上の小石含	口縁部3/12残	
499	10-2	C-8	SD13	弥生土器甕	13.9	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	黄灰(2.5Y7/2)	3mm以下の小石含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。
500	8-3	C-7	SD13	弥生土器甕	—	—	脚基部4.2	ハケメ	外：灰白(10YR8/2) 内：浅黄橙(10YR8/3)	3mmの砂粒含	脚基部完存	摩滅のため調整不明確。
501	4-5	C-8	SD13	弥生土器甕	—	—	脚径11.3	ナデ	外：暗灰(N3/) 内：灰白(10YR8/2)	1.5mm以下の砂粒・雲母含	脚部1/12残	摩滅のため調整不明確。
502	11-1	C-8	SD13	弥生土器台付鉢	17.4	—	—	工具ナデ	褐灰(10YR5/1)	精良	口縁部1/12残	
503	12-6	C-8	SD13	弥生土器高杯	18.0	—	—	ナデ？	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの小石含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
504	12-4	C-8	SD13	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.1	外面ヘラミガキ、内面ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	1mmの砂粒若干含	脚基部完存	
505	4-6	C-8	SD13	弥生土器高杯	—	—	筒部径4.0	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：黄灰(2.5Y6/1) 内：灰白(2.5Y7/1)	2mm以下の砂粒・雲母含	筒部完存	摩滅のため調整不明確。
506	4-7	C-8	SD13	弥生土器高杯	—	—	筒部径4.6	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：灰白(10YR8/2) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	2.5mmの砂粒含	筒部6/12残	赤彩が残る。
507	12-1	C-8	SD13	弥生土器高杯	—	—	筒部径4.8	—	にぶい橙(7.5YR7/4)	3mmの小石含	筒部6/12残	
508	12-2	C-8	SD13	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.0	外面ヘラミガキ、内面未調整	浅黄橙(10YR8/4)	3mmの小石含	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
509	12-3	C-8	SD13	弥生土器高杯	—	—	脚基部4.2	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/3)	精良	脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文3段。
510	12-5	C-8	SD13	弥生土器高杯	—	—	脚部径8.4	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	浅黄橙(7.5YR8/3)	6mmの小石含	脚部下半完存	凹線6条＋半裁竹管文5段。外面に赤彩。
511	5-2	C-8	SD13	陶器甕	30.2	—	—	ロクロナデ	外：黄褐(2.5Y5/3) 内：褐(10YR4/4)	2mm以下の砂粒含・雲母多含	口縁部1/12残	
512	6-6	C-8	SD13	剥片	長1.9	厚0.7	重4.9g	—	灰(N4/)	サヌカイト	完形	ＲＦ
513	20-2	D-9	SD10	弥生土器壺	—	—	頸部径8.9	内面ナデ？	浅黄橙(10YR8/3)	4mmの小石含	頸部完存	摩滅のため調整不明確。
514	26-3	D-9	SD10	弥生土器壺	16.0	—	—	ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	3mm以下の砂粒含	口縁部完存	口縁部端部外面に刺突列点文、頸部に（突帯＋刻目）。口縁部内外面を赤彩。
515	21-6	D-9	SD10	弥生土器壺	16.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	2mmの砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に竹管文2段。
516	25-3	D-9	SD10	弥生土器壺	28.4	—	—	ナデ？	浅黄橙(10YR8/4)	2mmの砂粒若干含	口縁部1/12残	口縁部外面に波状文＋刺突列点文、口縁部内面に横線。摩滅のため調整不明確。
517	19-4	D-9	SD10	弥生土器壺	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	2mm以下の砂粒含	体部小片	体部に刺突文＋横線文。
518	23-3	D-8	SD10	弥生土器壺	14.0	—	—	—	灰白(2.5Y8/2)	3mm以下の砂粒含	口縁部11/12残	摩滅のため調整不明。
519	22-4	D-9	SD10 №3	弥生土器壺	9.0	10.8	底径5.0	—	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：黒(7.5YR2/1)	3mmの小石多含	口縁部4/12残、底部完存	摩滅・剥離のため調整・器形不明。
520	21-1	D-9	SD10	弥生土器壺	13.6	—	—	頸部外面下端ハケメ、他はナデ	灰白(2.5Y8/2)	1mmの砂粒・雲母若干含	口縁部8/12残	
521	26-5	D-9	SD10 №51	弥生土器壺	10.0	—	—	外面一部ハケメ、内面未調整	橙(2.5YR6/8)	3mmの砂粒含	口縁部4/12残	剥離・摩滅のため調整不明確。
522	21-4	D-9	SD10	弥生土器壺	—	—	頸部径8.8	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：橙(5YR7/8) 内：灰白(10YR8/2)	細砂粒・雲母含	体部上半3/12残	体部に連弧文。
523	150-1	D-8	SD10 №18	弥生土器壺	—	—	底径5.0	—	外：橙(7.5YR7/6) 内：にぶい黄橙（10YR7/4）	2mmの砂粒・雲母含	体部下半ほぼ完存	剥離・摩滅のため調整・器壁厚不明。
524	19-6	D-9	SD10	弥生土器壺	—	—	底径4.6	ハケメ	灰白(2.5Y8/2)	3mm以下の砂粒含	底部完存	底部外面一部黒斑。
525	21-5	D-9	SD10	弥生土器壺	—	—	底径5.1	ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：灰褐(7.5YR5/2)	2mmの砂粒・雲母含	底部7/12残	
526	24-2	D-8	SD10	弥生土器壺	—	—	底径5.2	未調整	浅黄橙(7.5YR8/3)	1mmの砂粒多含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
527	24-5	D-9	SD10 №52	弥生土器壺	—	—	底径3.6	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：黒(10YR7/3)	1mmの砂粒・雲母含	底部完存	
528	22-3	D-9	SD10	弥生土器甕	15.0	—	—	外面ハケメ、内面ハケメか工具ナデ	灰褐(7.5YR6/2)	1mmの砂粒多含	口縁部2/12残	摩滅・剥離が激しく調整・器形不明確。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
529	21-3	D-9	SD10	弥生土器 甕	16.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	黄灰(2.5Y7/2)	1.5mmの砂粒含	口縁部1/12残	口縁部外面に刻目？。摩滅のため文様不明確。
530	21-2	D-9	SD10	弥生土器 甕	15.2	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄(2.5Y7/3) 内：暗灰(N3/)	4mmの砂粒・雲母含	口縁部2/12残	
531	20-4	D-9	SD10	弥生土器 甕	16.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：浅黄(2.5Y7/3)	2mmの砂粒・雲母含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文？。摩滅のため文様不明確。
532	19-5	D-9	SD10	弥生土器 甕	—	—	底径6.2	外面ハケメ、内面ナデ	外：黒(2.5Y2/1) 内：浅黄橙(10YR8/3)	精良	底部3/12残	底部外面黒斑。
533	24-3	D-9	SD10	弥生土器 甕	—	—	底径5.8	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)	2mm以下の砂粒含	底部2/12残	
534	19-2	D-9	SD10	弥生土器 甕	17.0	—	—	ハケメ	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：灰白(2.5Y7/1)	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。
535	19-3	D-9	SD10	弥生土器 甕	17.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ？	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅により調整不明確。
536	24-8	D-9	SD10	弥生土器 甕	19.0	—	—	外面ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/3)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。摩滅のため文様・調整不明確。
537	23-1	D-9	SD10	弥生土器 甕	21.0	—	—	体部上端部にハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：灰(5Y6/1)	2mmの砂粒多含	口縁部7/12残	摩滅のため調整・器壁厚不明確。
538	20-3	D-9	SD10	弥生土器 甕	16.5	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰白(2.5Y7/1)	0.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
539	22-2	D-9	SD10	弥生土器 甕	—	—	脚径8.4	外面ハケメ、内面未調整	灰白(10YR8/2)	2mmの砂粒多含	脚部10/12残	摩滅のため調整不明確。
540	24-7	D-9	SD10	弥生土器 甕	13.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10R7/2) 内：明褐色(7.5YR7/2)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/12残	口縁部外面に刻目。体部上半に波状沈線。
541	26-4	D-9	SD10 №50	弥生土器 甕	—	—	脚基部6.1	外面ハケメ、内面ナデ	外：黒褐(10YR3/1) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm以下の砂粒若干含	脚基部6/12残	
542	25-1	D-9	SD10	土師器 甕	14.6	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：にぶい赤褐(5YR5/3)	5mm以下の砂粒含	口縁部1/12残	
543	24-4	D-9	SD10	土師器 甕	—	—	脚径11.0	未調整	橙(7.5YR7/6)	5mm以下の砂粒含	脚部2/12残	
544	27-1	D-8	SD10	土師器 甕	16.0	32.3	脚径8.8	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR6/4) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	5mm以下の小石含	口縁部5/12残、脚部完存	
545	24-6	D-9	SD10 №53	弥生土器 有孔鉢	—	—	底径3.6	ナデ	外：赤橙(10R6/6) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	精良	底部6/12残	孔径0.5cm。
546	24-1	D-8	SD10	弥生土器 有孔鉢	—	—	底径4.2	外面未調整、内面ナデ	暗灰(N3/)	精良	底部6/12残	孔径0.7cm。底部黒斑。
547	25-2	D-9	SD10	弥生土器 高杯	21.7	—	—	ヘラミガキ	外：明赤褐(2.5YR5/6) 内：黒(5YR1.7/2)	白色微砂・雲母含	口縁部1/12残	内面黒斑。
548	19-1	D-9	SD10	弥生土器 高杯	24.6	—	—	外面ヘラミガキ？	橙(2.5YR6/6)	2mm以下の砂粒含	口縁部3/12残、杯底部完存	摩滅のため調整不明確。
549	26-1	D-8	SD10	弥生土器 高杯	—	—	脚径7.0	外面ヘラミガキ、内面ナデ	にぶい黄橙(10R7/3)	2mm以下の砂粒含	脚部9/12残	透孔3方。脚基部に横線文＋刺突文。摩滅のため調整不明確。
550	20-5	D-9	SD10	弥生土器 高杯	—	—	脚径9.0	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：にぶい橙(5YR6/4) 内：にぶい褐(7.5YR5/4)	2.5mm以下の砂粒・雲母含	脚部完存	
551	22-1	D-8	SD10	弥生土器 高杯	—	—	脚径9.2	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	灰黄(2.5Y7/2)	精良	脚部8/12残	透孔3方。脚基部に横線文。
552	26-2	D-9	SD10	弥生土器 高杯	—	—	脚径10.4	—	外：橙(5YR7/6) 内：橙(7.5YR7/6)	2mmの砂粒若干含	脚部ほぼ完存	摩滅のため調整・器壁厚不明。
553	25-4	D-8	SD10	土師器 高杯	—	—	—	ナデ？	外：橙(2.5YR6/8) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)	1mmの砂粒含	杯底部3/12残	摩滅のため調整不明確。
554	25-5	D-8	SD10	土師器 高杯	—	—	脚基部2.5	ナデ	赤橙(10R6/6)	2mm以下の砂粒含	脚基部完存	摩滅のため調整不明確。
555	20-1	D-9	SD10	土師器 高杯	—	—	脚径11.3	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの砂粒多含	脚部ほぼ完存	摩滅のため調整不明確。
556	23-2	D-8	SD10	須恵器 擂鉢	—	—	—	ロクロナデ	灰白(N7/)	0.3mm以下の砂粒含	体部3/12残	体部に凹線1条。
557	25-6	D-9	SD10	土製品 土錘	3.5	3.3	重38g	ナデ	褐灰(10YR6/1)	2mm以下の砂粒含	完形	孔径0.8cm。
558	18-4	C-7	SZ11	弥生土器 壺	7.4	—	—	—	橙(5YR7/6)	微砂粒含	頸部3/12残	摩滅のため文様・調整・器壁厚不明。
559	18-5	C-7	SZ11	弥生土器 壺	—	—	体部径14.0	内面未調整	橙(7.5YR7/6)	5mmの砂粒含	体部2/12残	摩滅のため調整・器壁厚不明確。
560	18-6	C-7	SZ11	弥生土器 壺	—	—	底径5.0	—	橙(7.5YR7/6)	微砂粒含	底部6/12残	摩滅のため調整不明。
561	17-4	C-7	SZ11	弥生土器 壺	—	—	底径3.0	ナデ？	浅黄橙(10YR8/3)	微砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
562	17-6	C-7	SZ11	弥生土器 壺	—	—	底径5.0	外面ハケメ、内面ナデ	外：褐灰(10YR6/1) 内：黄灰(2.5Y6/1)	1mmの砂粒含	底部11/12残	摩滅のため調整不明確。
563	17-2	C-7	SZ11	弥生土器 壺	—	—	底径4.0	ナデ？	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰(7.5Y4/1)	微砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
564	17-8	C-7	SZ11	弥生土器 壺	—	—	底径7.5	ナデ？	灰白(2.5Y8/2)	2mmの砂粒含	底部3/12残	摩滅のため調整不明確。
565	17-5	C-7	SZ11	弥生土器 壺	—	—	底径3.0	ナデ？	橙(7.5YR7/6)	精良	底部完存	摩滅のため調整不明確。
566	17-3	C-7	SZ11	弥生土器 壺	—	—	底径5.0	ナデ	灰白(10YR8/2)	4mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
567	18-1	C-7	SZ11	弥生土器 甕	14.5	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	微砂粒含	口縁部3/12残	口縁部外面に刻目。
568	18-2	C-7	SZ11	弥生土器 甕	15.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白(10YR8/2)	微砂粒含	口縁部3/12残	口縁部外面に刺突列点文。
569	18-3	C-7	SZ11	弥生土器 甕	15.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白(10YR8/2)	微砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。
570	17-7	C-7	SZ11	弥生土器 甕	—	—	脚基部5.4	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒含	脚基部完存	
571	14-2	C-7	SZ11	弥生土器 甕	11.2	17.0	脚部径4.8	ハケメ	外：にぶい橙(5YR6/4) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒・雲母多含	口縁部2/12残、脚部完存	摩滅のため調整不明確。
572	17-9	C-7	SZ11	弥生土器 鉢	16.0	—	—	ナデ？	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：灰黄褐(10YR6/2)	2mmの砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
573	14-1	C-7	SZ11	弥生土器高杯	20.5	18.0	脚部径10.9	脚部内面工具ナデ、他はヘラミガキ	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：黒褐(7.5YR3/2)	微砂粒・雲母含	口縁部小片、脚部ほぼ完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
574	16-2	C-7	SZ11	弥生土器高杯	19.0	16.0	脚部径9.2	—	明赤褐(2.5YR5/6)	精良	口縁部1/12残、脚部完存	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明。
575	16-1	C-7	SZ11	弥生土器高杯	20.0	16.3	脚部径9.2	外面ヘラミガキ	明赤褐(2.5YR5/6)	精良	口縁部3/12残	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明確。
576	13-1	C-7	SZ11	弥生土器高杯	24.0	19.3	脚部径10.2	脚部内面ハケメ、他はヘラミガキ	浅黄橙(10YR8/4)	微砂粒・雲母若干含	口縁部小片、脚部9/12残	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
577	17-1	C-7	SZ11	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.9	杯部外面ハケメ、他はヘラミガキ	浅黄橙(7.5YR8/3)	微砂粒含	脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。
578	13-2	C-7	SZ11	弥生土器高杯	18.3	—	—	—	外：橙(5YR6/8) 内：明赤褐(2.5YR5/8)	0.4mmの小石含	口縁部4/12残	摩滅のため調整・器壁厚不明。
579	15-2	C-7	SZ11	弥生土器高杯	—	—	—	外面ヘラミガキ	橙(7.5YR6/6)	精良	杯部下半完存	摩滅のため調整不明確。
580	15-1	C-7	SZ11	弥生土器高杯	—	—	脚部径11.8	外面ヘラミガキ	浅黄橙(7.5YR8/4)	微砂粒・雲母含	脚部9/12残	透孔3方。摩滅のため調整・器壁厚不明確。
581	34-7	C-8	SK9	弥生土器蓋	—	—	把手径4.6	外面ハケメ？、内面ナデ？	灰黄(2.5Y7/2)	2mmの砂粒若干含	把手部完存	台付甕の脚部を転用？。天井部にφ0.5cmの穿孔。摩滅のため調整不明確。
582	40-3	C-9	SK9	弥生土器壺	25.0	—	—	—	浅黄橙(10YR8/4)	0.5mmの砂粒若干含	口縁部2/12残	口縁端部内面に羽状刻目、外面に凹線。摩滅のため調整不明確。
583	39-5	C-9	SK9	弥生土器壺	11.3	—	—	—	橙(7.5YR7/6)	7mm以下の砂粒・雲母含	口縁部完存	口縁端部外面に刻目、頸部に（突帯＋刻目）。剥離のため文様・調整不明確。
584	60-1	C-8	SK9	弥生土器壺	15.3	—	—	外面ハケメ	にぶい橙(5YR7/4)	2mmの砂粒含	口縁部10/12残	口縁端部外面に刺突文。摩滅のため調整不明確。
585	46-4	D-9	SK9	弥生土器壺	14.8	—	—	ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3)	2mmの砂粒若干含	口縁部4/12残	口縁端部外面に刺突列点文＋刻目。
586	52-3	C-9	SK9	弥生土器壺	15.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：浅黄橙（10YR8/3) 内：灰白(2.5Y8/2)	2mmの砂粒含	口縁部3/12残	口縁端部外面に列点文？。摩滅のため文様・調整不明確。
587	32-1	D-8	SK9	弥生土器壺	17.6	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	灰白(2.5Y8/2)	2mm以下の砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
588	51-4	C-10	SK9	弥生土器壺	14.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	橙（7.5YR7/6)	0.5mmの砂粒含	口縁部1/12残、頸部2/12残	摩滅のため調整不明確。
589	61-1	C-8	SK9	弥生土器壺	14.0	—	底径7.0	—	浅黄橙(10YR8/3)	4mmの砂粒多含	口縁部9/12残	剥離・摩滅のため調整不明。
590	33-3	C-8	SK9	弥生土器壺	15.7	—	—	ヨコナデ	浅黄橙(10YR8/3)	3mmの小石含	口縁部1/12残	頸部に（突帯＋刻目）。
591	53-2	C-7	SK9 №14	弥生土器壺	16.3	—	—	外面ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	白色微砂若干含	口縁部完存	口縁部外面に刻目。剥離・摩滅のため調整不明確。
592	62-3	C-8	SK9	弥生土器壺	18.6	—	—	外面ハケメ	灰白（10YR8/2)	4mm以下の砂粒含	口縁部11/12残	摩滅のため調整不明確。
593	46-5	D-9	SK9	弥生土器壺	15.0	—	—	—	外：にぶい橙（7.5YR7/3) 内：浅黄橙(10YR8/3)	1mmの砂粒若干含	口縁部6/12残	頸部に横線文。剥離・摩滅のため調整不明。
594	55-1	C-7	SK9	弥生土器壺	—	—	頸部径13.5	内面ハケメ	灰白(2.5Y7/1)	1mmの砂粒含	体部上半2/12残	体部に横線文3段＋波状文2段＋刻目。文様のため外面調整不明。
595	56-1	C-7	SK9	弥生土器壺	—	—	頸部径12.5	—	灰黄(2.5Y7/2)	2mmの砂粒多含	体部上半2/12残	体部に横線文3段＋波状文3段。文様・剥離のため調整不明。
596	32-2	D-8	SK9	弥生土器壺	—	—	頸基部9.0	内面ナデ	外：橙(7.5YR6/6) 内：浅黄(2.5Y7/3)	3mmの砂粒含	頸基部3/12残	体部に（突帯＋刻目）＋横線文＋羽状刻目＋山形文。摩滅のため文様・調整不明確。
597	44-4	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	頸部径8.4	内面ナデ	外：灰白2.5Y7/1) 内：黄灰(2.5YR6/1)	2mmの砂粒多含	頸部3/12残	体部に沈線＋波状文。文様・摩滅のため調整不明確。
598	33-4	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	頸部径10.0	外面ハケメ、内面ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	3mmの小石多含	頸部2/12残	頸部に刺突列点文＋横線文。
599	45-4	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	—	ナデ	外：浅黄橙（10YR8/3) 内：灰白(N5/)	0.5mmの微砂若干含	体部小片	体部に突帯2条。摩滅のため調整不明確。
600	29-1	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ？	浅黄(2.5Y7/3)	1mm以下の砂粒・雲母含	体部小片	体部外面に横線文＋波状文2段以上。摩滅のため調整不明確。
601	44-3	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	—	外面ナデ、内面未調整	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの砂粒若干含	体部小片	頸部に斜行線文。
602	44-2	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：灰褐(7.5YR6/2) 内：褐灰(10YR5/1)	微小雲母含	体部小片	体部に横線文＋刺突列点文。
603	30-1	D-9	SK9 №6	弥生土器壺	8.6	—	—	口縁部内面ハケメ、他はナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	4mmの小石・雲母含	口縁部6/12残	摩滅のため調整不明確。
604	33-6	C-8	SK9	弥生土器壺	9.9	—	—	ナデ？	橙(5YR6/8)	2mmの砂粒含	口縁部8/12残	摩滅のため調整不明確。
605	52-5	C-9	SK9	土師器壺	18.6	—	—	—	外：橙（7.5YR7/6) 内：黄橙(10YR8/6)	3mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明。
606	42-1	C-8	SK9 №8	弥生土器壺	—	—	底径7.1	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	灰白(10YR8/2)	5mmの砂粒含	底部～体部完存	
607	41-1	C-7	SK9 №12	弥生土器壺	—	—	底径7.0	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：灰黄褐(10YR6/2) 内：暗灰(N3/)	2mm以下の砂粒含	底部完存、体部5/12残	
608	63-1	C-8	SK9 №9	弥生土器壺	—	—	底径10.4	一部ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	5mmの小石含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
609	37-2	C-10	SK9	弥生土器壺	—	—	頸部径9.0	—	外：橙(7.5YR7/6) 内：にぶい黄橙(10YR7/2)	精良	頸部3/12残	摩滅のため文様・調整不明。
610	37-3	C-10	SK9	弥生土器壺	—	—	底径4.7	—	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：灰黄(2.5Y7/2)	2mmの砂粒若干含	底部完存	摩滅のため調整不明。
611	49-1	C-9	SK9	弥生土器壺	—	—	—	外面ヘラミガキ、内面ハケメ＋ナデ	外：灰白（10YR8/2) 内：にぶい褐(7.5YR5/4)	2mmの砂粒含	体部上半完存	摩滅のため調整不明確。
612	49-2	C-9	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.3	外面ヘラミガキ、内面ハケメ＋ナデ	外：にぶい黄橙（10YR7/2) 内：灰黄(2.5Y7/2)	2mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
613	58-4	D-8	SK9	土師器壺	—	—	頸部径5.8	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	精良	頸部完存	
614	57-2	C-8 №5	SK9	弥生土器壺	—	—	脚基部2.5	—	外：橙（7.5Y7/6) 内：明黄褐(10YR7/6)	2mmの砂粒若干含	脚基部完存	透孔三方。摩滅のため調整・器壁厚不明。
615	34-5	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径4.1	外面ヘラミガキ、内面工具ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	精良	底部完存	摩滅のため調整不明確。
616	43-3	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径4.9	ナデ？	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：黄灰(2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
617	28-2	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径4.0	—	浅黄橙(7.5Y8/6)	4mm以下の小石・雲母含	底部完存	剥離のため調整不明。
618	47-2	D-9	SK9	弥生土器壺	—	—	底径4.2	外面ナデ、内面未調整	橙 (5YR6/6)	精良	底部完存	
619	43-2	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.6	—	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：浅黄橙(10YR8/3)	3mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明。
620	46-2	—	SK9	弥生土器壺	—	—	底径7.1	ナデ？	外：灰黄 (2.5Y7/2) 内：暗灰(N3/)	2mm以下の砂粒含	底部完存	
621	37-1	C-10	SK9	弥生土器壺	—	—	底径8.4	ハケメ	外：黄灰(2.5Y6/1) 内：灰(5Y6/1)	2mmの砂粒・雲母多含	底部6/12残	
622	34-1	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.8	ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	2mmの砂粒・雲母含	底部6/12残	摩滅のため調整不明確。
623	35-4	C-7	SK9	弥生土器壺	—	—	底径6.8	外面ナデ?、内面ハケメ	外：灰白(2.5Y8/1) 内：淡黄(2.5Y8/3)	3mmの砂粒含	底部完存	剥離のため外面調整不明確。
624	51-2	C-9	SK9	弥生土器壺	—	—	底径7.0	ナデ？	外：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	1.5mmの砂粒若干含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
625	31-3	D-9	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.8	外面ナデ、内面ハケメ	外：灰(N4/) 内：灰白(2.5Y8/2)	0.5mmの砂粒若干含	底部2/12残	
626	39-4	C-9	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.2	ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(10YR8/4)	0.5mmの砂粒・雲母含	底部完存	
627	51-1	C-9	SK9	弥生土器壺	—	—	底径4.3	外面ヘラミガキ、内面ハケメ	外：橙 (7.5YR6/6) 内：暗灰(N3/)	微砂粒・雲母若干含	底部7/12残	
628	39-3	C-9	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.0	ナデ	外：橙(5YR7/6) 内：黄灰(2.5Y5/1)	1～3.5mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
629	34-2	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径7.3	ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：灰黄褐(10YR4/2)	5mmの小石多含	底部ほぼ完存	内面に炭化物付着。摩滅のため調整不明確。
630	31-2	D-9	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.3	外面ナデ、内面ハケメ	外：にぶい赤褐(5YR5/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	2.5mmの砂粒含	底部7/12残	
631	38-2	C-10	SK9	弥生土器壺	—	—	底径4.0	外面ヘラミガキ、内面ナデ？	外：褐灰(10YR6/1) 内：灰(10YR5/1)	2mm以下の砂粒多含	底部8/12残	摩滅のため調整不明確。
632	43-5	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径4.4	ハケメ	浅黄橙(7.5YR8/3)	2mmの砂粒若干含	底部7/12残	
633	35-2	C-7	SK9	弥生土器壺	—	—	底径7.1	ナデ？	外：にぶい黄褐(10YR5/4) 内：橙(7.5YR7/6)	1mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
634	43-4	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.7	外面ヘラミガキ、内面工具ナデ	外：明褐灰(5YR7/2) 内：灰白(2.5Y8/1)	2mmの砂粒若干含	底部4/12残	
635	35-3	C-7	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.8	ナデ？	外：灰白(2.5Y8/2) 内：灰(N4/)	3mmの砂粒含	底部5/12残	摩滅のため調整不明確。
636	31-6	D-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径4.0	ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	3～5mmの小石多含、雲母含	底部完存	
637	38-1	C-10	SK9	弥生土器壺	—	—	底径6.0	外面ハケメ、内面ナデ	外：灰白(10YR8/2) 内：灰(N4/)	3mmの砂粒若干含	底部7/12残	摩滅のため調整不明確。
638	34-3	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.3	ハケメ	外：青灰(2.5Y8/5) 内：灰白(2.5Y8/1)	雲母若干含	底部ほぼ完存	
639	34-4	C-8	SK9	弥生土器壺	—	—	底径3.7	ハケメ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：黄灰(2.5Y4/1)	2mmの砂粒含	底部3/12残	
640	46-1	D-9	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.1	外面ヘラケズリ、内面ナデ	外：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内：灰白(2.5Y7/1)	2mm以下の砂粒含	底部完存	
641	35-1	C-7	SK9	弥生土器壺	—	—	底径5.3	内面ナデ？	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	0.5mmの砂粒含	底部10/12残	摩滅のため調整不明確。
642	54-1	C-7	SK9	弥生土器壺	—	—	底径3.8	外面ナデ、内面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)	0.5mmの砂粒含	底部完存	摩滅のため調整不明確。
643	30-4	B-7	SK9	弥生土器壺	—	—	底径9.6	外面ナデ、内面工具ナデ	外：灰黄褐(10YR5/2) 内：黒(N2/)	4mmの小石多含	底部3/12残	摩滅のため調整不明確。
644	30-3	B-7	SK9	弥生土器甕	16.0	—	—	外面ナデ、内面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	口縁端部外面に刺突列点文。外面に煤付着。
645	36-1	C-7	SK9	弥生土器甕	19.6	—	—	外面ナデ、内面ハケメ	外：褐灰(10YR5/1) 内：灰白(10YR8/2)	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	口縁部外面に刺突列点文。
646	37-4	C-10	SK9	弥生土器甕	19.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR8/4)	3mmの砂粒・雲母含	口縁部2/12残	口縁部外面に押引文。
647	37-6	C-10	SK9	弥生土器甕	18.2	—	—	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの砂粒多含	口縁部2/12残	
648	45-1	C-8	SK9	弥生土器甕	24.0	—	—	ハケメ？	外：灰黄 (2.5Y7/2) 内：灰白(10YR8/1)	2mmの砂粒・雲母多含	口縁部1/12残	口縁端部外面に刺突列点文。
649	33-5	C-8	SK9	弥生土器甕	13.7	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白(2.5Y8/2)	精良	口縁部1/12残	口縁部外面に刻目。
650	51-5	C-10	SK9	弥生土器甕	18.0	—	—	ハケメ	浅黄橙 (10YR8/4)	3mmの砂粒多含	口縁部2/12残	
651	45-2	C-7	SK9	弥生土器甕	16.4	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰白(2.5Y8/2)	精良	口縁部1/12残	
652	37-5	C-10	SK9	弥生土器甕	19.8	—	—	ハケメ	灰白(10YR7/1)	1mmの砂粒多含	口縁部2/12残	
653	31-1	D-8	SK9	弥生土器甕	—	—	脚径10.1	外面ハケメ、内面ナデ	外：灰白(10YR8/2) 内：灰白(2.5Y8/2)	2.5mmの砂粒・雲母多含	脚部2/12残、脚基部完存	摩滅のため調整不明確。
654	46-7	D-9	SK9	弥生土器甕	—	—	脚径7.0	外面ハケメ、内面未調整	外：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内：にぶい黄橙 (10YR6/3)	3mm以下の砂粒若干含	脚部完存	
655	29-3	D-9	SK9	弥生土器甕	—	—	脚径13.0	外面ハケメ、内面ナデ	外：橙(5YR7/6) 内：褐灰(10YR4/1)	2mm以下の砂粒・雲母多含	脚部2/12残	
656	34-8	C-8	SK9	弥生土器甕	—	—	脚径5.1	外面ナデ、内面工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mmの小石含	脚部1/12残、脚基部完存	摩滅のため調整不明確。
657	44-5	C-8	SK9	弥生土器甕	17.4	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい橙 (5YR7/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/12残、頸部2/12残	
658	54-2	C-7	SK9	弥生土器甕	16.7	—	—	外面ハケメ	浅黄橙(10YR8/3)	1mmの砂粒多含	頸部3/12残	摩滅のため調整・器壁厚不明確。
659	32-4	D-9	SK9	弥生土器甕	16.4	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	2.5mmの砂粒含	口縁部6/12残	摩滅のため調整不明確。
660	28-4	C-8	SK9	土師器甕	15.0	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mmの小石・雲母含	口縁部3/12残	摩滅のため調整不明確。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
661	46-3	D-9	SK9	土師器甕	11.4	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	2mm以下の砂粒含	口縁部6/12残	摩滅のため調整不明確。
662	40-2	C-9	SK9	土師器甕	16.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい褐(7.5YR5/4) 内：橙(7.5YR6/6)	3mm以下の砂粒含	口縁部4/12残	
663	28-5	C-8	SK9	土師器甕	16.4	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	2mm以下の砂粒・雲母含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
664	33-2	C-8	SK9	土師器甕	14.9	—	—	外面ハケメ	にぶい褐(7.5YR5/4)	2mmの小石含	口縁部4/12残	摩滅のため調整不明確。
665	52-4	C-9	SK9	土師器甕	16.7	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	明褐（7.5YR5/6）	4mm以下の小石多含	口縁部2/12残	
666	33-1	C-8	SK9	土師器甕	14.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	橙(7.5YR6/6)	3mmの小石含	口縁部1/12残	
667	52-2	C-9	SK9	土師器甕	17.2	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：橙（7.5YR7/6） 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	5mmの小石含	口縁部3/12残	摩滅のため調整不明確。
668	52-1	C-9	SK9	土師器甕	18.0	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	外：浅黄（2.5Y7/3） 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
669	59-1	D-9	SK9 №2	土師器甕	17.4	31.6	脚径10.1	外面ハケメ、内面工具ナデ	にぶい橙（7.5YR7/3）	5mmの小石含	口縁部3/12残、体部8/12残	
670	46-6	D-9	SK9	土師器甕	18.0	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい橙（7.5YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）	2mmの砂粒多含	口縁部1/12残	
671	47-1	D-9	SK9	土師器甕	—	—	脚径8.6	外面未調整、内面ナデ	明赤褐（2.5YR5/6）	4mmの小石含	脚部完存	
672	40-1	C-9	SK9	土師器甕	—	—	脚径8.2	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	2～3.5mmの砂粒・雲母含	脚部完存	摩滅のため調整不明確。
673	34-6	C-8	SK9	土師器甕	—	—	脚径10.9	外面ハケメ？、内面ナデ？	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：褐灰(10YR6/1)	5mmの小石含	脚部2/12残、脚基部完存	摩滅のため調整不明確。
674	33-7	C-8	SK9	弥生土器甕	21.4	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	灰黄（2.5Y7/2）	2mmの砂粒多含	口縁部1/12残	口縁端部に刻目。剥離・摩滅のため刻目不明確。
675	38-3	C-10	SK9	弥生土器甕	—	—	底径3.1	外面ハケメ？、内面ナデ？	外：灰黄褐(10YR5/2) 内：褐灰(10YR4/1)	2mm以下の砂粒多含	底部9/12残	摩滅のため調整不明確。
676	62-1	D-9	SK9	弥生土器甕	10.6	11.4	底径4.4	外面タタキ、内面工具ナデ？	外：褐灰（7.5YR6/1） 内：黄灰(2.5Y4/1)	3mm以下の砂粒多含	口縁部1/12残、底部完存	
677	29-2	D-8	SK9	土師器甕	24.0	—	—	ハケメ？	灰黄(2.5Y7/2)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
678	39-6	C-9	SK9	土師器甕	12.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：明赤褐(5YR5/6) 内：橙(7.5YR6/6)	微砂粒・雲母若干含	口縁部1/12、頸部2/12残	
679	36-2	C-7	SK9	土師器甕	13.7	—	—	内面ナデ、一部未調整	外：灰褐(1.5YR5/2) 内：にぶい黄褐(10YR6/3)	3mmの砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。
680	49-3	C-9	SK9	土師器甕	18.2	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	2mmの砂粒含	口縁部4/12残	摩滅のため調整不明確。
681	48-1	C-9	SK9	土師器甕	19.0	—	—	外面ハケメ	外：淡黄（2.5Y8/2） 内：黄灰(2.5Y6/1)	4mm以下の砂粒多含	口縁部3/12残	摩滅により調整・器壁厚不明確。
682	44-6	C-7	SK9	土師器甕	15.8	—	—	内面ヘラケズリ	にぶい橙（7.5YR7/4）	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	外面に煤付着。煤のため外面調整不明。
683	51-3	C-10	SK9	土師器甕	14.8	—	—	ヨコナデ	外：にぶい黄橙（10YR6/4） 内：浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	口縁端部外面に刻目。摩滅のため文様・調整不明確。
684	48-4	C-10	SK9	土師器甕	11.0	—	—	外面ハケメ、ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	3mm以下の砂粒含	口縁部2/12残	
685	58-3	C-8	SK9	土師器甕	—	—	頸部径10.9	ハケメ	明黄褐(10YR6/6)	白色微砂若干含	体部3/12残	外面に炭化物付着。摩滅のため調整不明確。
686	64-1	D-9	SK9 №1	土師器甕	17.3	27.5	—	外面ハケメ、内面簡単なナデ	外：にぶい黄褐(10YR5/3) 内：にぶい黄褐(10YR5/4)	2mmの砂粒多含	口縁部10/12残	外面に煤付着。
687	52-6	C-9	SK9	土師器甕	33.5	—	—	—	浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒若干含	口縁部1/12残	口縁部に片口。摩滅のため調整不明。
688	48-2	C-10	SK9	弥生土器鉢	8.4	7.6	底径4.4	外面ハケメ後ナデかヘラミガキ、内面ナデ	外：にぶい橙（7.5YR7/4） 内：橙(5YR6/6)	精良	口縁部3/12残、底部完存	摩滅により調整不明確。
689	35-5	C-7	SK9	弥生土器有孔鉢	—	—	底径5.4	外面ハケメ、内面工具ナデ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	精良	底部完存	孔径1.6mm。
690	50-1	C-9	SK9	弥生土器手焙形土器	15.2	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：灰白（10YR8/2） 内：にぶい黄橙(10YR7/2)	1mmの砂粒含	口縁部3/12残	
691	57-1	C-8	SK9	弥生土器高杯	22.9	—	—	内面ヘラミガキ	外：にぶい橙（7.5YR6/4） 内：橙(7.5YR6/6)	2mmの砂粒含	口縁部6/12残	摩滅のため調整不明確。
692	50-2	C-10	SK9	弥生土器高杯	24.0	—	—	外面ヘラミガキ	にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため調整不明確。
693	48-3	C-10	SK9	弥生土器高杯	11.0	—	—	—	橙(7.5YR7/6)	雲母微粒子含	口縁部3/12残	摩滅により調整・器壁厚不明。
694	62-4	C-8	SK9	弥生土器高杯	—	—	脚径9.4	—	外：橙(7.5YR7/6) 内：明赤褐(5YR5/8)	3mmの砂粒若干含	脚部ほぼ完存	摩滅のため調整不明。
695	60-3	C-8	SK9 №11	弥生土器高杯	—	—	脚径12.0	—	浅黄橙（10YR8/3）	微砂粒含	脚部完存	脚基部に横線文。剥離・摩滅のため調整不明。
696	61-2	D-9	SK9	弥生土器高杯	—	—	脚径11.5	ヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒含	杯底部・脚基部完存	透孔3方。脚基部に横線文。
697	43-1	C-8	SK9	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.6	外面ヘラミガキ、内面未調整	浅黄橙(10YR8/3)	精良	脚基部8/12残	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
698	58-2	C-8	SK9	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.6	—	外：にぶい橙（7.5YR7/4） 内：浅黄橙(7.5YR8/6)	2mmの砂粒若干含	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明。
699	45-3	C-8	SK9 №10	弥生土器高杯	—	—	—	ヘラミガキ	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの砂粒若干含	脚基部ほぼ完存	透孔3方。脚基部に横線文。摩滅のため調整不明確。
700	47-4	D-9	SK9	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.8	外面ヘラミガキ、内面ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	2mm以下の砂粒含	脚基部完存	透孔3方。摩滅により調整・器壁厚不明確。
701	51-6	C-10	SK9	弥生土器高杯	17.8	—	—	ヘラミガキ	外：浅黄橙（7.5YR8/6） 内：明黄褐(10YR7/6)	2.5mmの小石含	口縁部1/12残、杯底部2/12残	摩滅のため調整不明確。
702	51-7	C-10	SK9	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.0	外面ヘラミガキ、内面未調整	外：浅黄橙（7.5YR8/6） 内：黄橙(10YR8/6)	2.5mmの小石含	脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明確。
703	58-1	C-8	SK9	弥生土器高杯	—	—	脚径10.3	—	橙(7.5YR7/6)	3mmの砂粒若干含	脚部2/12残、脚基部完存	透孔3方。摩滅のため調整不明。
704	53-3	C-7	SK9	弥生土器高杯	—	—	脚基部2.6	—	橙(7.5YR7/6)	3mmの砂粒含	脚基部完存	摩滅のため調整不明。

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
705	36-3	C-7	SK9	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.7	外面ハケメ？、脚部内面未調整	橙(5YR6/6)	1mmの砂粒若干含	脚基部10/12残	摩滅のため調整不明確。
706	31-7	D-8	SK9	弥生土器高杯	—	—	筒部径3.5	外面ヘラミガキ、内面ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	0.5mmの砂粒・雲母含	脚部完存	
707	47-5	D-9	SK9	土師器高杯	13.0	—	—	ナデ	橙（5YR6/8）	精良	口縁部1/12残	摩滅により調整・器壁厚不明確。
708	47-6	D-9	SK9	土師器高杯	—	—	脚基部2.2	外面ナデ、内面未調整	橙（5YR6/8）	3mm以上の砂粒含	脚基部完存	摩滅により調整・器壁厚不明確。
709	60-2	C-8	SK9 №15	土師器高杯	14.0	—	—	—	外：浅黄橙（10YR8/3） 内：灰(5Y4/1)	2mmの砂粒含	口縁部2/12残、脚基部完存	摩滅のため調整不明。
710	36-4	C-9	SK9	土師器高杯	—	—	脚径9.8	工具ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	1mmの砂粒多含	脚部11/12残	摩滅のため調整不明確。
711	43-6	C-8	SK9	須恵器蓋	12.6	—	—	ロクロナデ	灰(N6/1)	2mmの砂粒若干含	口縁部1/12残	
712	31-8	D-8	SK9	須恵器蓋	—	—	受部径14.4	天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰(N5/)	細砂粒若干含	受部1/12残	
713	39-1	C-9	SK9	須恵器杯	10.6	4.6	受部径12.6	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰(N6/)	2.5mmの砂粒含	口縁部4/12残	
714	62-2	D-9	SK9	須恵器杯	10.6	4.4	—	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：灰（N6/1） 内：灰(N5/)	4mm以下の小石含	口縁部9/12残	ロクロ右回転。
715	28-3	C-8	SK9	須恵器杯	11.6	3.9	受部径14.0	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰(N5/)	3mm以下の小石・雲母含	受部2/12残	ロクロ左回転。
716	47-3	D-9	SK9	須恵器杯	10.2	3.7	—	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰白（7.5Y7/1）	精良	口縁部3/12残	
717	39-2	C-9	SK9	須恵器杯	8.6	3.3	—	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰白(3.5Y7/1)	精良	口縁部3/12残	焼成不良。
718	39-7	C-9	SK9	須恵器壺	—	—	頸部径4.1	ロクロナデ	灰黄(2.5Y7/2)	1mmの砂粒若干含	頸部完存	焼成不良。
719	32-3	D-8	SK9	須恵器	—	—	頸基部6.4	外面カキメ、内面ロクロナデ	灰(N6/1)	1mmの砂粒含	頸基部2/12、体部6/12残	底部外面にヘラ記号。
720	32-5	D-9	SK9 №4	須恵器	9.0	11.8	—	体部外面カキメ、底部外面一部ヘラケズリ	灰白(N7/1)	2mm以下の砂粒含	体部完存	孔径1.3cm。
721	28-1	C-8	SK9	須恵器高杯	—	—	脚部径8.0	ロクロナデ	灰白(5Y8/1)	微砂粒・雲母片若干含	脚部5/12残	焼成不良。
722	53-1	C-7	SK9	須恵器高杯	—	—	脚径9.6	杯部外面ロクロケズリ、脚部外面カキメ	灰白(7.5Y7/1)	精良	脚部完存	透孔３方。
723	31-4	D-9	SK9	土製品鞴羽口	4.2	—	孔径1.6	未調整	外：橙(5YR6/6)・灰白(N7/) 内：にぶい橙(5YR6/4)	3mmの砂粒含	7/12残	
724	44-1	C-7	SK9	土製品鞴羽口	4.0	—	孔径1.9	未調整	灰白（5Y5/1）・にぶい黄橙(10YR7/4)	2mmの砂粒若干含	3/12残以下	炉側に溶解物付着。
725	31-5	D-9	SK9	土製品鞴羽口	5.6	—	孔径2.4	未調整	外：浅黄橙(7.5YR8/3)・灰(5Y6/1) 内：浅黄橙(7.5YR8/6)	3mmの砂粒含	5/12残	
726	30-2	C-8	SK9	土師器土錘	3.4	3.2	重29.0g	ナデ	黒(N2/)	0.3mmの砂粒若干含	完形	孔径0.8cm。全面黒斑。
727	33-8	C-7	SK9	土製品土錘	3.6	3.2	重32.9g	ナデ？	橙（5YR6/8）	5mmの砂粒含	完形	孔径0.7cm。
728	6-4	C-10	SK9	石製品砥石	長8.5	厚1.6	残存重59.1g	—	灰白(5Y8/2)	泥岩	一部欠損	
729	6-3	C-8	SK9	石製品石斧	—	—	残存重82.0g	—	灰白(7.5Y7/1)	泥岩	小片	
730	7-3	D-9	SK9	砥石	長5.5	厚3.3	重154.4g	—	灰白(10YR8/2)	チャート	完形	
731	6-1	D-8	SK9	石製品石包丁？	—	—	残存重24.9g	—	暗紫灰(5RP4/1)	安山岩	小片	
732	196-1	C-9	SK9	鉄製品刀子	刃幅1.7	刃厚0.45	残存長8.5	—	—	—	推定3/12残	
733	1-4	D-8包含層	—	弥生土器壺	18.0	—	—	外面ハケメ	外：橙(5YR6/8) 内：浅黄橙(10YR8/3)	精良	口縁部2/12残	口縁部外面に刻目。摩滅のため内面調整不明。
734	2-4	C-14撹乱坑	—	弥生土器壺	—	—	—	ハケメ	明赤褐(5YR5/6)	精良	体上部2/12残	体部に横線文5段＋刻目。
735	1-6	C-14撹乱坑	—	弥生土器壺	—	—	頸部径16.0	内面ナデ	明赤褐(5YR5/6)	2mm以下の砂粒含	頸部1/12残	頸部に横線文＋竹管文＋刻目。摩滅のため調整不明確。
736	1-5	C-14撹乱坑	—	弥生土器壺	—	—	頸部径9.0	外面一部ハケメ、内面未調整	灰黄(2.5Y7/2)	2mm以下の砂粒含	頸部2/12残	頸部に横線文＋波状文。摩滅のため調整不明確。
737	2-2	C-16撹乱坑	—	弥生土器壺	—	—	—	内面ナデ	外：灰白(7.5YR8/1) 内：灰白(10YR8/1)	精良	体部小片	外面に波状文2段。摩滅のため外面調整不明。
738	2-3	C-2	SK3	弥生土器甕	—	—	—	内面ナデ	外：黄灰(2.5Y6/1) 内：にぶい黄褐(10YR5/3)	2mm以下の砂粒含	体部小片	外面に横線文。摩滅のため調整不明確。
739	2-5	C-14撹乱坑	—	弥生土器高杯	—	—	脚基部3.5	—	浅黄橙(10YR8/3)	精良	脚基部6/12残	透孔4方。脚部に直線文＋刻目2段。文様・摩滅のため調整不明。
740	2-1	D-9包含層	—	土師器甕	16.8	—	—	外面ハケメ、内面ナデ？	明褐灰(7.5YR7/2)	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12残	摩滅のため内面調整不明確。
741	1-2	C-13撹乱坑	—	山茶椀椀	—	—	高台径9.2	ロクロナデ	灰白(5Y7/1)	2mm以下の砂粒含	底部1/12残	転用硯？
742	1-1	C-13包含層	—	山茶椀椀	—	—	高台径8.4	ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	精良	底部3/12残	底部外面に糸切痕。内面に自然釉が掛かるが底部は硯に転用か？。
743	1-3	C-14包含層	—	山茶椀椀	—	—	高台径5.4	ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	2mm以下の砂粒含	底部3/12残	底部外面に糸切痕。内面に自然釉が若干掛かるが底部は硯に転用か？
744	196-3	B-5	P１	鉄製品鎌	—	刃厚0.4	残存長5.25	—	—	—	小片	
745	196-2	B-5	P１	鉄製品釘	一辺0.3	長6.75	—	—	—	—	ほぼ完形	使用済

第１表　遺物観察表

Ⅴ．自然科学分析

林垣内遺跡（津市野田地内）は、半田丘陵北西端にあたり、岩田川に面した低地に立地する。今回の発掘調査では、弥生時代終末期と思われる幅２m、深さ１mの環濠の一部が検出されている（ＳＤ10・12）。遺構内からは、下位から弥生時代の土器が、上部では古墳時代の土器が検出されている。弥生時代終末期に構築され、ある程度埋積した後、弥生時代終末期の土器が多量に投棄されたため埋没し、一部残る窪みも古墳時代に埋没したと考えられている。今回は、環濠内の珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施し、当時の古環境に関する情報を得ることにする。

１　試　料

試料は、No. １～７の７点で、地層の上位から順に採取されている（第７図）。各試料の採取層準および岩質は、No.1 が現在の表土に相当する。粒団構造が発達する褐色土壌からなる。No. ２と No. ３は古墳時代の土器が出土する環濠充填堆積物上部に相当する。やや腐植を含む暗灰～暗褐色泥質砂からなる。No. ４と No. ５は弥生時代終末期の遺物を含む環濠充填堆積物下部に相当する。炭化物が多く混じる黒灰色泥質砂の薄層を挟在する、黒褐色～暗灰色を呈する砂質泥からなる。No. ６は環濠充填堆積物最下部層準に相当する。炭化物の葉理を挟在する灰色泥からなる。No. ７は環濠底の基盤をなす堆積物に相当する。暗褐色極細粒砂質泥からなる。

２　分析方法

（１）珪藻分析

試料を湿重で７g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（４時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600倍あるいは 1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）などを参照し、分類基準は Round et al.（1990）に、壊れた珪藻殻の計数基準は柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate dia-toms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。各種類の生態性は、Vos & de Wolf（1993）を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種は、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料は、産出率 2.0% 以上の種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成するほか、淡水生種の生態性も 100 個体以上の試料について図示する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種（貧塩性種）は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は渡辺ほか（2005）の環境指標種を参考とする。

（２）花粉分析

試料約10gを秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛, 比重 2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス（無水酢酸９，濃硫酸１の混合液）処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部をとり、グリセリンで封入してプレ

種　　類	生態性			環境							
試料番号	塩分	pH	流水	指標種	1	2	3	4	5	6	7
Bacillariophyta(珪藻植物門)											
Centric Diatoms(中心型珪藻類)											
Aulacoseira ambigua (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	–	–	–	1	–	3	–
Aulacoseira crassipunctata Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		33	2	2	1	–	1	–
Orthoseira roeseana (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	–	1	1	16	–
Orthoseira epidendron (Ehrenb.)H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	–	–	1	–	–
Stephanodiscus pseudosuzukii Tuji et Kociolek	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,T	1	1	–	–	–	–	–
Stephanodiscus suzukii Tuji et Kociolek	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,T	2	–	–	–	–	1	–
Araphid Pennate Diatoms(無縦溝羽状珪藻類)											
Fragilaria inflata (Heid.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	1	–	–	–	–	–
Staurosira construens Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	–	–	–	–	–	1	–
Staurosira construens var. *triundalata* (Reichelt)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph		–	1	–	–	–	–	–
Staurosira venter (Ehren.)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	–	–	–	–	–	1	–
Ulnaria ulna (Nitzsch)Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	1	–	–	–	–
Raphid Pennate Diatoms(有縦溝羽状珪藻類)											
Monoraphid Pennate Diatoms(単縦溝羽状珪藻類)											
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	1	2	–	–	–	–
Achnanthes inflata(Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	T	–	–	1	–	–	–	–
Lemnicola hungarica (Grunow)Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	3	–	–	–
Planothidium lanceolatum (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	–	–	–	60	20	23	–
Achnanthidium exiguum (Grunow)Czarnecki	Ogh-ind	al-il	ind	S	–	–	–	–	–	3	–
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh-Meh			C1	–	–	–	–	1	–	–
Cocconeis lineata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	1	–	–	–	–
Biraphid Pennate Diatoms(双縦溝羽状珪藻類)											
Amphora copulata (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	1	–	2	–
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	17	2	–	2	26	–	–
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	1	–	–	–
Cymbopleura naviculiformis (Auerswald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	–	–	–	–	1	–	–
Encyonema mesianum (Kholnoky)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	–	–	1	–
Encyonema silesiacum (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	–	–	–	–	1	–
Placoneis elginensis (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1	–	–	1	3	4	–
Placoneis elginensis var. *neglecta* (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	1	–	–	2	2	–
Placoneis placentula (Ehr.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	l-bi	T	–	–	–	–	–	1	–
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	–	–	2	31	20	10	–
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	ind	r-ph	T	–	–	–	–	–	1	–
Gomphonema grovei var. *lingulatum* (Hust.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	–	–	–	–	–	–
Gomphonema parvulum (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	–	1	–	11	7	4	–
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	–	–	–	–
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	1	–	–	–
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	–	–	1	–
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	–	–	–	–	–	–
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	3	–	1	–
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	5	2	5	–	6	–	–
Stauroneis obtusa var. *catarinensis* Krasske	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	1	–	–
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	–	–	–	–	–	1	–
Stauroneis phoenicenteron fo. *hattorii* Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	–	–	–	1	–	–	–
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	–	1	1	–	–	–	–
Stauroneis thermicola (Petersen)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	1	–	–	–
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	1	–
Frustulia saxonica Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P,O	–	–	–	–	–	1	–
Frustulia weinholdii Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	1	–
Diadesmis biceps Arnott ex Grunow in Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	12	3	5	3	16	23	–
Diadesmis brekkaensis (J.B.Petersen)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	–	–	1	–
Diadesmis confervacea Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	1	1	–	–	–	1	–
Diadesmis contenta (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	3	4	–	1	3	8	–
Luticola goeppertiana (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-hil	al-il	ind	S	–	–	1	–	1	–	–
Luticola cohnii (Hilse)D.G.Mann	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	–	–	2	–	–	1	–
Luticola minor (R.M.Patrick)Mayama	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–	1	1	2	–
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	23	18	38	23	24	24	–
Luticola paramutica (Bock)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RB	–	1	–	–	–	–	–
Luticola ventricosa (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	–	–	–	–	5	–	–
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	6	2	2	1	–	1	–
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		–	–	–	–	–	–	–
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	ac-bi	ind	RA,S	6	8	9	4	–	–	–
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	–	–	–	–	–	–
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	–	–	–	1	–	3	–
Caloneis minuta (Grunow)Ohtsuka et Fujita	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–	–	–	–	–
Caloneis molaris (Grun.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind		1	–	–	–	–	–	–
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	1	–

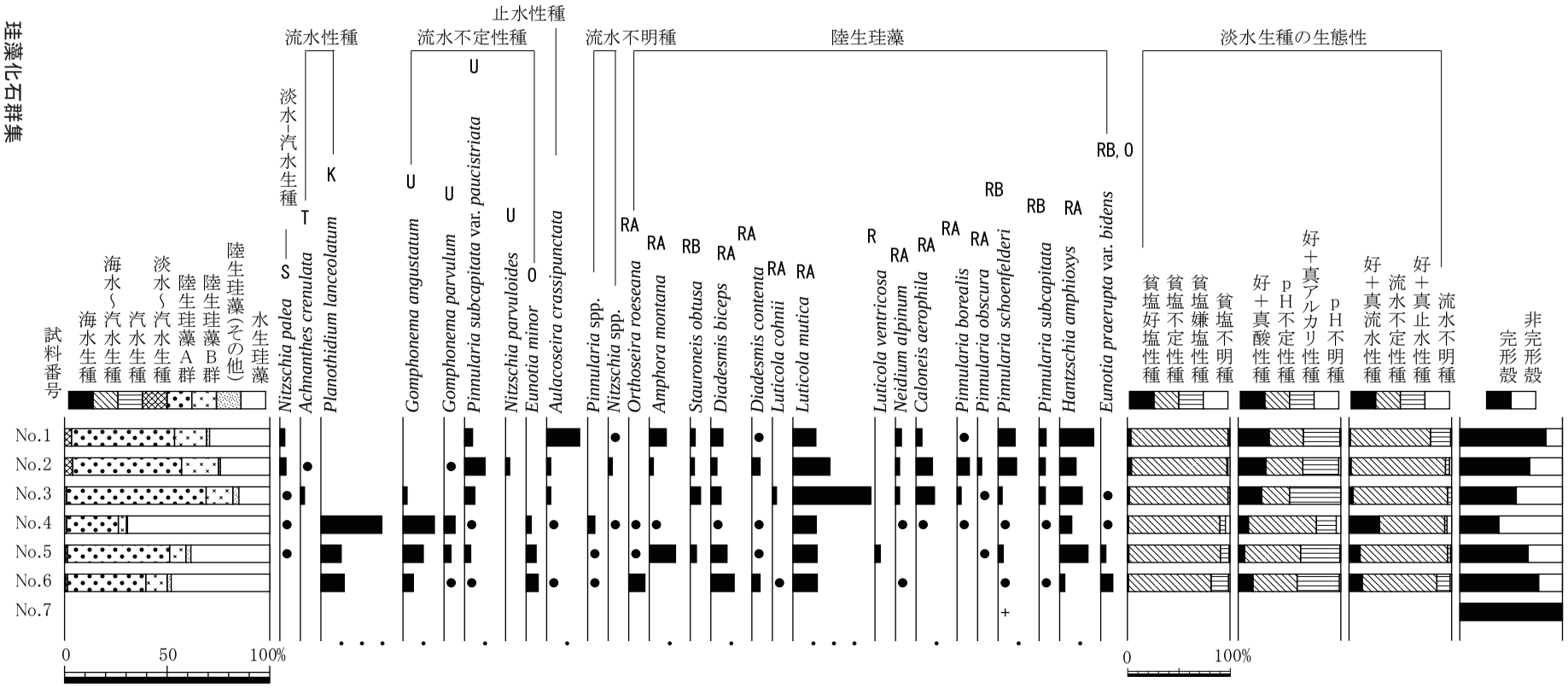
第２表　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境							
試料番号	塩分	pH	流水	指標種	1	2	3	4	5	6	7
Diatomella balfouriana (W.Smith)Greville	Ogh-ind	ind	ind	RB	−	−	−	−	−	2	−
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1	−	−	−	−	−	−
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	2	6	2	4	−	−	−
Pinnularia brebissonii (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	−	−	−	−	1	−	−
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		−	−	−	3	−	−	−
Pinnularia cardinalis (Ehr.)W.Smith	Ogh-hob	ac-il	ind		−	−	−	1	−	−	−
Pinnularia divergentissima (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		−	1	−	−	−	−	−
Pinnularia episcopalis Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind		−	−	−	−	−	1	−
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	−	−	−	1	−	−	−
Pinnularia gibba var. *linearis* Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		−	−	−	2	−	1	−
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	−	−	−	−	−	1	−
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	−	−	1	1	1	−
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	−	2	1	−	2	−	−
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	−	−	−	−	−	3	−
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	17	9	2	3	5	1	1
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	−	−	−	−	−	2	−
Pinnularia silvatica Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	−	1	1	−	−	−	−
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	7	3	3	3	−	2	−
Pinnularia subcapitata var. *paucistriata* (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	U	8	10	5	1	6	2	−
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	−	−	7	2	2	−
Sellaphora bacillum (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	−	−	−	−	1	−
Sellaphora laevissima var. *perhibita* (Hust.)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind		−	−	−	−	−	1	−
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	−	−	−	1	1	1	−
管縦溝類											
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	34	8	11	12	28	5	−
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2	1	−	−	1	1	−
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	5	3	1	2	1	−	−
Nitzschia parvuloides Cholnoky	Ogh-ind	ind	ind	U	−	2	−	−	−	−	−
Nitzschia cf. *perminuta* (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	2	−	−	−	−	−	−
Nitzschia romana Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	−	−	−	−	−	−
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	2	−	1	−	−	−
Tryblionella levidensis W.Smith	Meh			S	−	−	−	−	−	1	−
Tryblionella debilis Arnott	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	1	−	−	−	−	−
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	−	−	−	−	−	1	−
翼管縦溝類											
Surirella minuta Brebisson	Ogh-ind	ind	r-ph	U	2	−	−	−	−	−	−
短縦溝類											
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	−	−	−	−	1	1	−
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	−	−	−	1	−	1	−
Eunotia minor (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	−	−	−	5	10	12	−
Eunotia pectinalis var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	−	1	−	−	−	1	−
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	1	−	1	−	−	−	−
Eunotia praerupta var. *bidens* (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	−	−	1	1	5	12	−
海水生種					0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	1	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	1	0
淡水～汽水生種					7	4	1	2	2	2	0
淡水生種					198	96	99	200	200	199	1
珪藻化石総数					205	100	100	202	203	202	1

珪藻の適応性
H.R. :塩分濃度　　pH :水素イオン濃度　　C.R.:流水
Meh :汽水生種　　al-bi :真アルカリ性種　l-bi :真止水性種
Ogh-Meh:淡水－汽水生種　al-il :好アルカリ性種　l-ph :好止水性種
Ogh-hil:貧塩好塩性種　ind :pH不定性種　ind :流水不定性種
Ogh-ind:貧塩不定性種　ac-il :好酸性種　r-ph :好流水性種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種　ac-bi :真酸性種　r-bi :真流水性種
Ogh-unk:貧塩不明種　unk :pH不明種　unk :流水不明種

環境指標種群
C1:海水藻場指標種(小杉, 1988)
K:中～下流性河川指標種, M:湖沼浮遊性種, N:湖沼沼沢湿地指標種, O:沼沢湿地付着生種,
P:高層湿原指標種(以上は安藤, 1990)
S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)
R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

第２表　珪藻分析結果



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。各種類末尾の記号は以下の環境指標種群を示す。
K:中～下流性河川指標種，O:沼沢湿地付着生種，S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種，RA:陸生珪藻A群，RB:陸生珪藻B群，RI:未区分陸生珪藻

パラートを作成し、同定を行う。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（3）植物珪酸体分析

各試料について乾燥重量を秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

結果は、堆積物１ｇあたりの植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める（100単位にする）。また、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

３　結　果

（1）珪藻分析

結果を第２表、第36図に示す。珪藻化石の産出頻度は、地山の試料番号７で少なかった他は、多くの珪藻化石が産出する。完形殻の出現率は、試料番号４が約40%と低いが、それ以外は約70%以上と出現率が高く、高率の試料では、化石の保存状態が良いことを示している。産出分類群数は、合計で32属100分類群である。以下に、珪藻化石群集の特徴を下位より述べる。

試料６と５は、群集が近似しており、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が全体の約55%を占め、残りは淡水域に生育する淡水生種（以下、水生珪藻 と言う）である。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性）の特徴は、貧塩不定性種、pH不定性種と好＋真アルカリ性種、流水不定性種が多産する。陸生珪藻は、耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群の*Luticola mutica*、*Diadesmis biceps*、*Hantzschia amphioxys*などが約10%産出する。水生珪藻は、好流水性で中～下流性河川指標種（河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに生育する種類）の*Planothidium lanceolatum*が約10%産出し、流水不定性で付着性の*Gomphonema angustatum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種（水深が１ｍ以下の水生植物が繁茂する沼沢域に生育する種類）の*Eunotia minor*などを伴う。

試料番号４は、水生珪藻が全体の約70%を占める。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、pH不定性種、流水不定性種と好＋真流水性種が多産する。中～下流性河川指標種の*Planothidium lanceolatum*が約30%産出し、流水不定性で付着性の*Gomphonema angustatum*が約15%産出する。陸生珪藻では、陸生珪藻Ａ群の*Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys*などが産出する。

試料番号３と２は、陸生珪藻が約80%を占める。陸生珪藻Ａ群の*Luticola mutica*、が多産し、同じく陸生珪藻Ａ群の*Caloneis aerophila*、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*などを多く伴う。水生珪藻は、流水不定性で付着性の*Pinnularia subcapitata var. paucistriata*などが産出する。

試料番号１は、試料番号３と２と同様陸生珪藻が多いが、好止水性の*Aulacoseira crassipunctata*が約20%と産出する点が異なる。

（2）花粉分析

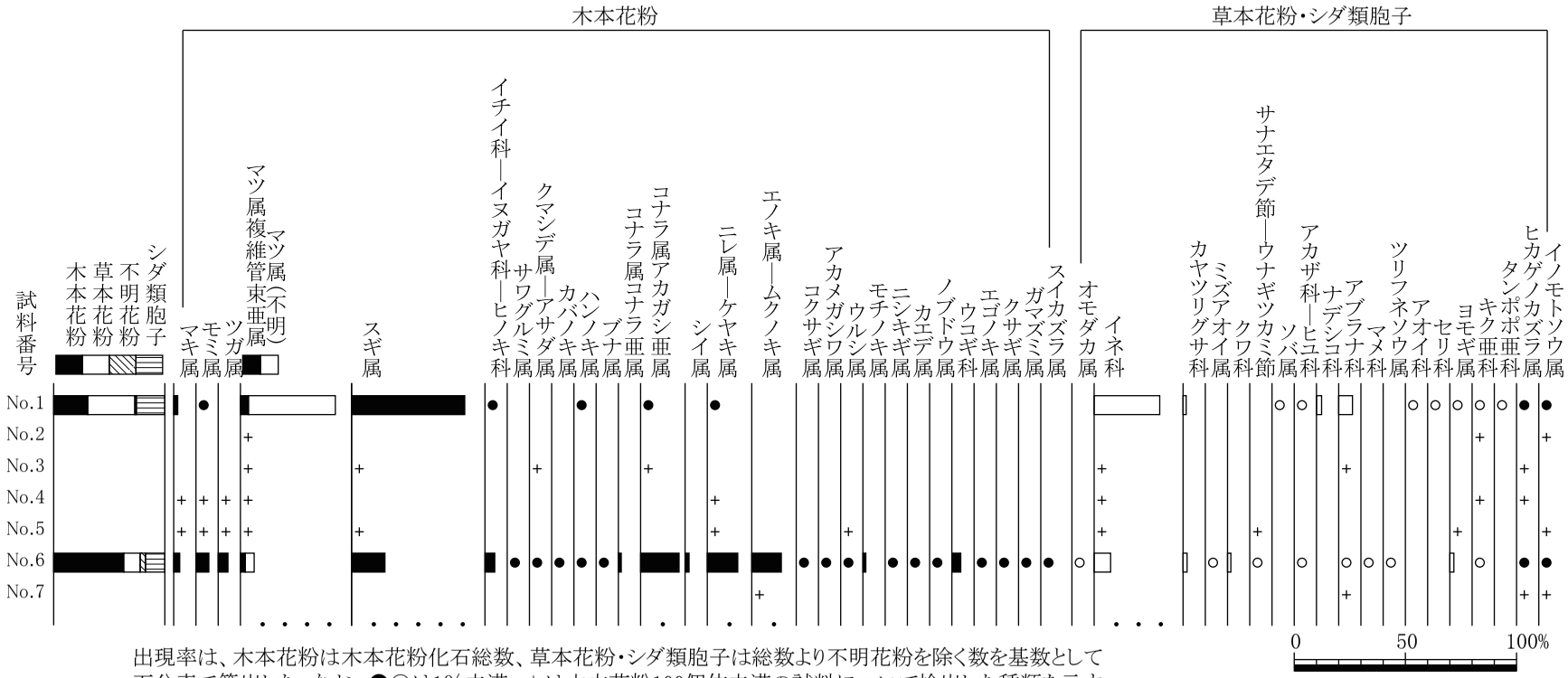
結果を第３表、第37図に示す。花粉化石は全体的に保存状態が悪く、検出数も少ない試料が多い。試料番号１と試料番号６は、比較的多く検出されるが、保存状態は不良である。

試料番号７は、シダ類胞子が検出されるものの、花粉化石はほとんど見られない。

試料番号６は、木本花粉が多い。スギ属、アカガシ亜属、ニレ属―ケヤキ属、エノキ属―ムクノキ属が20%前後検出されるが、際だって多い種類は認められない。草本類ではイネ科が比較的多く、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物がみられる。試料番号２～５は、花粉化石が少なく、シダ類胞子や

種　類	試料番号						
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7
木本花粉							
マキ属	2	−	−	1	1	6	−
モミ属	1	−	−	3	8	13	−
ツガ属	−	−	−	2	5	10	−
マツ属複維管束亜属	4	1	−	−	−	5	−
マツ属(不明)	43	−	1	2	2	9	−
スギ属	56	−	1	−	1	34	−
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	1	−	−	−	−	10	−
サワグルミ属	−	−	−	−	−	1	−
クマシデ属ーアサダ属	−	−	1	−	−	2	−
カバノキ属	−	−	−	−	−	1	−
ハンノキ属	1	−	−	−	−	1	−
ブナ属	−	−	−	−	−	2	−
コナラ属コナラ亜属	−	−	−	−	−	3	−
コナラ属アカガシ亜属	1	−	1	−	−	39	−
シイ属	−	−	−	−	−	4	−
ニレ属ーケヤキ属	1	−	−	1	2	31	−
エノキ属ームクノキ属	−	−	−	−	−	30	1
コクサギ属	−	−	−	−	−	1	−
アカメガシワ属	−	−	−	−	−	1	−
ウルシ属	−	−	−	−	1	1	−
モチノキ属	−	−	−	−	−	3	−
ニシキギ属	−	−	−	−	−	2	−
カエデ属	−	−	−	−	−	1	−
ノブドウ属	−	−	−	−	−	1	−
ウコギ科	−	−	−	−	−	9	−
エゴノキ属	−	−	−	−	−	1	−
クサギ属	−	−	−	−	−	1	−
ガマズミ属	−	−	−	−	−	2	−
スイカズラ属	−	−	−	−	−	2	−
草本花粉							
オモダカ属	−	−	−	−	−	1	−
イネ科	104	−	3	1	5	25	−
カヤツリグサ科	5	−	−	−	−	6	−
ミズアオイ属	−	−	−	−	−	2	−
クワ科	−	−	−	−	−	5	−
サナエタデ節ーウナギツカミ節	−	−	−	−	3	1	−
ソバ属	2	−	−	−	−	−	−
アカザ科ーヒユ科	3	−	−	−	−	1	−
ナデシコ科	8	−	−	−	−	−	−
アブラナ科	22	−	1	−	−	2	1
マメ科	−	−	−	−	−	1	−
ツリフネソウ属	−	−	−	−	−	1	−
アオイ科	1	−	−	−	−	−	−
セリ科	1	−	−	−	−	−	−
ヨモギ属	1	−	−	−	2	6	−
キク亜科	3	1	−	1	−	1	−
タンポポ亜科	1	−	−	−	−	−	−
不明花粉	5	−	−	−	3	17	−
シダ類胞子							
ヒカゲノカズラ属	1	−	1	1	−	1	2
イノモトソウ属	2	1	−	−	9	1	8
他のシダ類胞子	89	7	28	13	36	60	92
合　計							
木本花粉	110	1	4	9	20	226	1
草本花粉	151	1	4	2	10	52	1
不明花粉	5	0	0	0	3	17	0
シダ類胞子	92	8	29	14	45	62	102
総計(不明を除く)	353	10	37	25	75	340	104

第３表　花粉分析結果



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

針葉樹が検出される程度で、種類数も少ない。試料番号１は、草本花粉の割合が多く、その中でもイネ科の割合が高い。他に、カヤツリグサ科、アブラナ科がみられ、栽培種としてはソバ属が検出される。木本花粉は、マツ属とスギ属が多く、他の種類はほとんど見られないため、単調な組成である。

（３）植物珪酸体分析

結果を第４表、第38図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

試料番号７では植物珪酸体含量が極めて少なく、100個 /g 程度である。不明などがわずかに認められるに過ぎない。

試料番号６では植物珪酸体含量が増加し、約3,200個 /g となる。ネザサ節を含むタケ亜科やヨシ属が認められ、栽培植物のイネ属が出現する。

試料番号５では植物珪酸体含量が最大となり、約11,000個 /g となる。ネザサ節を含むタケ亜科とともにイネ属の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが見られる。イネ属の含量は、短細胞珪酸体が約900個 /g、機動細胞珪酸体が約300個 /g である。また、籾（穎）に形成される穎珪酸体も検出される。

試料番号４と３では植物珪酸体含量が減少し、6,000個 /g 程度となる。ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが見られる。イネ属も検出されるものの、その含量は100個 /g 未満～100個 /g 程度である。

試料番号２と１では植物珪酸体含量がさらに減少し、3,000個 /g 前後となる。タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが見られる。イネ属は試料番号１で見られ、その含量は短細胞珪酸体が約300個 /g、機動細胞珪酸体が100個 /g 程度である。

４．考　察

環濠充填堆積物の珪藻化石群集は、下部と上部層準（試料番号４と３）を境に異なる。弥生時代後期に形成された下部層準（試料番号６～４）は、好気的環境に生息する陸生珪藻と中～下流性河川指標種や沼沢湿地付着生種を含む水生珪藻が混在する群集組成を示す。このことから、当時の環濠内は流水の影響を受けるものの定常的ではなく、乾燥する時期も存在したと思われる。

充填堆積物上部層準（試料番号３と２）では、陸

（個/g）

種　類	試料番号 1	2	3	4	5	6	7
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	300	－	<100	－	900	<100	－
メダケ属ネザサ節	－	300	500	500	700	400	－
タケ亜科	400	600	600	1200	800	600	－
ヨシ属	100	<100	－	－	400	<100	－
ウシクサ族ススキ属	－	200	<100	<100	400	－	－
イチゴツナギ亜科	300	<100	200	<100	200	－	－
不明	1900	900	2500	2100	3900	900	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	100	－	100	<100	300	－	－
メダケ属ネザサ節	－	200	600	300	500	200	－
タケ亜科	200	400	1000	500	700	200	－
ヨシ属	<100	－	－	－	300	－	－
ウシクサ族	－	－	－	－	200	－	－
不明	300	200	600	1800	1400	700	<100
合　計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	3100	2100	3900	3900	7400	2000	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	600	800	2300	2800	3400	1100	<100
総　計	3700	2900	6200	6700	10800	3200	100
珪化組織片							
イネ属穎珪酸体	－	－	－	－	＊	－	－
イネ属短細胞列	＊	－	－	－	＊	－	－

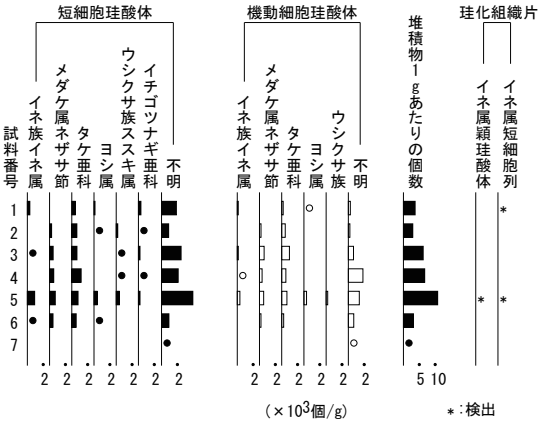
含量は、10の位で丸めている(100単位にする)
<100:100個/g未満、　－:未検出、　＊:検出

第４表　植物珪酸体含量

生珪藻が優占しており、好気的環境下にあったとみられる。この時期は、古墳時代の土器が投棄されるなど環濠としての機能は失っていた時期に相当する。環濠周辺の土壌が再堆積する状況にあったことが推定される。

一方、花粉分析結果をみると、いずれの層準も花粉化石の産出状況が悪い。花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村 ,1967; 徳永･山内 ,1971; 三宅･中越 ,1998 など)。珪藻分析の結果をみても、常に好気的環境が想定されており、これが花粉化石が検出されない主な要因であると思われる。また、花粉化石の検出が少ない試料で、シダ類胞子や針葉樹の産出が目立つ傾向がある。これはこれらが広葉樹花粉に比べ風化に強いことが原因である。

環濠充填堆積物で花粉化石が検出されたのは、最下部（試料番号６）のみである。花粉化石群集は、際だって多い種類がみられないのが特徴である。これは、遺跡の立地が河口付近に存在するため、集水域に存在する様々な植生域から花粉化石がもたらされた結果、広範囲の植生を反映していることが原因と思われる。このような傾向は河口付近の花粉化石群集にはよく見られる傾向である。木本花粉のうち、アカガシ亜属、シイノキ属は常緑広葉樹であり、後背山地などに安定した森林を形成していたと思われる。モミ属、ツガ属、スギ属、ヒノキ科などは谷斜面、扇状地、谷頭など土地条件の悪い場所を中心に



堆積物1ｇあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g 未満を示す

第 38 図　植物珪酸体含量

生育していたと考えられる。また、サワグルミ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属―ムクノキ属の中には水辺を好む種類が多い。また、成長が早く、萌芽による更新も可能なため洪水などで傷害を受けても、先駆的に森林を形成することが可能である。このことから、河川沿いを中心に生育していたと思われる。

周辺の既存の調査例をみると、松阪市（旧一志郡嬉野町）に所在する柏木遺跡では、約 3,000 年前の土層の分析結果から、後背の産地・扇状地等にスギ属､モミ属を中心とする温帯性針葉樹林を主体とし、シイノキ属等の暖温帯性常緑広葉樹林を伴う植生が、低地や丘陵縁辺などの河畔にはハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等が存在したと推測されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2004)。また、四日市市に所在する蒐上遺跡の弥生時代中期後半の土層の分析結果から、アカガシ亜属とシイノキ属を主体とする暖温帯性常緑広葉樹林が分布していたとされている（金原ほか ,2005)。今回の結果は、これらの既存の調査結果と比較しても調和的である。

草本類は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等が多く検出される。いずれも開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であり、他にも同様の生育環境を示す種群が検出されることから、遺跡周辺の開かれた草地に生育していたものと思われる。

植物珪酸体組成をみると、珪藻化石でみられるような、弥生時代終末期の充填堆積物下部と、古墳時代の充填堆積物上部との間に大きな違いは認められない。ネザサ節、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが検出されており、これらの生育がうかがえる。なお、栽培植物のイネ属が充填堆積物最下部から連続して検出されているが量は少ない。環濠が流路と一体で機能していたことを考えると、上流域で行われた稲作に由来すると考えられる。試料番号５では他の試料に比べてイネ属の含量が若干高く、籾に形成される珪酸体も検出される。この層には炭化物の沈殿が認められていることから、これらの中に稲藁や稲籾に由来するものが含まれている可能性がある。

試料番号１は現表土である。珪藻化石では、止

水生種の*Aulacoseira crassipunctata*が産出した。本種は、電解質成分の少ない貧栄養の泥炭池で植物に付着して生育する（Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991）種とされる。現在は畑として利用されているが、止水生種の多産や、多少なりともイネ属の植物珪酸体が検出されることから、一時的に水田として利用されていた時期が存在した可能性もある。また、花粉化石では、マツ属とスギ属が多い。現存植生でも、マツやスギの植林地が広がっており、これらに由来すると思われる。また草本類が多く、イネ科やアブラナ科などが検出される。これらは開けた草地を好むものが多いことから、周辺に生育していたいわゆる「雑草」に由来すると思われるが、イネ科やアブラナ科には多くの栽培植物が含まれることから、一部は栽培種に由来する可能性もある。また、栽培種であるソバ属が検出されることから、周辺での栽培が行われていたと考えられる。

〔引用文献〕

- 安藤　一男 ,1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用 . 東北地理 ,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10, 35-47.
- 原口　和夫・三友　清史・小林　弘 ,1998, 埼玉の藻類珪藻類 . 埼玉県植物誌 , 埼玉県教育委員会 ,527-600.
- Hustedt, F.,1937-1939,Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java,, Bali und Sumatra. *Archiv fur Hydrobiology, Supplement*, 15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790,16:1-155,16:274-394.
- 伊藤　良永・堀内　誠示 ,1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 珪藻学会誌 ,6,23-45.
- 小杉　正人 ,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 ,27,1-20.
- 小林　弘・出井　雅彦・真山　茂樹・南雲　保・長田　啓五 ,2006, 小林弘珪藻図鑑 . 第 1 巻 , ㈱内田老鶴圃 , 531p.
- 金原　正子・木寺　きみ子・高井　幸徳・桑名　志保・竹田　麻里子 ,2005, 土壌分析 . 三重県埋蔵文化財調査報告 227-7 蒐上遺跡発掘調査報告－本文編－ , 三重県埋蔵文化財センター ,435-453.
- 近藤　錬三 ,2010, プラント・オパール図譜 . 北海道大学出版会 ,387p.
- Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa. *BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.* J.CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1. Teil: Naviculaceae. *Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1.* Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae, *Surirellaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.* Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3. Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. *Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.* Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. *Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4.* Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R. L.,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. *Environmental Monitoring Ser.* EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati. 334p.
- 三宅　尚・中越　信和 ,1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態 . 植生史研究 ,6,15-30.
- 中村　純 ,1967, 花粉分析 . 古今書院 ,232p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2004, 自然科学分析 . 嬉野町埋蔵文化財調査報告書 22 集　一般国道 23 号中勢道路（14 工区）建設事業に伴う柏木遺跡発掘調査報告書 , 嬉野町教育委員会 ,19-39.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.,1990,The diatoms. *Biology & morphology of the genera*. Cambridge University Press, Cambridge. 747p.
- 田中　正昭 ,2002, 日本淡水産動・植物プランクトン図鑑 .584p.
- 徳永　重元・山内　輝子 ,1971, 花粉・胞子 . 化石の研究法 , 共立出版株式会社 ,50-73.
- Vos, P. C. & H. de Wolf,1993,Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologica*, 269/270,285-296.
- 渡辺　仁治・浅井　一視・大塚　泰介・辻　彰洋・伯耆　晶子 ,2005, 淡水珪藻生態図鑑 . 内田老鶴圃 ,666p.
- 柳沢　幸夫 ,2000, Ⅱ -1-3-2-(5) 計数・同定 . 化石の研究法－採集から最新の解析法まで－ , 化石研究会 , 共立出版株式会社 ,49-50.

Ⅵ. 結　　語

1　ＳＤ 10・12・13 の時期

ＳＤ10 からＳＤ12 へと弧状につながる溝とそれから二股に分かれるＳＤ 10 からＳＤ 13へ延びる溝は、今回の調査における主要な成果で、遺物の大半が出土している。これらの遺物をもとに、上村の様式設定[①]を中心に、津市の雲出島貫遺跡[②]や尾張[③]の状況を交え、これらの溝の掘削時期からその後の状況を考察する。

まず、掘削時期に迫る遺物として下層出土遺物がある。ＳＤ12・13 から出土があり、ＳＤ 12 から比較的多く出土している。ただし、全体形が分かるものはない。弥生時代中期に遡るものが目立つが、近江系の受口甕やＳ字状口縁台付甕０類に共通する形態のものがありⅥ－１様式、雲出島貫遺跡では島貫Ⅰ期～島貫Ⅱ期古相に相当すると考えられる。高杯ではⅥ－２様式までは十分降るものも含まれ、雲出島貫遺跡では島貫Ⅱ期新相から島貫Ⅲ期古相まで降る可能性をもつ。高杯がやや新しい様相を示すことから、掘削時期はⅥ－２様式、尾張では廻間Ⅰ式２段階に求めることにする。この下層はＳＤ10 にもつながる（第７図）。既述したように、ＳＤ 10・12・13 の分岐点は滑らかな平面形で続いており、溝壁や底部にも顕著な変換点はないため、検出状況からは時期差を想定できない。以上により、ＳＤ10 からＳＤ12 へと弧状につながる溝とそれから二股に分かれるＳＤ 10 からＳＤ 13 へ延びる溝は、同時に存在したものと断定することができる。ＳＤ 13出土遺物と30 ｍ以上離れ、ＳＤ 12 の底部で検出したＳＫ 17 出土遺物（475）が接合したことも、これの傍証となる事例である。

下層の埋没が完了した後については、ＳＫ９からの混入が少ないＳＤ 12 出土の甕でみると、Ｓ字状口縁台付甕Ａ類が主体であるが、０類とＢ類を含む。Ⅵ－２様式を中心にⅥ様式を降るまで、雲出島貫遺跡では島貫Ⅰ期から島貫Ⅲ期古相までの幅がある。高杯ではⅤ様式に遡るものも散見されるが、屈曲が明瞭な深い杯部と内弯する脚をもつものから屈曲が不明瞭で浅い杯部と短く直線状に開く脚をもつものまでが主体である。したがって、Ⅵ－１～Ⅵ－３様式、雲出島貫遺跡では島貫Ⅱ期新相から島貫Ⅲ期新相までの幅で考えられる。ここでも雲出島貫遺跡と対比すれば高杯がやや新しい様相を示す。全体形の明瞭な高杯を重視すべきであろうが、Ｓ字状口縁台付甕Ｃ類の出土がないため、ＳＤ12 が機能を失うのはⅥ－３様式以降、雲出島貫遺跡では島貫Ⅲ期古相、尾張では廻間Ⅱ式２段階とする。

以上、高杯がやや新しい様相を示すことについては今後の類例の増加を待つこととし、ＳＤ 10・12・13 はⅥ－2 様式（廻間Ⅰ式２段階）には掘削され、Ⅵ－３様式を降る廻間Ⅱ式２段階に埋没したものと結論付けたい。

2　ＳＤ 10・12・13 の性格

ＳＤ 10からＳＤ12 へ続く溝は弧状を呈し、時期も弥生時代終末期ともなれば、環濠を想定することは容易である。しかし、調査区の南側に並行する県道建設予定地で行われた確認調査（第３図）では検出されていない。県道に至るまでに完結するとすれば極度な楕円形となり環濠とするには不都合で、溝の性格も不明なものとなる。したがって、確認調査坑の間を抜けて延びている可能性が高いものと推測せざるを得ない。一方、環濠内側での集落跡の検出にも至っていない。調査区が狭小なため、集落跡は調査区外に想定することになる。しかし、前述したように県道建設時の確認調査では集落跡を示す根拠は検出されなかった。この部分は耕作土直下が検出面となるため、集落跡は既に削平されて消滅した可能性を考えたいが、耕作土に含まれる遺物や隣接する畑に散布する遺物も目立つ状況ではなく疑問も残る。しかし、溝の規模は環濠として機能し得るものである。弥生時代終末期の短い期間のみに機能する環濠は小規模な集落に多いものとされ、廻間Ⅱ式に消滅することも他の環濠と歩調を合わす[④]ものである。

次にＳＤ 10からＳＤ13 へ続く溝であるが、地形的には高所から低所へ続くため、流路としての機能が

考えられる。形状は壁や底部が平滑で、自然流路とするよりは人工的な掘削の可能性が高い。最下層には白色砂を挟むため若干の流水が想定できる。調査時においても調査区南端では弱いながらも湧水点に達しており、ＳＤ13へ向けての排水を想定し易い。ＳD13で多く出土した弥生時代中期の遺物は、多数重複する土坑からの混入とした。これらの土坑は、この地下水脈を狙った井戸の可能性も考えられる。そうすれば、ＳＤ10･13は結果的に地下水脈に沿って掘削された可能性が生じる。掘削前の現況が、地下水脈と相関し、水の流れ易い微地形であったのかもしれない。環濠廃絶後においてもＳＫ９にみられる湿地状の窪地として残ることも傍証となるものと思われる。

ＳＺ11はⅥ－３様式、廻間Ⅰ式３段階～廻間Ⅱ式１段階古相に並行する。環濠の埋没前に相当し、環濠が囲む外側にＳＺ11が位置することになる。調査区が狭小で土坑や攪乱坑が重複する状況ではあるが、ＳD10・13は西側に回りこみ、ＳZ11を取り込むように見えなくもない。ＳD10・12とSD10・13の連結する二つの環濠が存在した可能性も出てくるが、ここではその可能性に止めたい。

このように、環濠とするには否定的な要素も残るが、香川県の龍川五条遺跡では弥生時代前期の環濠が自然流路に接続する状況が検出されている[5]こともあり、当遺跡においても、SD10・12・13は排水機能を付属した環濠としておきたい。

３　変遷

今回の調査では縄文時代晩期と弥生時代前期の遺物が若干出土し、この時期から当遺跡での生活が始まったようである。これは当遺跡の北東２㎞に位置し、拠点集落とされる納所遺跡の影響を推測することができる。弥生時代中期から後期かけての遺物も環濠に混入する。特に中期の遺物は一定量出土し、近隣に中期の集落が存在したことが想定できる。井戸状の土坑の存在もあり、ある程度の人口を有していたようである。後期に属する遺物は比較的少なく、この集落が後の環濠をもつ集落にはそのままつながらず、盛衰があるようである。ただし、調査区南側近辺の竹林で発見されたとされる県指定文化財「野田銅鐸」は三遠４式とされ、弥生時代後期の山中式に並行する[6]とされる。この時期の遺物は極めて少ないものの、銅鐸を持ち得る集落であったことが推測される。

そして弥生時代終末期には環濠が設けられるものの短期間で消滅する。環濠跡のうちSD10からＳＤ13にかけては完全に埋まることなく、湿地や乾燥を繰返し、古墳時代中頃には再び遺物が投棄され、人々の活動が活発になる。しかし長く続かず、律令期には完全に断絶し、平安時代末から鎌倉時代に再び遺物の出土を見る。しかし散見的であり、室町時代には再び断絶し、現集落の起源となる近世集落への連続性は確認できないのである。

〔註〕

① 上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年東海編』木耳社　2002年6月25日

② 川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001年3月

③・愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990

・赤塚次郎「「Ｓ字甕」について」『欠山式土器とその前後』愛知考古学談話会　1986年11月1日

・原田幹「Ｓ字甕の波及と定着をめぐる問題」『Ｓ字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会資料

④ 石井智大「伊勢湾西岸地域における弥生時代後期集落の様相」『伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・後期編　伊勢湾岸域の後期弥生社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト　2011年11月20日

⑤ 香川県教育委員会ほか『龍川五条遺跡』1996.12

⑥ 石橋茂登「東海地方の銅鐸と土器」『土器型式論の実践的研究』千葉大学大学院人文社会科学研究科 2010.2

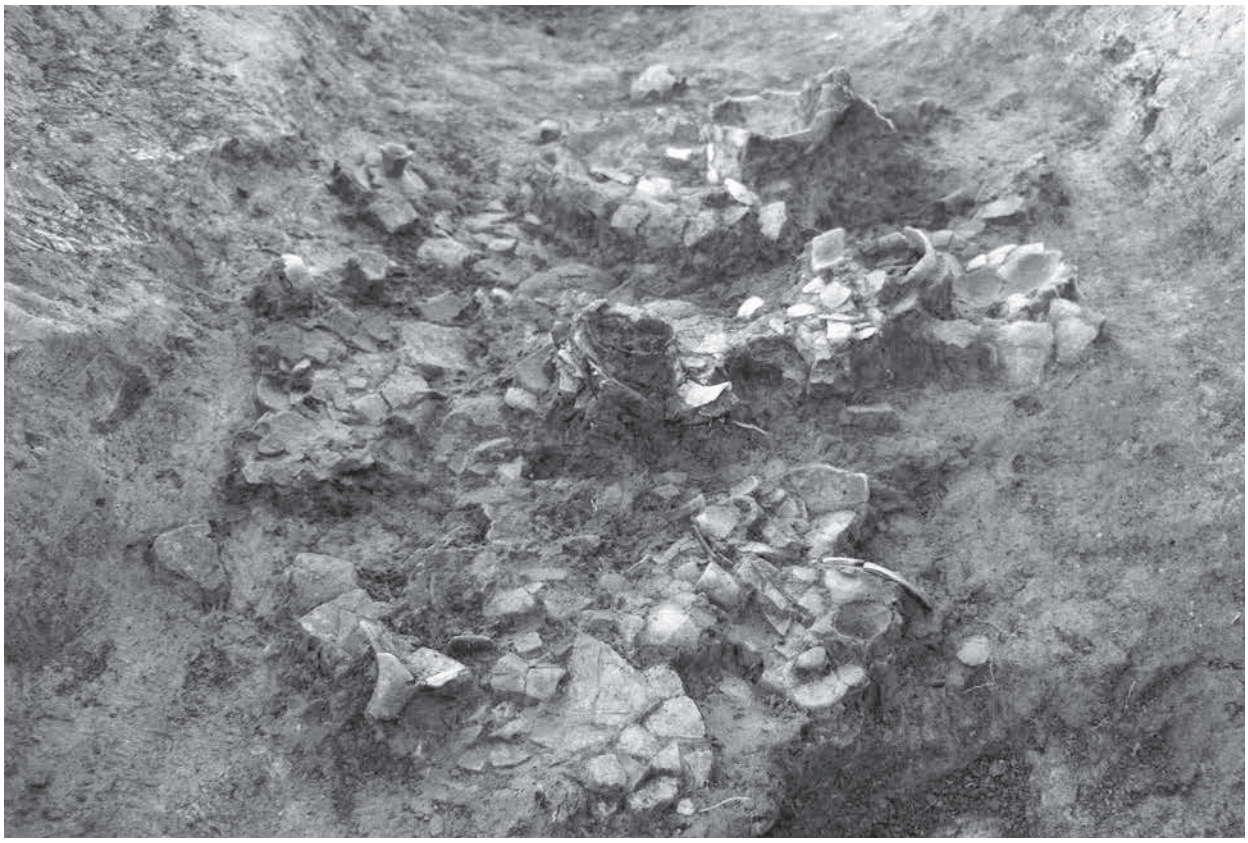
調査前風景（西から）

調査区全景（東から）

写真図版２

ＳＤ１２（東から）

ＳＤ１２遺物出土状況（北東から）



ＳＤ１２遺物出土状況（東から）

ＳＤ１２遺物（207・380・118）出土状況（南東から）

写真図版４

ＳＤ１０・１２・１３の分岐点からＳＤ１２を望む（西から）

ＳＤ１２からＳＤ１０・１２・１３の分岐点を望む（東から）

ＳＤ１２・ＳＫ１７（北から）

ＳＤ１３（南から）

出土遺物

出土遺物

154

102

137

519

613

130

164

165

469

86

514

121

483

476

603

614

出土遺物

出土遺物

66

63

65

486

467

594

473

734

485

出土遺物

108

167

598

600

735

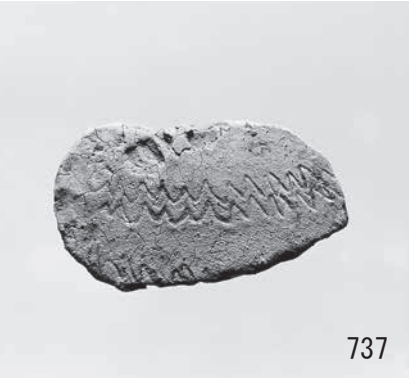
487

517

602

601

736


737

544

669

出土遺物

738

187

216

201

676

686

204

283

322

320

318

326

321

688

329

出土遺物

出土遺物

412

417

出土遺物

405

407

421

426

出土遺物

出土遺物

374

382

416

378

389

428

出土遺物

431

386

395

435

419

440

452

696

575

335

506

574

425

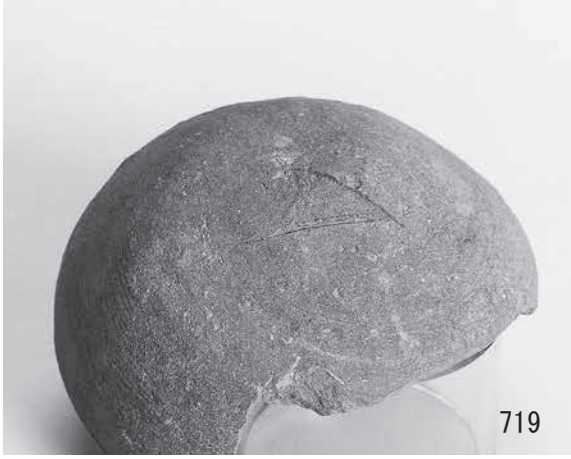
510

549

457

出土遺物

714


719

720

722

460

557

726

727

723

724

725

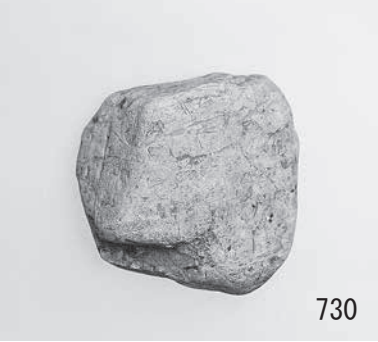
出土遺物

464

462

463

728


730

729

731

40

465

512

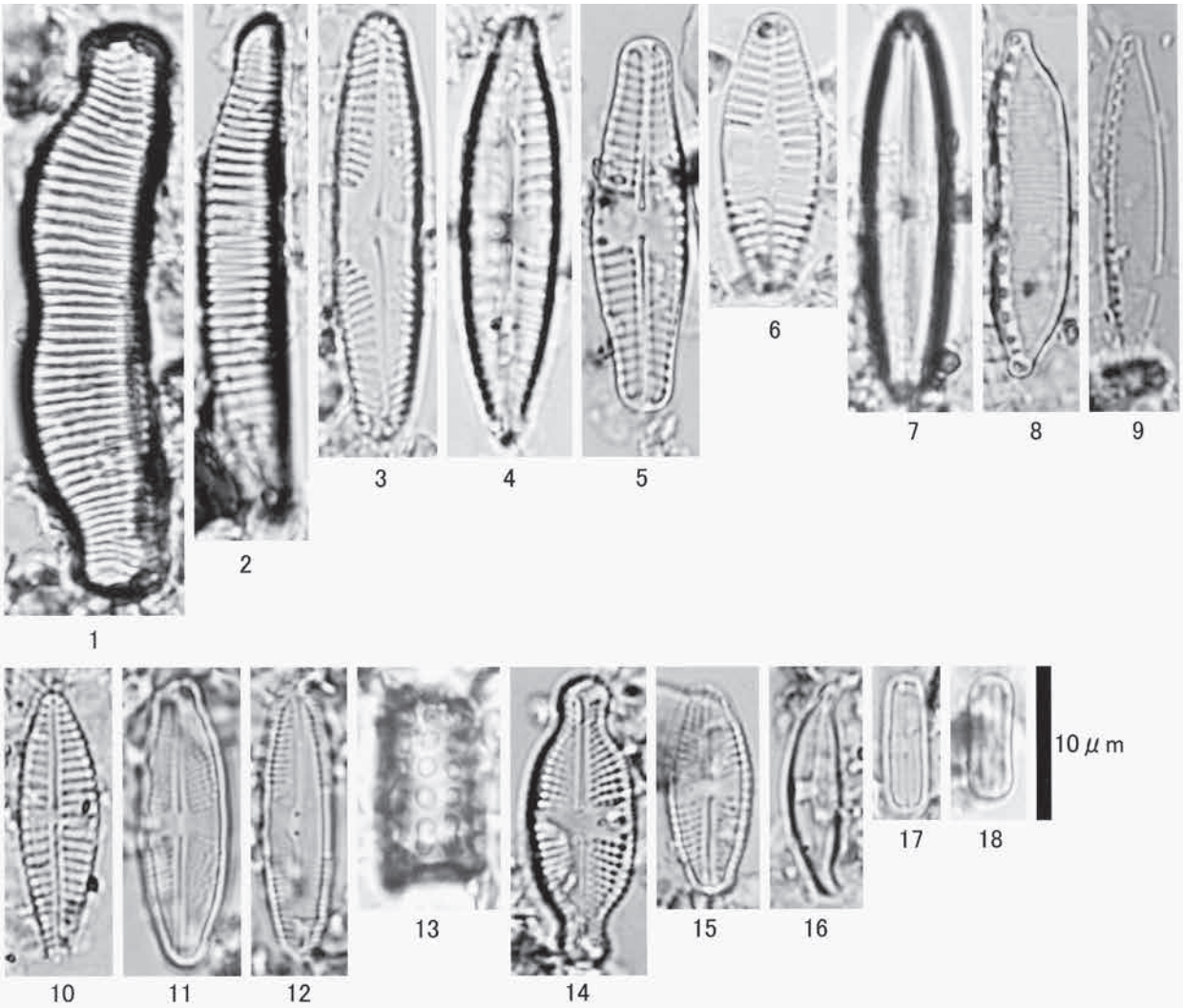
745

744

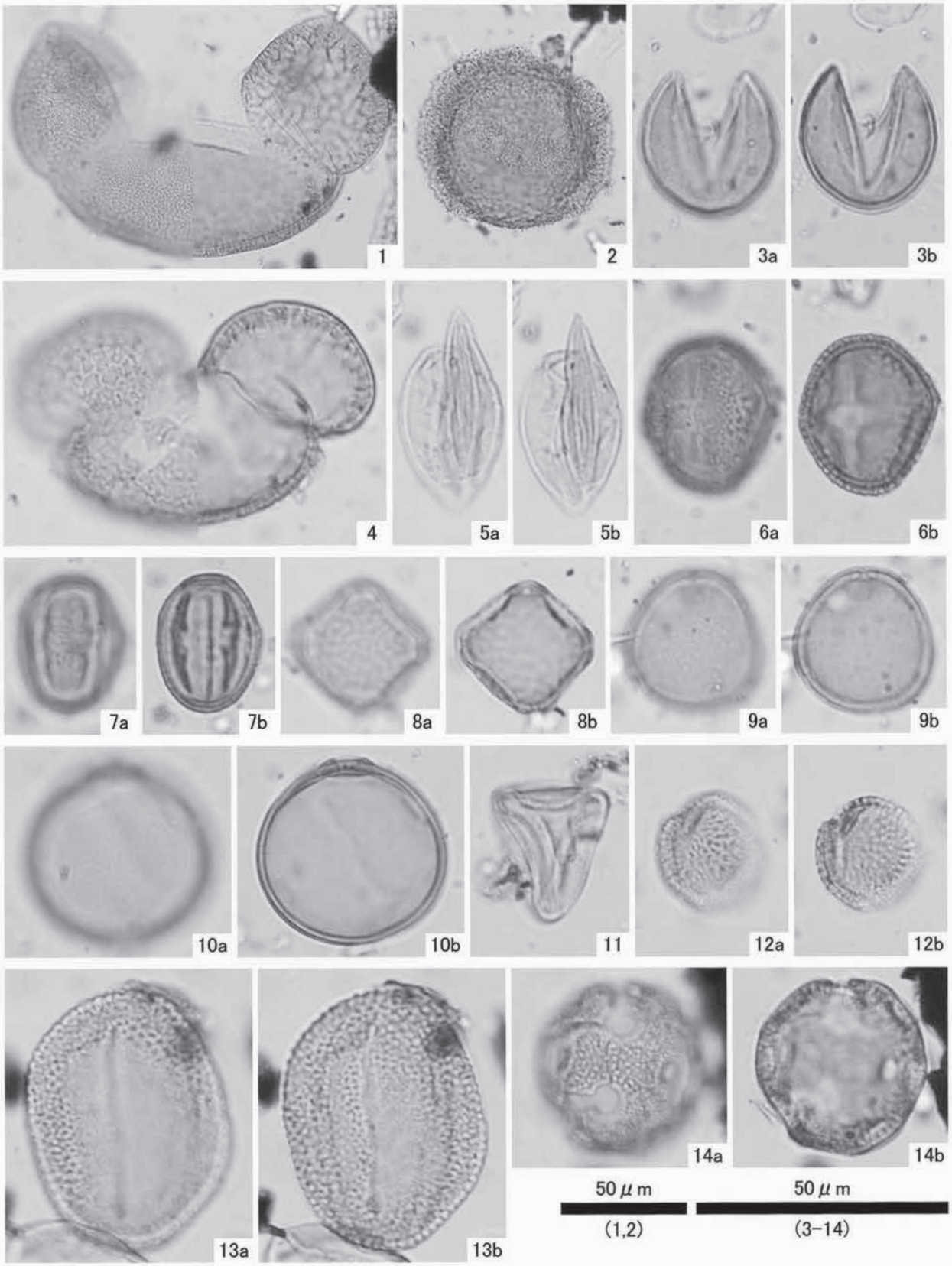
732

出土遺物

接合した鉄滓

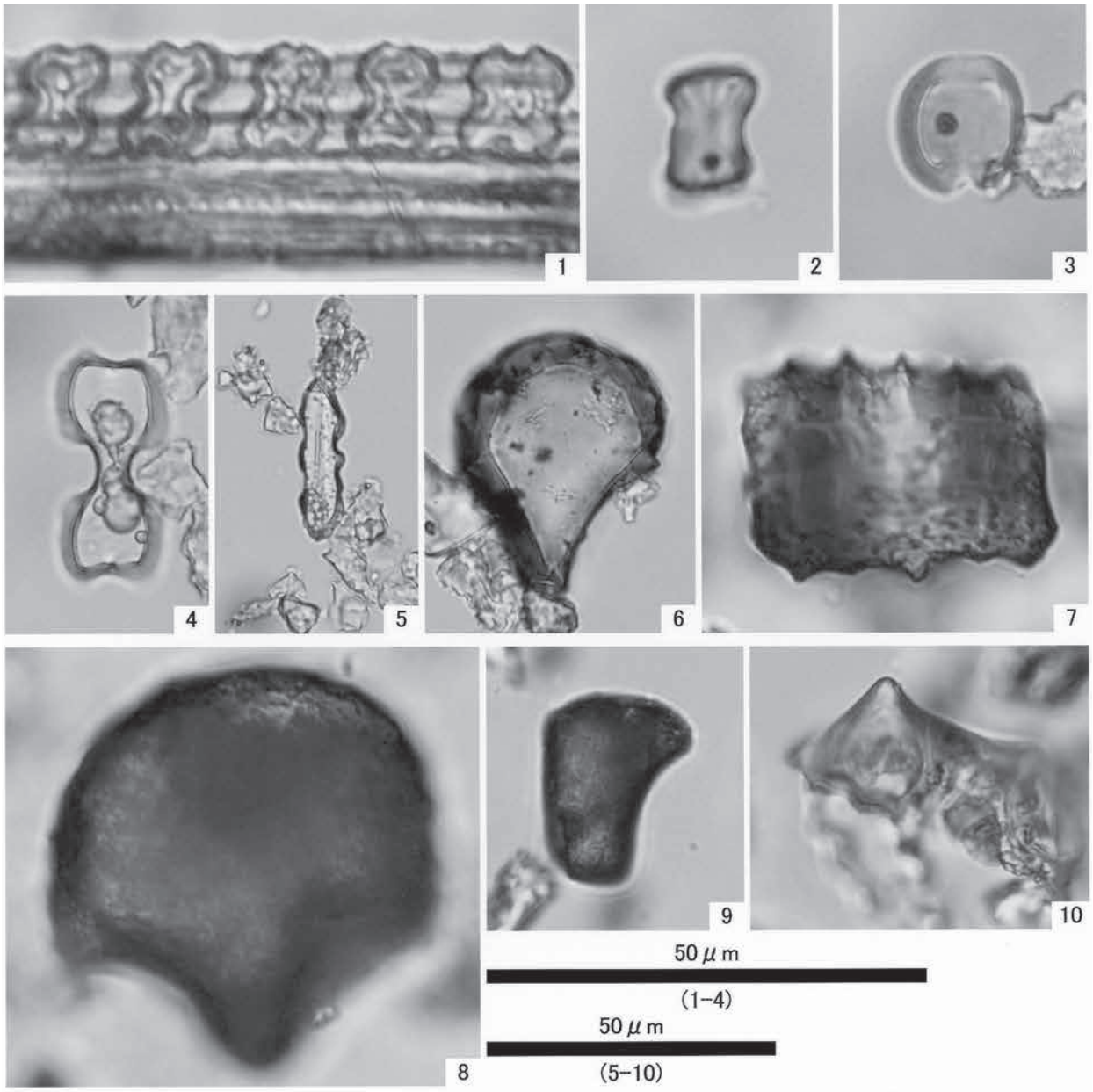


1 . *Eunotia praerupta* var. *bidens* (Ehren.)Grunow(No.5)
2 . *Eunotia implicata* Noepel & Lange-Bertalot(No.5)
3 . *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* (Grun.)Cleve(No.1)
4 . *Gomphonema angustatum* (Kuetz.)Rabenhorst(No.4)
5 . *Planothidium lanceolatum* (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot(縦溝殻:No.5)
6 . *Planothidium lanceolatum* (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot(非縦溝殻:No.4)
7 . *Neidium alpinum* Hustedt(No.1)
8 . *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(No.1)
9 . *Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith(No.3)
10 . *Gomphonema parvulum* (Kuetz.)Kuetzing (No.5)
11 . *Stauroneis obtusa* Lagerstedt(No.1)
12 . *Caloneis aerophila* Bock(No.1)
13 . *Aulacoseira crassipunctata* Krammer(No.1)
14 . *Luticola ventricosa* (Kuetz.)D.G.Mann(No.5)
15 . *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(No.2)
16 . *Amphora montana* Krasske(No.1)
17 . *Diadesmis contenta* (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann(No.6)
18 . *Diadesmis biceps* Arnott ex Grunow in Van Heurck(No.1)



1．モミ属(No.6)
2．ツガ属(No.6)
3．スギ属(No.6)
4．マツ属(No.6)
5．イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科(No.6)
6．ウコギ科(No.6)
7．コナラ属アカガシ亜属(No.6)
8．ニレ属ーケヤキ属(No.6)
9．エノキ属ームクノキ属(No.6)
10．イネ科(No.6)
11．カヤツリグサ科(No.6)
12．アブラナ科(No.1)
13．ソバ属(No.1)
14．ナデシコ科(No.1)

花粉化石



1．イネ属短細胞列(No.5)
2．ネザサ節短細胞珪酸体(No.5)
3．ヨシ属短細胞珪酸体(No.5)
4．ススキ属短細胞珪酸体(No.5)
5．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(No.1)
6．イネ属機動細胞珪酸体(No.3)
7．ネザサ節機動細胞珪酸体(No.5)
8．ヨシ属機動細胞珪酸体(No.5)
9．ウシクサ族機動細胞珪酸体(No.5)
10．イネ属穎珪酸体(No.5)

報　告　書　抄　録

ふりがな	はやしがいといせきはっくつちょうさほうこく
書名	林垣内遺跡発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	333
編著者名	奥田勝久　　森川常厚
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　℡　0596-52-1732　FAX　0596-52-7035
発行年月日	西暦２０１２年１１月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はやしがいといせき 林垣内遺跡	みえけんつしのだ 三重県津市野田	２０１	ａ８７３	34° 35′ 2″	136° 29′ 7″	20100922～ 20101224	651	平成22年度広域河川改修（岩田川工区）

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
林垣内遺跡	散布地	弥生・古墳	環濠	弥生土器　土師器　須恵器 砥石　鞴羽口	排水路が接続する環濠から弥生時代終末期（古墳時代初頭）の遺物が多く出土。

要　　約	低位丘陵北端部、段丘状の緩斜面に位置する。弥生時代前期から終末期（古墳時代初頭）、古墳時代中頃、鎌倉時代の遺物が出土するが、検出された主な遺構は弥生時代終末期の環濠である。この環濠には排水路と思われる溝が接続しており、排水機能を付属した環濠と考えられる。弥生時代終末期の遺物が多量に投棄され埋没するが、一部は古墳時代中頃でも窪みまたは水路状に残り、須恵器や鞴羽口等が投棄されている。

三重県埋蔵文化財調査報告　３３３

林垣内遺跡発掘調査報告
2012(平成 24)年 11 月
編集
発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　株式会社　アイブレーン